岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第517集

穂貫田（ほぬきだ）・駒板（こまいた）・山口（やまぐち）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

2008

岩手県県南広域振興局
北上総合支局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団

穂貫田・駒板・山口遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業更木新田地区に関連して平成18年度に発掘調査された花巻市穂貫田、駒板、山口遺跡の成果をまとめたものです。

ほ場整備事業に伴う水路や道路予定範囲を対象としたため、調査範囲は細くて長く、また、一部は精査しておりますが、確認調査が中心でした。

穂貫田遺跡では、縄文時代後期前葉、晩期中～後葉の集落跡、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の集落跡、駒板遺跡では、縄文時代後期前葉の集落跡が発見されました。縄文時代の集落跡は、竪穴住居跡や石器の道具は見つかっていないことから、長く住み続けるものではなく、野営地に近かったようです。駒板遺跡のその「野営地」は、現在の水路の両脇にあることから、当時からここに水が流れていた可能性が高いことが分かりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　武　田　牧　雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県花巻市東十二丁目22地割60－4ほかに所在する穂貫田遺跡、同23地割31－1ほかに所在する駒板遺跡、同23地割169－3に所在する山口遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　今回の調査は、経営体育成基盤整備事業更木新田地区に伴う事前の発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部に農家負担分を補助している。

3　発掘調査期間、調査面積、遺跡番号、略号は、次の通りである。

穂貫田遺跡　平成18年4月7日～7月14日　発掘1,550㎡、確認のみ4,650㎡、計6,200㎡
ME36-2313　HND－06

駒板遺跡　平成18年7月18日～9月19日　発掘676㎡、確認のみ4,609㎡、計5,285㎡
ME36-2371　KI－06

山口遺跡　平成18年9月1日～9月19日　発掘491㎡　ME46-0315　YG－06

4　野外調査の担当者は、金子昭彦・鳥居達人である。

5　室内整理期間と担当者は、次の通りである。

穂貫田遺跡　平成18年11月16日～平成19年1月31日　金子昭彦・鳥居達人
駒板遺跡　平成18年12月16日～平成19年1月15日、2月16日～3月31日　鳥居達人
山口遺跡　平成19年2月1日～15日　鳥居達人

6　本報告書の執筆は、第Ⅰ章は委託者が、それ以外を金子が担当した。

7　測量、遺物の分析・鑑定・保存処理は、次の方々に依頼した。

基準点測量：有限会社藤測量（穂貫田遺跡）、株式会社協進測量設計（駒板、山口遺跡）
石質鑑定：花崗岩研究会、鉄製品保存処理：岩手県立博物館

8　報告書作成にあたり、次の方々に御協力・御指導いただいた（敬称略、五十音順）。

稲野裕介（北上市立埋蔵文化財センター）、熊谷常正（盛岡大学）、小林圭一（財団法人山形県埋蔵文化財センター）、小林克（秋田県埋蔵文化財センター）、酒井宗孝・高橋信雄（花巻市立博物館）、高橋龍三郎（早稲田大学）、中村良幸（花巻市教育委員会）

9　調査成果はこれまでに略報（「平成18年度発掘調査報告書」）等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

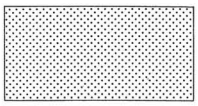
10　調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

11　遺構等の平面位置は、平面直角座標第Ⅹ系を利用している（座標値は第Ⅲ章参照）。座標値は、世界測地系に基づく。

12　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

13　凡例は、下記に示した。

14　参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している



焼土・黒色処理　P：土器　S：石

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過…… 1

Ⅱ　立地と環境

1　位置・地形・調査範囲…… 2
2　基本層序 …… 2
3　これまでの調査と周辺の遺跡 …… 8

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野外調査と整理の経過…… 14
2　特記事項 …… 15

Ⅳ　穂貫田遺跡

1　概　　要…… 17
2　精査した遺構 …… 18
3　確認のみの遺構 …… 21
4　遺　　物…… 37

Ⅴ　駒板遺跡

1　概　　要…… 51
2　精査した遺構 …… 51
3　確認のみの遺構 …… 53
4　遺　　物…… 55

Ⅵ　山口遺跡…… 65

Ⅶ　まとめ…… 67

報告書抄録…… 91

表　目　次

第 1 表　本遺跡に関係する周辺の遺跡一覧表 ……10

図版目次

第 1 図　遺跡の位置 …… 3
第 2 図　遺跡の立地 …… 4
第 3 図　周辺の地形と遺跡 …… 7
第 4 図　周辺の遺跡 ……11

< 穂貫田遺跡 >
第 5 図　調査範囲と地山（Ⅶ層）上面の地形 ……27
第 6 図　グリッド ……28
第 7 図　遺構配置図 ……29
第 8 図　第 1 号住居跡 ……30
第 9 図　第 2 号住居跡 ……31
第 10 図　第 1 ～ 5 号土坑、第 1 号焼土 ……32
第 11 図　第 3・4 号住居跡、第 6 ～ 8 号土坑、
　第 2 号焼土 ……33
第 12 図　第 5 ～ 7 号住居跡、第 3 ～ 5 号焼土 ……34
第 13 図　第 1 号住居跡、第 2 号住居跡(1)出土遺物 35
第 14 図　第 2 号住居跡(2)、第 1 号土坑出土遺物 …36
第 15 図　縄文・弥生土器(1) ……39
第 16 図　縄文・弥生土器(2) ……40
第 17 図　縄文・弥生土器(3)・土師器(1) ……41
第 18 図　土師器(2) ……42
第 19 図　土師器(3) ……43
第 20 図　土師器(4) ……44
第 21 図　土師器(5) ……45
第 22 図　土師器(6)・須恵器(1) ……46
第 23 図　須恵器(2) ……47
第 24 図　須恵器(3)・陶器 ……48
第 25 図　土製品・石器・鉄製品 ……50

< 駒板遺跡 >
第 26 図　調査範囲と地山（Ⅶ層）上面の地形 ……57
第 27 図　グリッド ……58
第 28 図　遺構配置図 ……59
第 29 図　第 1・2 号陥し穴状遺構……60
第 30 図　第 1・2 号土坑、第 1 号焼土、
　土器出土状況（堤防脇）……61
第 31 図　中央水路両脇柱穴 ?、土坑 ?、
　土器出土状況 ……62
第 32 図　縄文土器(1) ……63
第 33 図　縄文土器(2)・石器 ……64

< 山口遺跡 >
第 34 図　調査範囲とグリッド ……66

写真図版目次

写真図版 1　遺跡遠景 ……71

< 穂貫田遺跡 >
写真図版 2　調査区全景・調査前風景 ……72
写真図版 3　第 1 号住居跡(1) ……73
写真図版 4　第 1 号住居跡(2)・第 2 号住居跡(1) ….74
写真図版 5　第 2 号住居跡(2) ……75
写真図版 6　第 1 号土坑、第 3 ～ 7 号住居跡、
　第 2 号土坑 ……76
写真図版 7　第 3 ～ 8 号土坑、第 1 号焼土 ……77
写真図版 8　第 2 ～ 5 号焼土、地形ほか ……78

< 駒板・山口遺跡 >
写真図版 9　調査区全景・調査前風景 ……79
写真図版 10　陥し穴状遺構、土坑、焼土 ……80
写真図版 11　調査状況(1) ……81
写真図版 12　調査状況(2) ……82
写真図版 13　調査状況(3)・山口遺跡 ……83

< 穂貫田遺跡 >
写真図版 14　縄文・弥生土器 ……84
写真図版 15　土師器(1) ……85
写真図版 16　土師器(2)・須恵器(1) ……86
写真図版 17　須恵器(2)・陶器 ……87
写真図版 18　石器(1) ……88
写真図版 19　石器(2)・アスファルト塊・
　土製品・鉄製品 ……89

< 駒板遺跡 >
写真図版 20　縄文土器・石器 ……90

Ⅰ　調査に至る経過

穂貫田、駒板、山口遺跡は、「経営体育成基盤整備事業　更木新田地区」のほ場整備工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本事業区域は、北上川左岸に広がる北上市と花巻市に跨る水田地帯であり、水田は10アール程度と小さく、用排水路も土水路やコンクリート水路の老朽化により漏水が激しいなど、農作業の効率化が図られず不便をきたしている。

そのため、水田の大区画化、用水のパイプライン化、農道の改良などを行うことで、農作業の効率化、担い手を中心とした大規模経営体系を確立させ、併せて農村環境の改善と農業経営の安定を図るものである。

穂貫田遺跡

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、北上地方振興局農林部農村整備室から平成15年11月26日付北地農整第631号「県営経営体育成基盤整備事業更木新田地区に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼について（依頼）」ほかにより岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成15年12月15日～平成17年3月1日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成16年3月31日付教生第2062号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより当農村整備室へ回答があった。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年4月3日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

駒板遺跡

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、北上地方振興局農林部農村整備室から平成16年11月2日付北地農整第556号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成16年11月9日～平成17年3月1日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成17年3月30日付教生第1884号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答があった。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年7月26日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

山口遺跡

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、北上地方振興局農林部農村整備室から平成15年11月26日付北地農整第631号「県営経営体育成基盤整備事業更木新田地区に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼について（依頼）」ほかにより岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成15年12月15日～平成17年3月1日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成16年3月31日付教生第2062号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより当農村整備室へ回答があった。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年6月30日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室）

Ⅱ　立地と環境

1　位置・地形・調査範囲（第1～3・5・26・34図、写真図版1・2・8・9・11～13）

三遺跡は、ほぼ隣接し、北から穂貫田、駒板、山口遺跡で、花巻市の南東端、JR東北本線花巻駅から南西約5㎞に位置する（第1図）。北上川東岸の自然堤防に立地する。

穂貫田遺跡は、より北側で周知されていた遺跡だが、今回の試掘調査で同様の埋蔵文化財が確認されたため、南側に拡張されたものである。他の二遺跡は、今回の事業に伴う事前の分布調査で新規に発見された遺跡であるが、山口遺跡は、より南で発見されており、今回の発掘調査に至る県教育委員会による事前の試掘調査で土坑が検出されたため、遺跡範囲が北に拡張されたものである。なお、この部分は「大木遺跡」に相当する可能性もある（第3図）。詳細は、第3節を参照していただきたい。

三遺跡とも、今回の調査地点は、北上川とその支流によって形成された自然堤防上およびその周囲に立地するが、駒板遺跡（および穂貫田遺跡の最南端）は起伏が大きく、旧河道や段丘がはっきりと認められ、穂貫田遺跡はずっと起伏が緩やかである。山口遺跡は、調査中止になったため不明である。

調査地点の現況は、水田およびこれに関係する道路、水路である。起伏はほとんど感じない。穂貫田遺跡の標高は、67.5～68mで基本的に南に行くほど高くなる。駒板遺跡は、67.2～68mで地点による高低差が、穂貫田遺跡より大きいようである。山口遺跡は、66～68mで、ほとんどが66m台。

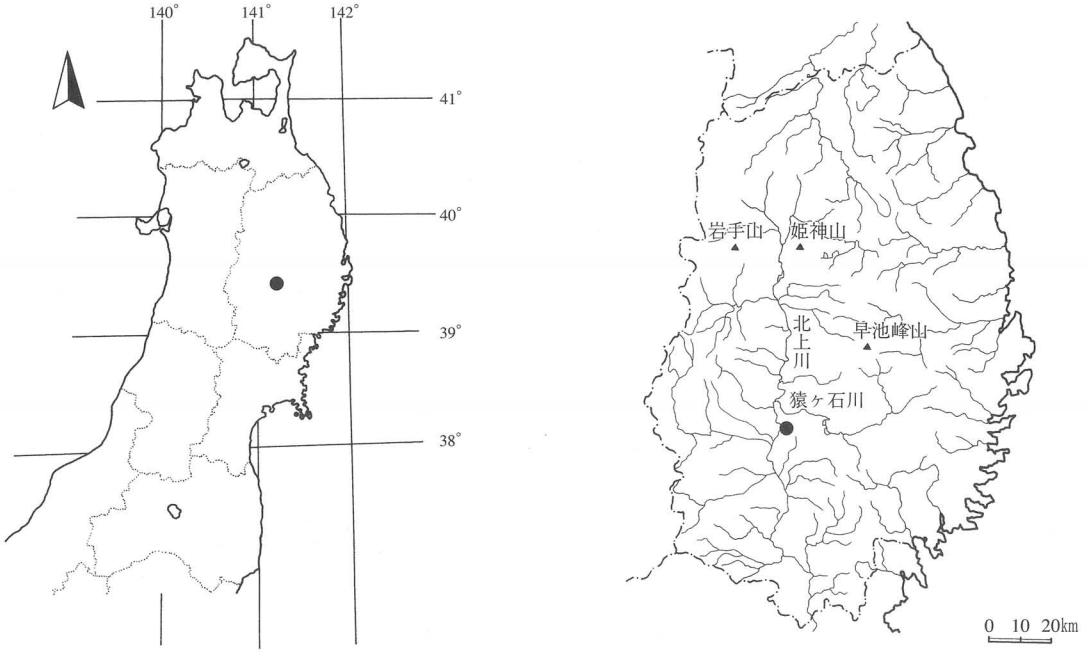
調査範囲を、遺跡範囲を示した第3図にプロットしてみた。ただし、下記のように遺跡範囲自体に問題があるので、遺跡のどの部分に相当するか考えてもあまり意味がない。現況は、上述のようにほぼ平坦な水田面が広がるのみである。今回県教育委員会から示された各遺跡の範囲と現在の県遺跡地図の範囲（第3・4図）とは一致しない。今回の調査では、第3図に示した調査範囲の北半分に位置する不整多角形の範囲までが“穂貫田”、南半のL字状もどきの範囲が“駒板遺跡”になっている。「山口遺跡」の調査範囲は、山口遺跡の北端にあたるか、大木遺跡の南端に当たるか、微妙である。

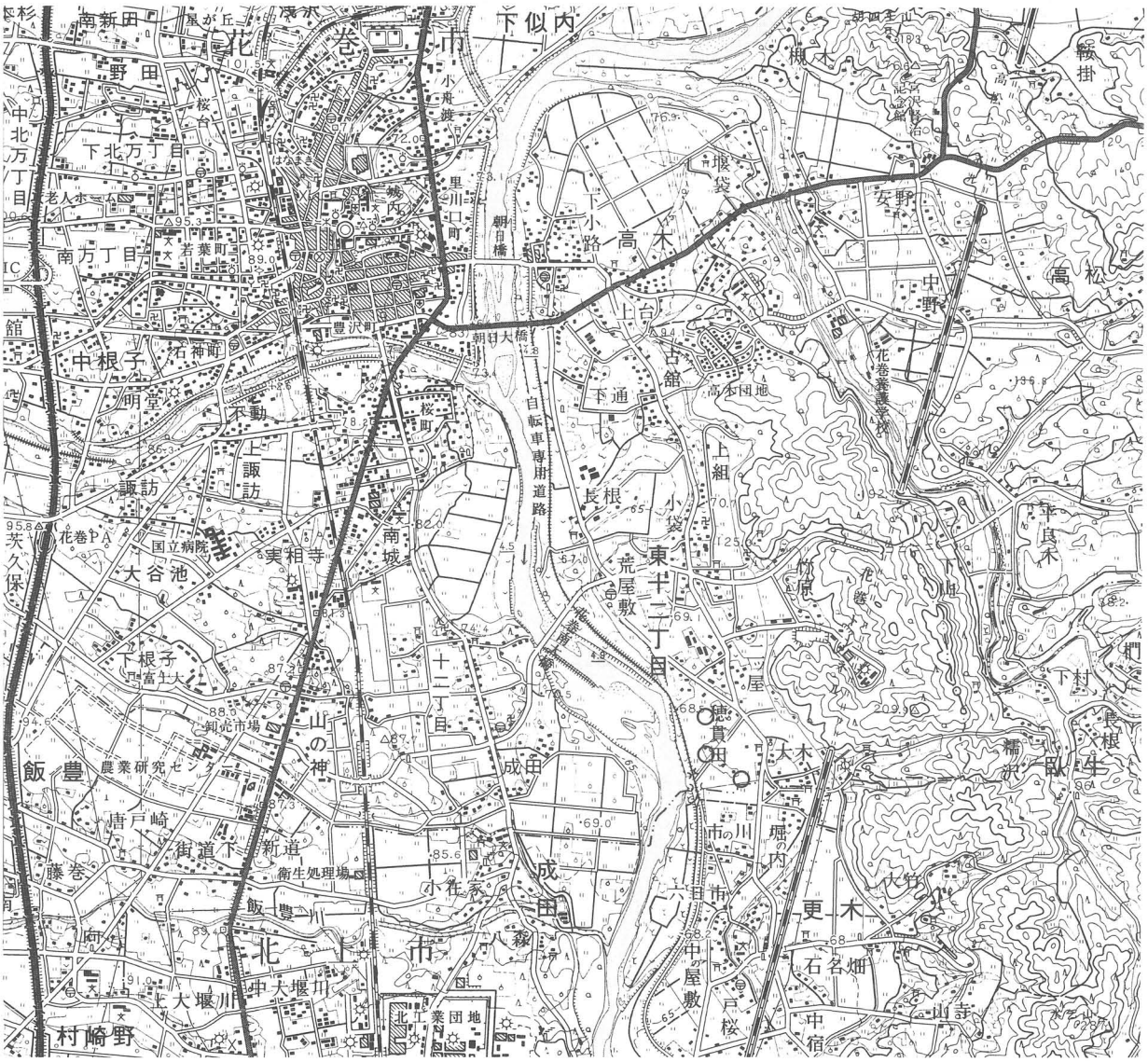
実際のところ、起伏がほとんどない水田が広がる地域で、地表から遺跡の範囲をくくるというのは不可能に近い。今回の調査の結果を受けて考えるならば、「穂貫田遺跡」の南端は、Ⅶ層上面の地形および遺構・遺物の出土状況から、駒板遺跡に含めた方が良いと思われる。すなわち、第3図の穂貫田遺跡の範囲は、南西隅が凹んでいるのだが、これを凹まさないで、南東端からほぼ真横に西側にのばして、そのまま川に沿って西端としてしまえば、かなり実情に合うと思われる。

本地域（の特に北側）は、地元で“島”と通称されている。北上川の氾濫源にあるので、島状になっていた時があるのではないかと推測する。花巻市教育委員会によって確認された旧河道（第3節参照）と北上川は以前もっと大きく蛇行していたという伝承、さらに第3図の遺跡分布から想像をたくましくすれば、北上川は、穂貫田遺跡横の蛇行部分で現在の市道に沿ってそのまま山に突き当たる。そして、第3図23の遺跡の前後から、もう一つの流れが、遺跡の間（24、35、32の間、33と35、55と56の間）を抜け、丘陵地に沿って下り、先ほどの流れに合流していたことがあるのではないか。そうすると残った部分は“島”状を呈することになる。

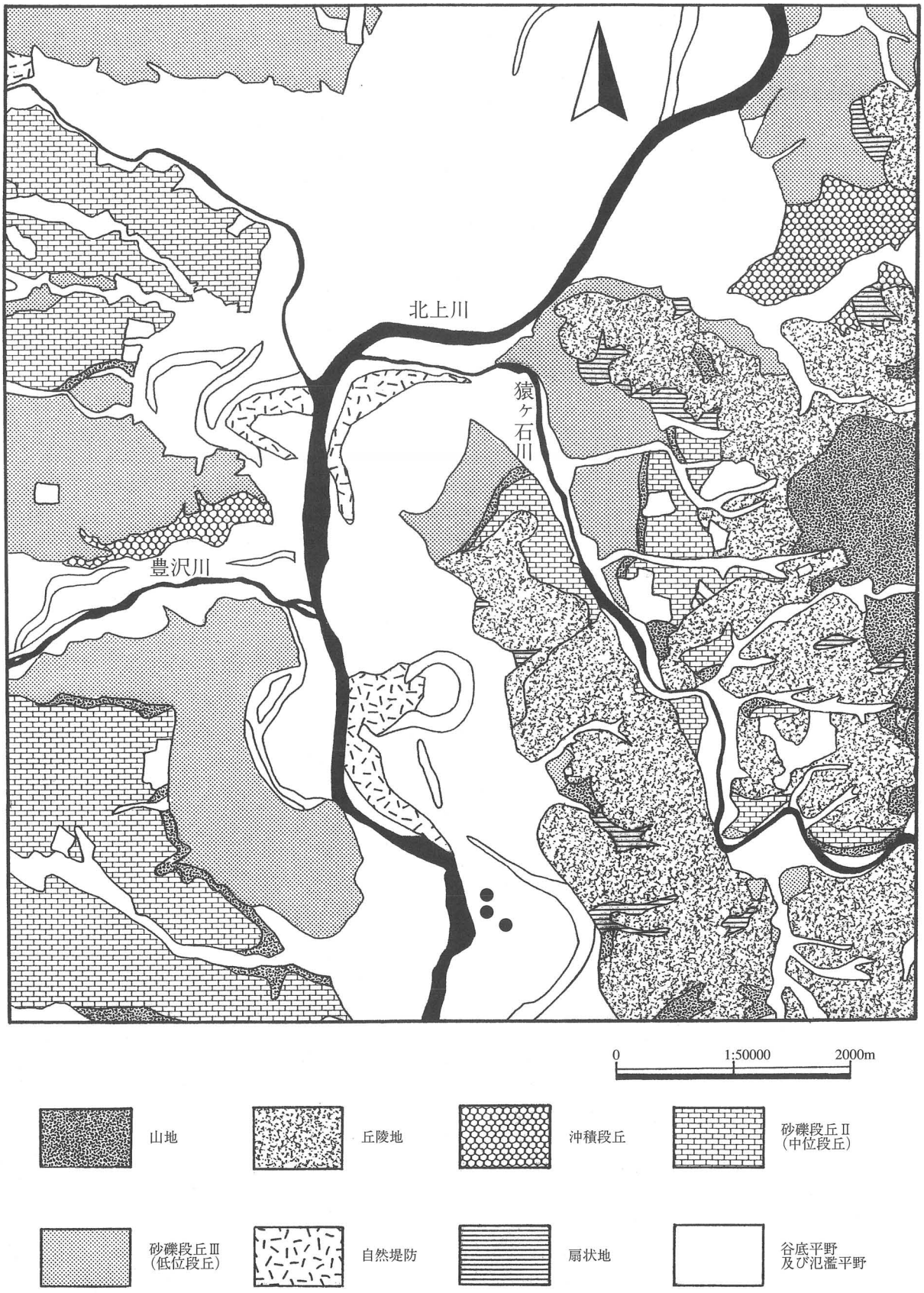
2　基本層序

(1) 基本層序（写真図版11）





第１図　遺跡の位置（○印）（1:50,000 花巻）



第２図　遺跡の立地（●が該当遺跡）

基本層序は、写真図版11の右上（駒板遺跡）に見るように、基本的に洪水時にあふれ出た砂に起因する黄褐色土（一部砂の箇所あり）と黒褐色土との互層である。写真中央の厚い黒土（Ⅲ層）が遺物包含層で、この層の上部が平安時代、中央付近が縄文時代晩期、下部が縄文時代後期の遺物包含層となるが、穂貫田遺跡の場合は、これほど厚くない。Ⅳ層は、その性質上地点による違いが大きい。

以下の層序は、穂貫田遺跡で認めたものである。駒板遺跡も基本的には同じだが、異なる点が幾つかある。最も違う点は、穂貫田遺跡では見られない地点も多かったⅡ層の堆積が顕著で、Ⅲ層も含め非常に厚く堆積している。また、Ⅱ層が30㎝程度と厚く堆積しているところでは（例えば堤防沿いの用水予定地）、下部に10㎝程度の厚さで、10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　洪水再堆積層？　がブロック状あるいは層をなして堆積している場合も見られる。Ⅳ層のような明瞭な砂ではなく、シルト質の火山灰に似た手触りである（十和田ａ火山灰に比べ黄色い）。さらに、旧河道の底では、Ⅴ層とⅥ層の間に、Ⅶ層の再堆積層が10㎝程度の厚さで堆積している。10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土？　である。また、穂貫田遺跡の地形は、包含層下の黄褐色砂～土層（Ⅳ層）でほぼ平らになっていたようだが、駒板遺跡は、包含層上の黄褐色土（Ⅱ層）で平らになったようである。

なお、山口遺跡では、盛り土と撹乱しか調査できなかったので、層序は不明である。

Ⅰ層：水田時耕作土あるいは関連施設の盛り土。層厚20㎝。

Ⅱ層：10YR3/2 黒褐色　シルト　層厚０～30㎝。北東区で厚いが（逆にⅤ層が非常に薄い）、ない所も多い。色は、中～近世によく見られる土である。

Ⅲ層：10YR2/1 黒色～10YR3/1 黒褐色　シルト　層厚20～30㎝。場所により濃淡あり。

Ⅳ層：10YR4/3 にぶい黄褐色～10YR3/2、3/1 黒褐色　砂～砂質シルト　層厚10～30㎝。洪水堆積砂層とその再堆積層で、地点により異なる。薄く黒っぽいところではⅢ層に紛れて不明瞭だが、キラキラと輝く砂で分かる。西側は比較的はっきりしている。第１次検出面。

Ⅴ層：10YR3/1 黒褐色　粘土質シルト　層厚20～40㎝。穂貫田遺跡では、Ⅳ層が下がる北東区で薄く、北中央～西区では40㎝以上に及ぶ。厚いところでは、上部がより黒く（10YR2/1）、分離できそうな場合もある。黒く、Ⅳ層がはっきりしないところでは、Ⅲ層と連続して見える。

Ⅵ層：10YR4/2 灰黄褐色～10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト　層厚０～10㎝。漸移層。はっきりしないところも多い。

Ⅶ層：10YR4/4 褐色　低いところではシルト、高いところでは砂　地山で第２次検出面。Ⅷ層が確認された場所では層厚20㎝。

Ⅷ層：10YR4/6 褐色　砂　穂貫田遺跡北東区角で深掘りした際に確認。穂貫田遺跡南端などでは礫層。

(2) Ⅶ層上面の原地形（第5・26図、写真図版８・10～13）

発掘調査範囲や、確認調査範囲でも途中に埋蔵文化財が発見されなかった地点では、Ⅶ層上面まで下げることができ、その地形を確認できた。今回の調査地点は、現況が起伏のほとんどない水田で、Ⅶ層上面と大きく異なることから、その概要を記しておく。

穂貫田遺跡（第５図、写真図版８）

Ⅶ層上面の地形を確認できたのは、発掘調査（精査）範囲と確認調査範囲の南半（中央の細く平行する調査範囲より南）だけで、全体の様子はよく分からない（第５図）。北半に確認されたのは、旧河道あるいは雨裂の三箇所で、「深い」と書いた部分は、南北方向に延びる旧河道か（底幅は2.5ｍくらいで、その東西隣接地より50㎝くらい下がる）。底では、Ⅰ層20、Ⅱ層10、Ⅲ層18㎝、他と異なってこの間に30㎝程度の明るいⅣ層が入る、Ⅳ層26、Ⅴ層40、Ⅵ層10㎝程度で、Ⅶ層上面では標高約66ｍ。「浅い雨裂」と書いた部分は、北東から南西方向に延びる狭くて浅い雨裂状のものであ

る（底幅50㎝くらいで前後より30㎝程度下がる）。その南の線の描いたところは、これよりははっきりした落ち込みで、幅は同じくらいだが前後より50㎝程度下がる。

中央部の平行する水路部分では、上述の「深い」に続くような南北方向に延びる落ち込みが確認されたが（Ⅷ８Ｇあたりで、底標高約66.5ｍ）、ダラダラと立ち上がり明瞭でない。

南部では、南東隅付近をピークとする段丘状の地形が認められ、この辺りでは、Ⅰ層20、Ⅱ層15、Ⅲ層10、Ⅳ層30㎝、Ⅴ層なし、Ⅵ層10㎝程度で、Ⅶ層上面で標高約67ｍ。この段丘崖は、西側では明瞭に認められ（第５図の二重線の部分、写真図版８の最下段右→西側から見たところ）、旧河道へ続く。旧河道は礫がゴロゴロで（写真図版８の最下段左）、底は、Ⅰ層45、Ⅱ層30、Ⅲ層40、Ⅳ層15、Ⅴ層30、Ⅵ層（砂利）10㎝で標高約66.2ｍ。北側はダラダラと下がり段丘崖は認められなかったが、高低差のあまりない旧河道が北東から南西方向に延びるのが確認された（第５図）。底は、Ⅰ層20、Ⅱ層10、Ⅲ層25、Ⅳ層中暗褐色部分20、黄褐色部分10、Ⅴ層50、Ⅵ層10㎝で標高約66.3ｍ。

駒板遺跡（第26図、写真図版10～13）

確認範囲でも堤防～水路北側の一部を除いて全てⅦ層上面まで下げられたので、ほぼ全体の様子が分かった。北端と南端が沖積段丘上となり、中央にある現在の水路付近が最も低い（第26図）。

北側は、穂貫田遺跡南端の続きだが（標高約67ｍ）、段丘崖は見られず、旧河道を挟んで、その南側は南に向かってどんどん下がり、最も深い旧河道底から再び僅かに上がる。北側の旧河道底（写真図版12の上から二段目）は、Ⅰ層15、Ⅱ層？25、Ⅲ層40、Ⅳ層25、Ⅴ層30、Ⅶ層の再堆積10、Ⅵ層20㎝で標高約66.1ｍ、南側の旧河道底（写真図版10の下から二段目左、同12の下から二段目左）は、Ⅰ層50、Ⅲ層30、Ⅳ層10、Ⅴ層（10YR3/1黒褐色　粘土質シルト）20、Ⅴ層の淡いもの（10YR4/2灰黄褐色　粘土？）20、Ⅶ層再堆積（10YR4/3にぶい黄褐色　粘土？）10、Ⅵ層（10YR4/2灰黄褐色　粘土？）20㎝で標高約65.5ｍ。

堤防脇の一部Ⅶ層まで掘った部分（写真図版11の上段）では、Ⅰ層40、Ⅱ層30、Ⅱ層下部洪水再堆積層？10、Ⅲ層40、Ⅳ層20、Ⅴ層40、Ⅵ層10㎝で標高約66.1ｍ。

南端は沖積段丘上で、東西両側のＬ字状に曲がる調査区の丁度曲がる部分を結んだ線がピークとなるようで、その南東側は同じく段丘上ではあるが徐々に下がっている（写真図版13の上から二段目右）。南西側の曲がり角は、Ⅰ層20、Ⅵ層（ⅢとⅦ層の漸移層）10㎝で標高約67.3ｍ、北東側の曲がり角（写真図版13の上から二段目左）は、Ⅰ層30、Ⅲ層？20、Ⅵ層20㎝で標高約67.3ｍ。南東隅の曲がり角は、Ⅰ層20、Ⅱ層16、Ⅲ層20、Ⅳ層（黒）20、Ⅴ層10、Ⅵ層10㎝で標高約67ｍ。

沖積段丘の北側には、段丘崖が明瞭に認められ、南西側の段丘下（写真図版13の最上段）は、Ⅰ層15、Ⅱ層50（下部10㎝砂）、Ⅲ層70、Ⅳ層（不明瞭）10、Ⅴ層30、Ⅶ層再堆積10、Ⅵ層30㎝で標高約65.6ｍ。北東側の段丘下（写真図版12の最下段）は、Ⅰ層20、Ⅱ層60（下部洪水再堆積層の火山灰状ブロック）、Ⅲ層30、Ⅳ層15、Ⅴ層40、Ⅶ層再堆積10、Ⅵ層15㎝で標高約65.2ｍ。水路南側調査区中央付近の合流点（写真図版11の最下段左）では、Ⅰ層20、Ⅱ層15、Ⅲ層50、Ⅳ層10、Ⅴ層35、Ⅶ層再堆積10、Ⅵ層15㎝で標高約65.6ｍ。北東側の合流点（写真図版12の下から二段目右）では、Ⅰ層20、Ⅲ層40、Ⅳ層20、Ⅴ層40、Ⅶ層再堆積10、Ⅵ層15㎝で標高約65.5ｍ。

(3) 検出状況・出土状況

前述のようにⅢ層が全ての時代の遺物包含層であり、遺構の掘り込み面は全てこの層の途中にあるはずである。しかし黒を基調とするためわかりづらく、比較的はっきりと色調の異なる平安時代の竪穴住居跡さえこの面では不明瞭な部分があった。したがって、実際にはⅣ層が遺構検出面となる場合が多いが、Ⅲ層上面を掘り込み面とする平安時代の遺構では、Ⅲ層が厚い地点ではⅣ層に達していな

第３図　周辺の地形と遺跡（1:25,000 土沢）（番号は第１表に対応）（太線は調査範囲）

いおそれがある。Ⅳ層自体も、再堆積土のため地点によってはⅢ層と区別できないくらい黒く、必ずしも明瞭に検出できるわけではない。今回の調査では、この後Ⅶ層でも検出するが（第二次検出面）、Ⅶ層上面が低い地点にある場合Ⅳ～Ⅴ層が厚く堆積するため、この面まで掘り込む遺構は少なく、駒板遺跡の第1号土坑は希有な例と言えよう。したがって、Ⅲ層、少なくともⅣ層で検出できないと掘り飛ばしてしまったおそれがあると言える。駒板遺跡の水路南側の地点は、その可能性が高い。

しかし、Ⅲ層が遺物包含層といっても、実際に遺物を包含する地点は限られ、顕著なのは、穂貫田遺跡の北半部、南西部、駒板遺跡の中央水路南北両側だけである。出土量も少ないため、いわゆる捨て場状に炭化物や焼土を含んだ細分層に分かれて出土するわけではない。したがって、上記以外の地点で遺構を掘り飛ばしてしまっている可能性は少ないものと思われる。

3　これまでの調査と周辺の遺跡（第3・4図）

(1) これまでの調査

三遺跡とも、今回のほ場整備事業に伴う事前の分布調査（平成12年）によって新規に発見されたものである（岩手県教育委員会　2001）。穂貫田遺跡の今回の調査区も、試掘調査までは別の新規遺跡として登録されていたのだが（文献6）、最終的に周知の「穂貫田遺跡」に含められることになった。「穂貫田遺跡」は、平成2年度の花巻市教育委員会による分布調査で発見され、本来今回の調査範囲より北側の一段高い場所に立地する古代の遺跡として周知されていたが（第3図網掛部分）（文献25）、今回同様の埋蔵文化財が確認されたことにより、南側に拡張されることになった。ただし、一段高い本来の範囲の「遺跡南東辺と市道の間には北上川旧河道があり、丘陵地裾部へ延びている」とあり（文献25：p.46）、本来的には別の遺跡とすべきように思われる。

「山口遺跡」も、平成12年の分布調査の際には、より南で確認されていた遺跡であるが、県教育委員会の試掘調査で今回の事業予定地内に埋蔵文化財が確認されたため、遺跡範囲が北側に拡張されたものである（そのため、文献6の時点では「山口遺跡隣接地」となっている）。

いずれの遺跡も、今回の事業に伴う試掘調査が最初の発掘調査だが（文献6、77）、駒板遺跡の場合は、今回の事業にも関連する、国土交通省岩手河川工事事務所による「穂貫田排水樋管改築工事」に伴っても調査されている（文献6）。

駒板遺跡のこの時の調査は、県教育委員会による本調査であり（文献6）、調査範囲は排水路が北上川に注ぐ部分に近く、駒板遺跡の南東端に当たる（第3図、写真図版9最下段左）。今回のセンターの調査では、その隣接地の旧排水路を埋め立てた場所にプレハブを建てた。正確な調査面積は不明だが400～450㎡、調査区は2箇所に分かれ、平成16年の2月と4月に延べ13日かけて行われたようである。0.9×0.7mの楕円形の土坑1基、不整形の土坑1基、柱穴状土坑30基、縄文時代の遺物集中箇所2箇所、風倒木8箇所検出され、不整形の土坑は、検出面からロクロ使用の内黒土師器坏破片1点が出土したことから、古代の可能性が高いとされている。

出土遺物のほとんどは、縄文土器だったようで、「縄文時代前期後葉から中期初頭の土器が多く、わずかに後期初頭のものも含まれていた」とあるが（文献6：p.29）、掲載土器を見る限り、いずれも今回と同じ縄文時代後期前葉に属するように思われる。他には、石鏃1点、使用痕のある？剥片1点、凹み石？（砥石？）1点が掲載されている（記載がなくはっきりしない）。

(2) 周辺の遺跡

今回の調査では、縄文時代後期前葉、晩期中～後葉、平安時代のものが主として発見された。そこ

で、この時期に絞って周辺の遺跡を見ていきたい。その他の時期については、岩手県の遺跡台帳、文献25～28、文献19～22等の「周辺の遺跡」等を参照いただきたい。

第1表に示した周辺の遺跡は、調査で同時期の遺構・遺物が発見された遺跡に限ったが、特に三遺跡に近接する範囲は、そうでない遺跡も含めた。表の見方。遺跡の性格・遺構・遺物の欄は略記し、調査→機関・年号（m^2）の欄は、調査の有無を示し、調査機関・調査年号（調査面積）を記している。市、町、村は市町村教育委員会、県は県教育委員会、セは（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターである。文献は、本文の最後にまとめ、番号で示している。

表について付言しておく。70の「二子城」は、包括した名称であるが、名称が時期と性格を限定し不都合なためか、地点ごとに異なる遺跡名が付され報告書が刊行されている。また、古い時期に県教育委員会が調査した遺跡名に不明な点がある。50と78がそれで、各々の報告書では、50が「飯豊遺跡」、78が「野田Ⅱ遺跡」となっている。しかし、岩手県の遺跡台帳では、両遺跡とも調査した場所とは別地点にあり、調査した場所にもとづけば、50は森下遺跡、78は岡島遺跡に相当するようである。16と62も異なっているが、これは調査後に遺跡名が変更されたものである。さらに、文献の47と63は、当センターの図書室になく未見である。

また、図に入らなかったので割愛したが、図より南側にも同様の地形が続き同じような遺跡が続く。

以下、表にもとづいて時期ごとに見ていく。

縄文時代後期前葉

本遺跡は前葉でも前半に限られるが、周囲のほとんどもその時期で、表に記した“網目状撚糸文土器”も、この時期の可能性がある（縄文時代前期の可能性も残す）。該期には、20・21・27・44・67・69・70・77が相当する。洪積段丘があまり発達しないこの地域としては、予想外に多くの遺跡があるという印象である。その他、『北上市史』（文献45）にも、本遺跡から南に隣接する更木町から表採された該期の土器が掲載されており（184、186～192）、実際にはさらに多くの遺跡が存在するようである。地形は、自然堤防や中～低位段丘で、川縁に多く認められる。全体として、遺構はほとんど発見されず、遺物も非常に少ない。比較的多く認められたのは67の八天遺跡だが、この遺跡でも前後の時期の方が多い。比較的少人数の構成員からなり遊動的であった当時の居住様式が窺われる。

縄文時代晩期中～後葉

土器型式で言うと、大洞Ｃ２～Ａ（＝A1）式（山内　1930）期である。表の１・12・16・18・20・21・29・30・33・43・45・46・53・69・70の遺跡、そして野田Ⅰ遺跡（文献１）も相当する。やはり川縁に多い。この時期は遺跡の立地等に大きな変化が認められることが古くから知られ、大洞Ｃ２式土器のみ出土する遺跡もまま見られる（金子　2001：p.73）。本地域も、基本的にはこうした傾向に合致し、丘陵地から自然堤防まで様々な地形に土器散布地が見られる。ただし、本地域に特徴的な点が二つある。一つは、北上川東側の丘陵地に比較的出土量の多い“土器散布地”が認められる点（12・16）。遺構がなく集落としてあまりふさわしくない場所に立地するので“土器散布地”と呼称するが、40ℓのコンテナ１、２箱以上の土器が出土する。もう一つは、少し広く北上川中流域として見た場合に、大洞Ｃ２式（前後含む）を中心に大量の土器を出土する遺跡が認められる点。北上川を三遺跡から15㎞ほど遡ったところに安堵屋敷遺跡（（財）岩手県埋蔵文化財センター　1984）、さらに10㎞ほど下ったところに牡丹畑遺跡（文献45、北上市教育委員会　2003）、そこからすぐの和賀川との合流地点付近に九年橋遺跡（北上市教育委員会　1991ほか）がある。三遺跡は、こうした地域に存在するが、この地域の拠点集落としては、20の臥牛遺跡が挙げられる。三遺跡からは丘陵地の小さな峠を越えて２㎞程度しか離れておらず、何らかの関係があったと想定されよう。

第１表　本遺跡に関係する周辺の遺跡一覧表　（本文に註あり）

No.	遺跡名	所在地	立　地	遺跡の性格・遺構・遺物	調査→機関・年号（㎡）	備　考	文献
1	本館Ⅱ	花巻市	中位段丘	縄文晩期前～中葉（大洞 C2 式）土器	市Ｈ 10（90）		34
2	庫理	花巻市	自然堤防	9 世紀後半集落・水鳥線刻土器、耳皿→同じ住居から・墨書土器	セＨ 9（540）ほか	市Ｈ 10（2,087）、県Ｈ 8 年調査	4、13、36
3	石持Ⅰ	花巻市	氾濫平野	9 ～ 10 世紀集落・住居 32・耳皿・溝状陥し穴 312	セＨ 10 ～ 11（16,706）		15、17
4	似内	花巻市	沖積段丘	9 世紀集落・住居 31・住居から土錘 354 点、須恵器埋設、金粒	セＨ 10 ～ 11（10,413）ほか	市Ｈ 4（152）、Ｈ 10（400）調査	16、29、34
5	下似内	花巻市	自然堤防？	「平安期竪穴住居跡３棟」	県Ｈ 8（400）		4、34
6	上似内	花巻市	沖積段丘	9 世紀集落・住居 26・溝状陥し穴 29・鉄製紡錘車	セＨ 12（8,300）		18
7	上幅	花巻市	自然堤防？	「平安集落」→報告書は見あたらない？	あり（道路整備）		27
8	下幅	花巻市	段丘	平安集落・10 世紀竪穴住居	市Ｈ 15（105）ほか	市Ｈ 4（437）・県道・市道工事の際も	27、29、40
9	矢沢八幡	花巻市	沖積段丘	平安集落・住居３？・9 世紀後半土師器	県Ｓ 51（1,800）	報告書では「八幡遺跡」	1
10	胡四王山館	花巻市	丘陵	9 世紀竪穴住居５・羽口	学術		75
11	槻ノ木Ⅲ	花巻市	扇状地	溝跡？・「平安時代土師器」	県Ｈ 11（試掘）		5
12	高松寺	花巻市	丘陵	10 世紀竪穴住居１・鉄製紡錘車、なべ・大洞Ｃ２～Ａ′式包含層・土偶	セＨ 10（8,250）		14
13	経塚森	花巻市	丘陵	平安時代土師器	市Ｈ 4（確認）		27
14	寺場	花巻市	丘陵	古代竪穴住居確認・10 世紀土師器	市Ｈ 4（確認）		27
15	高松Ⅱ	花巻市	段丘	「平安時代土師器」→報告書見あたらない？	あり（道路改良工事）		27
16	中野Ｄ	花巻市	中位段丘	縄文晩期後葉～弥生時代前期包含層	県Ｓ 50（2,000）	市Ｈ 16 も・古くは「高松遺跡」	1、42
17	高松寺経塚	花巻市	中起伏山地	平安時代竪穴住居・10 世紀初頭前後土師器、常滑	市Ｓ 62（林道開削工事）		23、24、27
18	長根坂	花巻市	低位段丘	縄文時代晩期中葉土器			27
19	明戸Ⅱ	花巻市	段丘	「平安時代」			27
20	臥牛	北上市	自然堤防？	縄文時代後期初頭？～晩期後葉包含層	市Ｓ 40		45、76
21	横欠	北上市	低位段丘？	縄文中期後葉～後期前葉土器、大洞Ｃ２式土器片	市Ｓ 54（500）		62、64
22	大竹廃寺	北上市	丘陵	10 世紀初頭前後住居、堂の跡・鉄鐘	市Ｓ 61（確認）ほか	市Ｓ 40 ～ 42 年確認調査	45、51
23	下小路Ⅱ	花巻市	自然堤防？	「古代散布地」		県遺跡台帳から	
24	下小路Ⅰ	花巻市	自然堤防	「古代の遺物包含地・須恵器」			25
25	堰袋Ⅱ	花巻市	谷底平野	平安土師器、土錘			23、25
26	堰袋Ⅰ	花巻市	谷底平野	「古代の遺物包含地」			25
27	サイノ神	花巻市	中位段丘	縄文後期前葉土器・「11 世紀土師器」	市Ｈ 16（40）		25、42
28	上台Ⅲ	花巻市	中位段丘	「古代の遺物包含地」			25
29	久田野Ⅱ	花巻市	中位段丘	平安竪穴住居・縄文晩期中（大洞 C2 式）～後葉土器	市Ｈ 10（500）ほか	史跡整備→確認調査・文献 26 も	33、34、37
30	上台Ⅱ	花巻市	低位段丘	9 世紀後半～ 10 世紀初頭集落・土錘 11、鍛冶滓・大洞Ｃ２式土器片	セＨ 15（2,171）		19
31	上台Ⅰ	花巻市	低位段丘	平安集落	市Ｈ 13（2,000）	文献には平安集落の報告なし	44
32	苔前堂	花巻市	低位段丘	「縄文期の遺物包含地」			25
33	高木古館	花巻市	丘陵	大洞Ｃ２～ A1 式土器・9 世紀後半土師器	セＨ 15 ～ 16（11,962）		22
34	八ツ森	花巻市	丘陵	カマド竪穴住居２・10 世紀初頭前後土師器、須恵器	Ｓ 61 ～ 62（300）	壊滅	23、25
35	高木中館	花巻市	自然堤防？	9 ～ 10 世紀集落・住居状遺構から炭化種子、ムシロ痕を持つ土師器	セＨ 15 ～ 16（22,010）	縄文晩期末土器片も出土	21
36	下通	花巻市	自然堤防	平安時代土師器片	セＨ 16（11,400）		21
37	長根Ⅲ	花巻市	自然堤防	「古代の遺物包含地」			25
38	長根Ⅱ	花巻市	自然堤防	「古代の遺物包含地」			25
39	長根Ⅰ	花巻市	自然堤防	「古代の遺物包含地」	セＨ 16（931）	調査で出土したのは近世墓	25
40	小袋	花巻市	谷底平野	平安集落・10 世紀墨書土器←Ｈ３年調査	市Ｈ 11（92）ほか	市Ｈ３年（個人住宅）調査	25、35
41	万丁目	花巻市	低位段丘	奈良～平安集落・平安住居２・10 世紀土師器、陶器	セＳ 60（2,614）		7
42	古館Ⅱ	花巻市	沖積段丘	奈良～平安集落・平安住居８以上・羽口、鉄滓	セＳ 60（？）		8
43	下館	花巻市	段丘	平安竪穴住居、鉄斧・大洞 C2 式土器	市Ｈ 2（12）確認		25
44	上諏訪Ⅱ	花巻市	低位段丘	平安集落・竪穴住居３、ロクロピット・墨書土器、綱目状撚糸文土器片	市Ｈ 11（847）ほか	市Ｈ９年（個人住宅）調査	35
45	不動Ⅰ	花巻市	低位段丘	縄文晩期中～後葉土器・平安時代	市Ｈ７（立会）ほか	市Ｈ２（90）確認調査	25、32、43
46	不動Ⅱ	花巻市	低位段丘	平安集落（９～ 10 世紀）・竪穴住居 39・縄文晩期中葉土器	市Ｈ２、７～ 11（8,071）	25、35、38、39、41、43	←
47	桜町Ⅰ	花巻市	低位段丘	平安集落・10 世紀初頭前後土師器、赤焼土器、鍍金鉄製品	市Ｈ 11（101）ほか	市Ｈ２、５、６年調査	25、31、35
48	諏訪Ⅱ	花巻市	中位段丘	平安集落→報告書見あたらない？	市Ｓ 61 ～ 62（区画整理）	壊滅したらしい	25
49	沖Ⅱ	花巻市	中位段丘	カマド？・10 世紀土師器			25
50	森下	北上市	中位段丘	9 世紀後半～ 10 世紀集落・住居 10、円形周溝・コザ状圧痕、赤焼き土器	市Ｈ 13（682）ほか	県Ｓ 49（飯豊遺跡）、市Ｈ３年調査	3、60、68
51	唐戸崎	北上市	中位段丘	平安集落・漆紙付着土師器、9 世紀後半土師器	市Ｈ９（2,370）ほか	セＨ９（2,641）、市Ｓ 63（確認）	12、54、65
52	唐戸崎Ⅱ	北上市	中位段丘	平安・炭窯？・10 世紀初頭前後？土師器	セＨ９（1,514）		12
53	荒屋敷Ⅰ	北上市	沖積段丘	「古代の集落跡」・10 世紀土師器？・縄文晩期後葉？土器片	市Ｈ５（確認）		25、30
54	荒屋敷Ⅱ	北上市	沖積段丘？	「古代の集落跡」			25
55	中道	花巻市	沖積段丘？	「古代の遺物包含地」			25
56	大沢Ⅱ	花巻市	低位段丘	「古代の遺物包含地」			25
57	大沢Ⅰ	花巻市	谷底平野	「古代の集落跡・須恵器」			25
58	穂貫田	花巻市	自然堤防			報告遺跡	6
59	駒板	花巻市	自然堤防		県Ｈ 16 年調査も	報告遺跡	6、77
60	山口	花巻市	自然堤防			報告遺跡	6、77
61	大木	花巻市	自然堤防？	「須恵器」			25
62	大木堀ノ内	北上市	自然堤防？	平安集落・住居１・10 世紀初頭前後土師器、赤焼き土器	県Ｓ 50（2,400）	報告書では「堀ノ内遺跡」	1
63	市の川Ⅰ	北上市	自然堤防？	古代の集落跡	県Ｈ 17（試掘）		6、77
64	小川屋敷	北上市	自然堤防？	陥し穴状遺構	県Ｈ 17（試掘）		6、77
65	市の川Ⅱ	北上市	自然堤防？	陥し穴状遺構	県Ｈ 17（試掘）		6
66	六日市	北上市	自然堤防？	赤焼き土器	県Ｈ 17（試掘）		6
67	八天	北上市	中位段丘	9 世紀末～ 10 世紀初頭住居５・縄文中期末～後期中葉土器	市Ｓ 50 ～ 52（2,000）	途中から国史跡指定目的に	48、49
68	向	北上市	中位段丘	平安集落・9 世紀後半～ 10 世紀初め住居２・耳皿、赤焼き土器	市Ｈ 13（63）		69
69	成田	北上市	残丘	平安集落・窯跡、9 世紀後半土坑・縄文後期前葉、大洞Ｃ２式土器	市Ｈ２～３（リンゴ園造成）	市Ｓ 63 年（確認）・文献 45 も	54、56、59
70	二子城	北上市	中位段丘	平安焼土坑・網目状撚糸文、十腰内Ⅰ式古？、大洞Ｃ２式土器片	市 S62 ～ 63、Ｈ３ほか	包括遺跡名・文献 52、57、58 も	9、10、50
71	秋子沢	北上市	自然堤防？	平安集落・住居 16・緑釉陶器片、鉄製紡錘車、墨書土器、鉄滓	市Ｓ 41（農地造成）	市Ｓ 42 年（学術）調査	45、46
72	上川端Ⅰ？	北上市	自然堤防	平安集落・須恵器壺		上川端Ⅱ遺跡？	57
73	堰向Ⅱ	北上市	自然堤防	9 世紀後半～ 10 世紀集落・総柱式掘立柱建物跡・住居出土土錘 274 点	セＨ 15（3,200）	西川目遺跡と一体？	20
74	西川目	北上市	自然堤防	9 世紀後半～ 10 世紀集落・住居 38、水田・緑釉陶器、陶硯	セＨ 15（2,000）	堰向Ⅱ遺跡と一体？	20
75	尻引	北上市	自然堤防？	奈良～平安集落	市Ｓ 49 ～ 50	文献未見のため詳細不明	47
76	藤沢	北上市	中位段丘	奈良～平安中頃集落・土器製作、精錬工房、登り窯・溝状陥し穴多数	県Ｓ 49（1,600）ほか	市Ｓ 59、63 ～Ｈ 14 年調査・	3、54
77	鳩岡崎上の台	北上市	中位段丘	奈良末～平安集落・関東型住居・北陸系丸底甕・縄文時代後期前葉土器	県Ｓ 48 ～ 51 ほか	セＨ５～６ほか・文献 71、73、74 も	2、11、67
78	岡島？	北上市	自然堤防	9 世紀後半住居	県Ｓ 50（1,920）	報告書では「野田Ⅱ遺跡」	1
79	中村	北上市	自然堤防	奈良～平安集落・赤焼き土器、大洞 A2 式土器			46
80	菅田	北上市	中位段丘？	9 世紀住居５・墨書土器、土錘	市Ｈ 15（1,770）		72

第4図　周辺の遺跡（1:50,000 花巻、北上）（番号は第1表に対応）

平安時代（9世紀後半中心）

本地域は、北上川が蛇行を繰り返す地域で、第4図の北では西側に、中央では東側に、南では西側に沖積台地あるいは自然堤防（以下“氾濫平野”と呼ぶ）が発達する。平安時代の集落は、この地形に多く、4の似内、71の秋子沢、74の西川目遺跡などの大集落も認められる。奈良時代あるいはそれ以前から存続する遺跡は、西側の洪積段丘に多いようだが（41・42・76・77）、南の広い氾濫平野には奈良時代からの集落も認められ（75・79）、逆に洪積段丘にも46の不動Ⅱ遺跡のような平安時代の拠点的な集落も認められる（単に奈良時代の住居跡が未調査だけか）。

氾濫平野の中の遺跡も大集落から小規模集落までマチマチのようだが、概して段丘状を呈する周囲より一段高い場所に大集落が存在するようである。今回の調査区は低い場所にあり小規模集落の可能性が高く、伊藤博幸氏が指摘する、9世紀末から10世紀初頭前後を境に起きてきた小規模集落の拡散化という動きの中で生まれた集落の可能性がある（伊藤　1998）。小規模集落は、氾濫平野だけでなく周囲の丘陵地にも認められるが（12～14・33・34？）、17は経塚、No.22は寺跡？であろう。

以上から、三遺跡は、いずれの時代も拠点的な集落が営まれるような場所ではなかったことが窺われる。平安時代までは、比較的遊動的な生活様式であった時期に限り生活痕跡が認められるようだ。平安時代になると住居も造られるようになり、穂貫田遺跡の今回の調査区に限れば、沖積段丘にも近いので、平安時代には比較的規模の大きな集落が営まれていた可能性もある。

参考文献

伊藤博幸　1998「後半期の集落」『岩手考古学』第10号　岩手考古学会
岩手県教育委員会　2001『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』岩手県文化財調査報告書第112集
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第74集
金子昭彦　2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史シリーズ④　同成社
北上市教育委員会　1991『九年橋遺跡第10次（補遺）調査報告書』北上市文化財調査報告第66集
　　2003『牡丹畑遺跡（2002年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第58集
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古學』第1巻第3号　東京考古学会

資料文献（第1表）

岩手県教育委員会（補遺にもあり）
1）1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅱ－』岩手県文化財調査報告書第34集
2）1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－ⅩⅤ－』岩手県文化財調査報告書第70集
3）1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－ⅩⅦ－（北上地区）』岩手県文化財調査報告書第72集
4）1997『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成8年度）』岩手県文化財調査報告書第99集
5）2000『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成11年度）』岩手県文化財調査報告書第108集
6）2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成16年度）』岩手県文化財調査報告書第120集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
7）1986『万丁目遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第102集
8）1986『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集
9）1989『坊館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集
10）1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第157集
11）1996『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第240集
12）1998『唐戸崎・唐戸崎Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第279集
13）1999『庫理遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第302集
14）2000『狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第319集
15）2001『石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第341集
16）2000『似内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第344集
17）2000『石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第360集
18）2002『上似内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第379集
19）2004『上台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第459集
20）2005『西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集
21）2006『高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第471集
22）2006『高木古館遺跡・長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第472集
花巻市教育委員会

23）1990『矢沢地区文化財調査報告書Ⅱ』花巻市文化財調査報告書第 16 集
24）2004『花巻市文化財調査報告書』花巻市文化財調査報告書第 30 集
25）1991『平成 2 年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書―花巻地区―』
26）1992『平成 3 年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書―湯口地区―』
27）1993『平成 4 年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書―矢沢地区―』
28）1994『平成 5 年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書―西南地区―』
29）1993『花巻遺跡群―平成 4 年度発掘調査概報―』
30）1994『平成 5 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
31）1995『平成 6 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
32）1996『平成 7 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
33）1997『平成 8 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
34）1999『平成 10 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 22 集
35）2000『平成 11 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 23 集
36）2000『庫理遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
37）2001『平成 12 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 25 集
38）2002『不動Ⅱ遺跡第 4 次発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 28 集
39）2003『不動Ⅱ遺跡第 5 次発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 30 集
40）2004『平成 15 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 31 集
41）2004『不動Ⅱ遺跡第 6 ～ 9 次発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 32 集
42）2005『平成 16 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 33 集
43）2005『不動Ⅱ遺跡第 10 ～ 13 次発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 34 集

花巻市博物館

44）2005『上台Ⅰ遺跡発掘調査報告書(1)』花巻市博物館調査研究報告書第 2 集

北上市（補遺にもあり）

45）北上市史刊行会 1968『北上市史』第一巻原始・古代(1)
46）北上市立博物館ほか 1974『北上市の原始・古代の遺跡』

北上市教育委員会

47）1977『尻引遺跡調査報告書』北上市文化財調査報告第 17 集
48）1978『八天遺跡（昭和 50 ～昭和 52 年度調査）図版編』北上市文化財調査報告第 24 集
49）1979『八天遺跡（昭和 50 ～昭和 52 年度調査）本文編』北上市文化財調査報告第 27 集
50）1986『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』北上市文化財調査報告第 43 集
51）1987『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』北上市文化財調査報告第 46 集
52）1989『くつわ清水遺跡』北上市文化財調査報告第 51 集
53）1989『藤沢遺跡（1988 年度）』北上市文化財調査報告第 54 集
54）1990『飯豊地区遺跡詳細分布調査報告書』北上市文化財調査報告第 56 集
55）1990『藤沢遺跡（Ⅱ）（1989 年度）』北上市文化財調査報告第 58 集
56）1991『成田遺跡（Ⅰ）（1990 年度）』北上市文化財調査報告第 64 集
57）1991『二子地区遺跡詳細分布調査報告書』北上市文化財調査報告第 65 集
58）1992『馬場野遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 2 集
59）1992『成田遺跡（Ⅱ）（1991 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 3 集
60）1992『森下遺跡（1991 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 4 集
61）1993『藤沢遺跡Ⅲ（1989 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 13 集
62）1995『横欠遺跡（図版編）』北上市埋蔵文化財調査報告第 20 集
63）1997『藤沢遺跡Ⅳ（1995 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 28 集
64）1997『横欠遺跡（本文編）』北上市埋蔵文化財調査報告第 30 集
65）1998『唐戸崎遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 35 集
66）1999『藤沢遺跡Ⅴ（1997・98 年度）（遺構編）』北上市埋蔵文化財調査報告第 37 集
67）2001『鳩岡崎上の台遺跡（2000 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 46 集
68）2002『森下遺跡（2001 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 50 集
69）2002『向遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 52 集
70）2003『藤沢遺跡Ⅵ（2002 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 54 集
71）2004『鳩岡崎上の台遺跡（2002 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告第 62 集
72）2004『菅田遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 64 集

江釣子村教育委員会

73）1982『江釣子遺跡群―昭和 56 年度発掘調査報告―』
74）1983『江釣子遺跡群―昭和 57 年度発掘調査報告―（鳩岡崎上の台遺跡・蔵屋敷遺跡）』

その他

75）江上波夫ほか 1958『館址―東北地方における集落址の研究―』東京大学東洋文化研究所

補遺

76）1999『北上市立博物館研究報告』第 12 号
77）2005『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 15 年度）』岩手県文化財調査報告書第 119 集

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野外調査と整理の経過

各遺跡の調査面積・期間は、例言に記している。山口遺跡の詳細は、第Ⅵ章を参照いただきたい。

3月30日（木）に、担当者の現地確認が行われ、委託者および土地改良区の方にも来ていただいて、プレハブや駐車場等の位置を決め、打ち合わせを行った。その際、委託者から工事計画が変更されたので調査面積が変わるとの話があり、変更された面積について早めに連絡いただけるようお願いした。

穂貫田遺跡（第5図）

4月7日（金）午後器材を搬入し、10日（月）から人力による試掘開始。トレンチの大きさは、概ね4×2m、調査区内に点々と設け、遺構が確認されない限り地山（Ⅶ層）まで掘った。併せて、県教育委員会の試掘トレンチをクリーニングし、基本層序の確認、遺構の見積もりおよび調査計画を立てた。当初の登録作業員は13名と少なかったため、4月いっぱい試掘を行った。

調査面積が広いので、重機で検出面まで下げるしかないと判断し、試掘と平行しながら、早速13日（木）から重機を導入し、第5図「東肩三角地」から開始、そのまま鍋つる状に北端を進み、東端を南に下り、調査区中央の東突出部まで行った後、ビニールハウス付近に戻り、精査範囲を東に向かった。層序が地点によって大きく異なること、さらに検出面まで下げざるを得ないことから、調査員がつきっきりで重機による掘削を監督する必要があるため、調査終了まで調査員一名はこれに当たった。排土は、基本的に事業地内ならどこに置いてかまわないということだったので、調査区脇に置くことができ無駄がなかったのだが、土量が多くて作業は思ったよりはかどらなかった。

4月20日（木）に課長補佐の巡回指導があり、その際、調査面積が大幅増になっていて調整をお願いしているので、精査は行わず、そのまま検出作業のみを進めるよう指示があった。この間、基準杭は5月2日（火）までに全て設定し終わっていた。

5月1日（月）から、終了した他の調査現場から作業員10名合流したが、精査はできないので、とりあえず、「東肩三角地」から検出作業を開始した。精査範囲は時間がかかるので、ここを先に進めようと、重機とは異なり、まっすぐ精査範囲を東に向かい、それから南に下った。

5月9日（火）に、委託者と県教育委員会および当センターで調査範囲及び面積について現地協議を行った。その結果、要精査範囲である排水路は、仕上がり幅（約5m）ではなく実際に掘削する幅（約1.5m）のみ調査、堤防脇は現状変更しないこととして調査しない、当初精査予定範囲であった調査区中央の平行する二本の用水路部分は、遺構に掘削が及ばないことを条件に確認範囲とするなどの対応がとられることになった。二本の用水路部分は、県教育委員会が試掘していないので、早めに試掘して連絡するように指示があった。12日（金）に重機は終了し、いったん引き上げた（重機で広く剥いでもすぐには検出に入れず、しばらく放置しておくと地割れ等の弊害があると判断したため）。

5月15日（月）から、新たに終了した調査現場から作業員5名合流し（計登録28名だが、長期欠勤等を除くと実質24名）、変更された要精査範囲の精査にも入った。人数が増えたことと精査範囲の幅が狭いため、精査・実測班、精査範囲第一次検出班、第二次検出班、確認範囲検出班の四つに分けて作業を行うことにした。精査範囲の多くは、住居が確認されたⅢ層中で止めていたので、第一次でⅣ層上面、第二次でⅦ層上面まで下げてダメ押しをした。精査範囲の検出は、西→東→南の順に行った。なお、確認範囲が隣接する場所では、そちらも一緒に行っている（第5図）。

新たに遺構は確認されなかったので、調査の主体は確認範囲の検出に移った。遺構精査も、6月6日（火）に全て終了。確認範囲の検出は、東側の民家横の精査範囲と分かれる地点から北に向かい、「鍋つる」を重機とは逆にたどった。その後、二本の平行水路を同時に西から東に向かった。

6月6日（火）から残りの部分の重機による検出を開始。重機の出場所の都合から、調査区最南端の西から東、そして北（東側突出部分）へ、掘削を進めた。その後、県教育委員会から、確認範囲は埋蔵文化財が確認されない限り地山まで下げることという指示があったので、住居が確認されたため全体をⅢ～Ⅳ層で止めていた平行する水路部分の掘り下げも行い、6月23日（金）に終了した。6月19日（月）の週から、調査区南半の検出・精査を開始。陥し穴かと思っていたシミが全て疑似現象で、また遺物が比較的多く出土した南西部にも遺構は確認されなかったため、7月7日（金）から一部駒板遺跡の調査も開始した（草刈り）。7月5日（水）航空写真撮影。

7月11日（火）、県教育委員会と委託者と現地において終了確認し、14日（金）全て終了。工事の都合で、埋め戻しはしなかった。7月20日（木）には、地権者向けの説明会をプレハブで行っている。

駒板遺跡（第26図）

穂貫田遺跡の調査と平行して、調査範囲の草刈りを7月7日（金）から14日（金）まで行った。重機は、7月10日（月）に北から入り、調査区中央を北東から南西に流れる水路の北側を最初に終わらせた（第26図）。穂貫田遺跡より凹凸が激しく、また途中に埋蔵文化財が確認されないので地山まで掘り下げねばならなかったため、重機による掘り下げははかどらず、しばしば人力による検出作業に追いつかれそうになった。なお、基準杭は、8月4日（金）までに設置し終わっている。

水路南側は、精査範囲優先で、重機は、中央の合流地点から南に向かい、そのまま東に折れて東端まで進み、その後北上したが、盆休み（8月11日（金）～16日（水））を挟み、やや変則的になった。最後に（8月23日（水）～）水路に平行する道路部分を北東から南西に進んだ。ここは、面積は僅かだが、砂利敷の道路で硬く、地表から地山まで約1.8 mと深く、さらに幹線水路に隣接しているため神経を使い、特にはかどらなかった。8月7日（月）から僅かに確認された遺構の記録・精査に入り、細々と24日（木）まで続けた。9月4日（月）に重機による掘り下げは終了。検出作業を続け、6日（水）にほぼ終了。9月1日（金）からは、山口遺跡の調査も一部併行して始めた（草刈り等）。

9月14日（木）に終了確認、15日（金）航空写真撮影、梱包等、19日（火）器材搬出。

整理

期間については例言参照。穂貫田遺跡の遺物整理は、7月から調査と併行して行い、整理期間前にトレースまで終了していた。11月後半～12月前半は、両遺跡の遺構トレース、駒板遺跡の遺物整理を行い、その後1月前半まで、図版、写真図版の作成を行った。ここまで作業員1名がついていたが、残りは調査員1名だけとなり、図版類の残り、原稿執筆、割付、収納を3月いっぱいまで行った。

2　特　記　事　項

凡例は、例言の下にある。方針等は、金子（1998）参照。

精査範囲と確認（のみ）範囲について

精査（発掘調査）範囲は、破壊を前提とした通常通りの調査をする範囲。確認（のみ）調査範囲は、工事による掘削が遺構面まで及ばないため、遺構・遺物の検出とその記録で終了となるが、埋蔵文化財が発見されるまで下げるよう（最終Ⅶ層上面）、県教育委員会から指示があった。

グリッドについて（第6・27・34図）

平面直角座標（第Ｘ系）に合わせ、遺跡全体をカバーできるように10×10ｍのメッシュをかけ大グリッドとしたが、調査範囲が広いので大グリッドを 10 × 10 個まとめて、北西方向から南東方向へⅠ、Ⅱ、Ⅲとローマ数字をふって○区と称した。大グリッドは、東西方向に西からアラビア数字、南北方向には北からアルファベット大文字を付し、１Ａ等とし、Ｖ１Ａグリッド等と呼称した。遺跡は連続しているが、グリッドは別々に設定した。

座標値は、次の通りである（世界測地系）。穂貫田遺跡のⅣ６Ｆ、Ⅵ２Ｃの北西端の座標値は（第６図）、Ⅳ６Ｆ（Ｘ＝－ 71,130.000、Ｙ＝ 26,790.000）、Ⅵ２Ｃ（Ｘ＝ 71,100.000、Ｙ＝ 26,950.000）である。駒板遺跡のＸ５Ｈ、ⅩⅦ１Ⅰの北西端の座標値は（第 27 図）、Ｘ５Ｈ（Ｘ＝－ 71,470.000、Ｙ＝ 26,940.000）、ⅩⅦ１Ⅰ（Ｘ＝ 71,580.000、Ｙ＝ 27,000.000）である。山口遺跡については、実際使用しなかったので割愛する。

各大グリッドを５ｍづつ四等分し、北西を①、北東を②、南西を③、南東を④とし、Ⅳ６Ｆ①等と呼称（中グリッド）。大グリッドを２ｍづつ 25 等分した小グリッドは、大グリッドと同様、東西方向に西からアラビア数字、南北方向には北からアルファベット小文字を付した。

調査条件について

黄金週間に桜が満開になった年で、４月は例年より寒かった。５月～６月の上旬は少雨で、５月の終わりは土が硬くなり検出は思うように進まなかった。６月中旬に梅雨に入ったが少雨傾向は続き、７月は低温だったこともあって作業ははかどった。８月に急に暑くなり（ほぼ毎日真夏日）ペースは落ちたが、人力による掘削はほとんどなかったので調査にはあまり影響はなかった。９月も暑い日が続いたが気温はやや下がり少雨傾向は続いた。

土。基本的にはわかりづらく検出に難があったが、掘るのには問題はなかった（第Ⅱ章参照）。

作業員は、短期間に終わる周辺遺跡の調査の関係で、４月は 13 名、５月１日から 23 名、同 15 日から 28 名と変動。出勤率が悪かったこともあり４月は人数が足りず作業がはかどらなかった。

調査範囲が広いため、プレハブから調査区への距離が遠くて（最長 600 ｍ）移動時間が 15 分以上かかることも多く、終了時刻、物品の補充等、作業に大きな支障となった。調査員は自転車を使用した。

期間を通して少雨で、また調査区内に水がなく撮影時に使う水などに難儀したが、遺構数が少なく、器材水洗用の水は水路からポンプでくみ上げて使用したので、それほど支障にはなっていない。

遺構等の平面実測について

基本的に一般的な簡易遣り方で縮尺 1/20 作成したが、確認範囲については、最初平板、後に光波トランシットによる測距を基に縮尺 1/100 で作成している。

遺構の名称について

野外では下のように便宜的に作業順に名前を付けた。精査した遺構と確認のみの遺構は別々に番号をつけたが（精査は算用数字、確認は丸数字）、報告書では通しでつけ直している。竪穴住居跡→Ａ○Ｆ、土坑→Ｄ○Ｆ、陥し穴状遺構→Ｅ○Ｆ、焼土→Ｆ○Ｆ、溝→Ｇ○Ｆ。○の中は番号が入る。

遺構図版の点検・修整について

平面図と断面図の照合等の図面点検は、現地で全て行った。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにし本文中にその旨記している。ただし、1 / 20 の縮尺で１㎜の違いについては誤差範囲とし、特にふれていない。

参考文献

金子昭彦　1998「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』ⅩⅧ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅳ　穂貫田遺跡

1　概　　要

精査した遺構は、第2節、確認のみの遺構は、第3節、遺物は、第4節冒頭を参照いただきたい。

精査と確認のみの調査範囲の別は、第5図参照。図の凡例は、例言の下にある。遺構名称は、野外では、精査、確認のみの遺構それぞれ別に付けていたが、報告にあたり通しで付け直した（第Ⅲ章参照）。基本層序、調査経過・方法、遺構の検出状況は、第Ⅱ、Ⅲ章参照。確認範囲での遺物の取り上げ方針については、第3節参照。調査の具体的な状況は、第2、3節、第Ⅲ章を参照いただきたい。

調査は、調査員一名が重機に張り付いて第一次検出面まで下げ、その後人力で検出するという手順で行ったが（詳細は第Ⅱ章）、最初の北半部については、土層の堆積状況を見るために4×2m程度の試掘トレンチを点々と設置した。この時点ではまだ基準杭の打設が済んでいなかったので、便宜的に現地形に従ってあ～き区と分けて遺物を取り上げた（第5図参照）。①～④も含めたグリッドについては第Ⅱ章参照。なお、第6図のグリッド図は、工事用図面に縮小コピーかけたものに測量業者がメッシュを入れ、それをトレースして作成したものであり、現地で打設した杭を基に作成した図面とは若干のずれが生じていることをお断りしておく。

以上に示した遺構の他に、溝跡が13条ほど、Ⅳ7E、Ⅴ9D、Ⅵ1B、Ⅵ3F、Ⅸ10D、Ⅸ9C～Ⅹ1E、Ⅸ8E、Ⅸ4F～3G、Ⅸ8H、ⅩⅡ10H、ⅩⅢ6G付近に確認され、Ⅳ7E、Ⅴ9D、Ⅵ3Fでは精査をして図面も作成している。Ⅱ層にやや似た土で、当初から新しいものだと予測はしていたのだが、証拠がなかった。それが、Ⅸ9C～Ⅹ1Eで確認された1条が、現在の地境に全く一致しており、またⅨ8Eでは掘り込み面が表土にまで及ぶことが確認できた。溝跡の覆土にほとんど違いはなく、いずれも新しいものと判断して、報告は割愛した。溝跡は、全て現在の北上川に沿ってほぼ南北方向に延びる。Ⅸ9～10Dには近現代の掘立柱建物跡も確認したが、同様に割愛する（地境に沿って3間×2間だが、全容不明、半裁した結果、柱穴の土はボソボソ、上司も同意）。

さらに、溝状陥し穴状遺構に似た黒いシミが、12基？調査区南部に確認された。Ⅸ6JからⅨ9Fグリッドにかけては10基？が並ぶように確認され、その他にⅩⅢ4G、ⅩⅢ7Fグリッドに各1基？ずつ確認された。Ⅸ8H付近の1基？については県教育委員会の試掘調査で確認されている。精査範囲に入っているものを半裁したところ、黒土から周囲の地山である黄褐色土へ漸移的に変化していき、掘り込んでいるようには思えなかった。写真図版8の中段は、そのⅩⅢ7Fの半裁状況である。検出面での輪郭がややずんぐり・ぼんやりしているなとは思っていたが、断面においても輪郭はぼんやりしていたのである。念のため、確認のみの範囲から検出された同類にもトレンチを入れてみたが、いずれも同様で、人工的掘り込みとは確認できなかった（断面、他には不整形、下部に黒土が大きく横に広がるタイプあり）。正体は見極められていないが、倒木が腐ったものであろうか。

なお、県教育委員会が事前に行った試掘調査で今回と同じ調査範囲に、この陥し穴状のシミ以外にも、北半部から点々と柱穴状土坑が16基と、土坑がⅣ8B付近に1基検出されているが、柱穴状のものの多くははぜ杭や根穴等の疑似現象であり、土坑については確認できなかった。試掘では、さらにⅩⅠ9I、ⅩⅡ7H付近にも各1基ずつ土坑が確認されているが、これらも今回確認できなかった。これらは、試掘時より事業範囲がずっと狭くなったため、調査範囲外になった可能性がある。

遺構･遺物が比較的多く発見され、確認のみの調査範囲の検出面はⅢ～Ⅳ層にとどまることが多く、その下の原地形については十分に確認できなかった。しかし、中央部の平行する二つの狭い調査範囲より南側は、第７号住居跡以外確認されず、また遺物の出土もほとんどなかったので、Ⅶ層以下まで下げている。その結果、Ⅶ層を上面とする地形が明らかになった（写真図版８の一番下、第Ⅱ章参照）。

2　精査した遺構（第５～10・12～13図、写真図版２～５・19）

平安時代の竪穴住居跡２棟、縄文時代（後期前葉？）の袋状土坑１基を精査した。なお、平面図と断面図の照合は現地で行い、どうしても合わない場合は、その旨を記した。また、遺構内出土遺物は、第13～14図に集成図としてまとめたが、詳細は第４節を参照いただきたい。

今回の調査で精査した範囲は、第５図の濃い網がかかった部分1,550㎡で、ほとんどが幅約1.5ｍの狭い範囲である。この範囲は、後に変更されたもので（第Ⅲ章）、当初は幅５ｍ、地点によってはそれ以上あった。変更前に、重機により第一次検出面（Ⅲ～Ⅳ層上面）まで下げていたので、検出作業は、遺構周辺に限り、第５図より広い範囲まで行っている。なお、精査範囲は、遺構のあるなしにかかわらず、最終的にⅦ層上面まで下げた。検出作業は、概ね、Ⅲ～Ⅳ層上面とⅦ層上面の２回行ったが、竪穴住居などが発見されて比較的高い位置で検出作業を行った地点では、Ⅳ層上面で再び検出し、都合３回検出作業を行った。調査で確認された最近の溝跡や疑似現象については、第１節に記した。

(1) 竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡２棟を精査した。

第１号住居跡（第８・13図、写真図版３～４・19）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央付近で東西に伸びる排水路予定地のほぼ中央。Ｖ５Ｅ～６Ｅグリッドで、東側に第２号住居跡が隣接する。地表下30㎝、Ⅲ層上面から10㎝下で検出（この地点にⅡ層は検出されず）。検出面がⅢ層、覆土がⅡ層に近い土ということで、違いが比較的はっきりしており、また当初の調査範囲で広くⅢ層まで下げており、さらには検出範囲にカマドがあって焼土粒や土器片も比較的多く出土したため、比較的容易に検出できた。ただし、西壁と東壁のカマドより北側は、上面では不明瞭であった。また、南西部分は、県教育委員会の試掘トレンチ（T⑤）で壊されているが、その回答に図示された住居とは、位置や形が異なっている。耕作時に全体的に大きく削平されており、北側カマドは、煙道の一部しか残っていなかった

＜精査状況・図＞検出は当初に掘り広げた範囲まで行ったが、精査は、後に変更された計画通り1.5ｍ幅の排水路予定範囲のみ行った。ただし、カマドの焚き口と煙道を別々に調査するのは不都合が多いと考え、調査範囲からはみ出す南カマドの煙道も調査することにした。北側カマド（B-B′）の、住居外に残った煙道のＢ側の上場の位置が平面図と断面図で合わなかった（浅いため、横から見た場合と上から見た場合の認識状の違いによるものと思われる）。住居断面図のA-A′も、壁、トレンチの位置が微妙に（１㎜）ずれるが、誤差範囲と考えた。

＜重複＞調査した範囲には、ないと思われる。

＜覆土・堆積状況＞Ⅱ～Ⅳ層の混土か。基本的な色調はⅡ層に近い。

＜平面形・規模＞確認できない範囲もあるが、一辺約4.5ｍの隅丸方形か。

＜壁・床・掘り方＞壁はⅢ層で、非常に浅くはっきりしない。床は、黒褐色のⅣ層上面。床面を10

cm程度下げたが、Ⅳ層が砂質のせいか、掘り方は全く確認できなかった。
＜柱穴＞黒褐色のⅣ層を床面とするためもあってか、調査範囲内には検出できなかった。２回丹念にクリーニングしてみたが。
＜カマド＞東壁南寄りに２つ確認された。残存状況から考えて、南側のカマドの方が新しいと思われる。北側のカマドは、ほとんどが削平されて煙出の底しか残っていなかった。念のためトレンチを入れてみたが、焚口は確認できなかった。煙出の底は火を受けた痕跡が全く認められなかったが、その手前住居寄りに一部ブロック状の焼土が見られた。南側のカマドは、焚口も確認できたが、焼土混じり（現地性でない）で炭化物や土器が出土した二次堆積土の下から検出され、黒い砂層（Ⅳ層）で焼土が形成されたためか、焼土（５層）は細かいブロック状を呈し面的に広がらない（ただし上面はカリカリと締まり、この部分は面的に広がる）。焚口は、煙出方向に向かってやや上がっている。煙道は、火を受けた痕跡がほとんど認められなかったが、住居壁と煙道との北側の接点付近は焼けている。
＜その他の付属施設＞精査した範囲では確認されなかった。
＜出土遺物＞（出土状況）削平がひどいせいか、遺物はカマド付近しか出土せず、南側カマド焚き口上面付近から比較的多く出土した。ただし、小片ばかりである。p. ３・４は、北側カマド煙出から出土し（カマド１層）、p. ３は、住居方面に外側を向けて立つような形で、p. ４は、内面を上に向けた状態で出土した。p. ５は、北側カマドの前面から出土した小片である（北カマド３層）。p. ６は、南側カマド焚口を覆っていた土に含まれていた小片である。p. ７は、その焚口上面で)(状に二片の内面を南北方向に向けて立つような形で出土した（南カマド５層。D-D′ 断面図にも図示）。p. ８は、甕の口縁部が北側に向かってやや傾斜したような形で出土し、下からも破片が出土（南カマド５層）。写真図版４参照。
（遺物）第 13 図、写真図版 19 の 19 に示した土師器・須恵器、焼粘土塊、石器？が出土した。土器類は、不掲載を含めて 1,343 g出土している。
＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～ 10 世紀初頭）の可能性が高い。

第２号住居跡（第９・13・14 図、写真図版４・５）
＜位置・検出状況＞調査区北半中央付近で東西に伸びる排水路予定地のほぼ中央。Ｖ６Ｄ～７Ｅグリッドで、西側に第１号住居跡が隣接する。地表下 20～30cm、Ⅲ層上面でⅡ層に近い土の広がりを認めた。第１号住居跡の検出状況と同様だが、土器片や焼土粒の混入が少なく、またプランもはっきりせず、Ⅱ層の単なる落ち込みの可能性を捨てきれなかった（西側で現にそういう落ち込みを確認）。そこで、北側調査境に沿って幅約 50 cmのトレンチを入れてみた。30 cmくらい深く掘っても床が確認されず、第１号住居跡の浅さを念頭に置いていたため、やはり単なるⅡ層の落ち込みだろうと思い始めていた。しばらくして来てみると、作業員が完形に近い坏を取り上げていた。あわてて止め、約 20 cmくらいの深さにとどめて長く掘り広げてもらった。相変わらずはっきりしなかったので、今度は断面をクリーニングしてもらった。この辺りはⅣ層が汚れた再堆積のため、まだはっきりしなかったが、それでも壁らしきものに見当が付いた。今度は、検出面全体を 10 cm程度下げて広げてもらったところ、やっとプランがほぼ見えた。しかし、カマドは確認できず、プランもはっきりしない部分を残した。
＜精査状況・図＞検出は当初に掘り広げた範囲まで行ったが、精査は、後に変更された計画通り 1.5 m幅の排水路予定範囲のみ行った。北側断面で（A-A′）、一部掘りすぎて確認した床を追って掘り広げたが、予想より床面の凹凸が大きく、東側に掘り足らない部分を多く残してしまったようで（当初 B-B′ の２層の下面を床と考えていた）、一部に認められる貼床、焚き口らしい焼土、土坑様の落ち込

みは、掘り方を確認するために掘り下げた際に確認したものである。断面図、下場等の位置が微妙に（1㎜程度）ずれるが、誤差範囲と考えた。

＜重複＞調査した範囲には、ないと思われる。東壁の一部は、試掘トレンチで壊してしまった。

＜覆土・堆積状況＞Ⅱ～Ⅳ層の再堆積で、1層はⅡ層に近く、2層はⅡ層とⅢ層の土がほぼ1：1で混じったもの、3層は大部分はシルト化したⅣ層だが、径3㎝くらいの灰白色火山灰のブロックや炭化物が混じる。4～5層は黒土である。

＜平面形・規模＞確認できない範囲もあるが、一辺5m程度の隅丸方形か。

＜壁・床・掘り方＞Ⅲ層下部～汚れⅣ層を壁としている。カマド焚き口の可能性がある焼土の周囲は黄褐色土（シルト化したⅣ層か、あるいはⅦ層？）を貼って床としているが（B-B′の10層、硬く締まる）、大部分は黒褐色のⅣ層をそのまま床としているようである。覆土と異なって、床は焼土粒が面的に散るので、比較的はっきりとらえることができる。上述のように、当初B-B′の2層下部を床と捉えていた。しかし、この面も水平に広がり、さらにその下の9層の土もさらに細かく水平に分かれそうなので、もしかすると床が何面も存在するのかも知れない（そうすると、土坑様の落ち込みの解釈に都合が良い）。最終床面を5～10㎝程度下げたが、Ⅳ層が砂質のせいか、掘り方は確認できなかった。一部に黒いシミが検出され断ち割ったが、柱穴にはならなかった。

＜柱穴＞黒褐色のⅣ層を床面とするためもあってか、調査範囲内には検出できなかった。2回丹念にクリーニングしてみたが。

＜カマド＞特定できていないが、南側に認められた柱穴程度の大きさの焼土を煙出とすれば（第9図）、南側にカマドを持つ（ただし、この焼土が住居に伴うという保証はない）。やや遠いが（間には焼土粒は認められない）、精査範囲内に認められた焼土は、その焚口の可能性があろう。ただし、上からは焼土ブロックが面的に広がるように見えるが、断面でははっきりでてこない。p. 6とs. 7の間の土坑縁に認められる礫は（第9図）、焼けている。

＜その他の付属施設＞掘り方を確認するために掘り下げた際、焼土の東側に土坑様の落ち込みを確認した。ただし、浅く不整形で意図的な掘り込みかどうかはっきりせず、さらに貼床面のみを床とすれば覆土から掘り込まれていることになり、本住居とは関係ないことになる。いずれにしろ、今回の調査では全容を捉えることができず、はっきりしない。

＜出土遺物＞（出土状況）上述のように、最初に開けた部分（おそらく第9図の「サブトレンチ」と「下げすぎ」の間）で、完形に近い坏が出土（第13図12・13）。p. 1～3は、床直上（A-A′3層らしい）から出土しており（写真図版5）、1は床から3㎝、2は4㎝、3は3㎝浮いている。1は、底内面を上に向けて少し西側に傾き、2と3も内面を上に向けているが、ほぼ水平である。同一個体の須恵器か。p. 4は、外面を上に向け、ほぼ水平だが西端は床面に食い込む（と思っていたが、この面が最終床面でなかったのは上述のとおりで、「床下」で取り上げたものは、いずれもこの面より下から出土したものである）。p. 5の坏も、床～「床下」出土で、内面を上に向けて南西方向に傾斜している。p. 6～○は、床面掘り下げ後に出土したもので、p. 6は内面を上に水平に出土し、s. 7は、p. 4の下から出土した石で、調査時には砥石かと思っていたが違った。p. 8、9は、土坑様の落ち込みから出土したもので（土坑？7層）、8は小片の集まりでほぼ水平に出土したが、調査範囲外に続いてしまって全てを回収することはできなかった（大きな破片はできるだけ取り上げたが）。9は坏で、8の下から、内側を上に向けて立つような形で出土。

（遺物）第13・14図、写真図版19の19に示した土師器・須恵器が出土した。土器類は、不掲載を含めて3,832 g出土している。

＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～ 10 世紀初頭）の可能性が高い。

(2) 土　　坑

縄文時代（後期前葉）の袋状土坑を１基精査した。

第１号土坑（第 10・14 図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央付近で東西に伸びる排水路予定地の中央より西寄り。Ｖ３Ｅ③グリッド。当センターの試掘トレンチの南側断面で確認し、Ⅳ層の下から掘り込まれているように見えた。残りの南半分を精査する際、Ⅳ層上面で検出したが全くプランは掴めず、Ⅳ層を除去してＶ層を少し削ったら、きれいな円形プランが広がった。

＜精査状況・図＞断面図、下場等の位置が微妙に（１㎜程度）ずれるが、誤差範囲と考えた。上場は、崩れた後の形である。

＜重複＞ないと思われる。

＜覆土・堆積状況＞上半は、砂混じりの再堆積土、下半の中央はブロックの集合体で、崩れたものか。その周囲は、締まらない土で、中央の土の周りに後から流れ込んだものと思われる。

＜平面形・規模＞検出面では直径１ｍの円形（検出後にやや崩れて、図ではやや不整形になっている）。底は直径約 1.16 ｍの不整円形。

＜断面形・深さ＞下部が突出する袋状。約 42 ㎝。

＜壁・底＞壁はＶ～Ⅶ層、底はⅦ層。直径１～３㎝程度の突き刺したような円～楕円形の穴（掘り方？）が認められるが、基本的には平らである。

＜副穴等の付属施設＞確認されなかった。

＜出土遺物＞（出土状況）下半から薄い棒板状の炭化物が検出されたが、残り悪く形がはっきりしない。（遺物）３層から小形壺の胴部破片が出土している（第 14 図）。これが全てで、21 ｇである。

＜時期・所見＞検出状況からは古く位置づけられるが、３層から出土した小形の壺型土器が気になる。周囲のⅣ層が汚れた再堆積層であることを考えれば、Ⅲ層とそれほどの時間差を想定する必要はないかも知れない。今回の調査で出土した土器は、縄文時代中期末が上限となるが、小形の壺を考慮すれば、後期前葉あたりまで下げて考えるべきか。

3　確認のみの遺構（第５～７・10 ～ 12 図、写真図版２・６～８）

竪穴住居跡（平安時代）５棟、土坑７基、焼土５基検出した。土坑は、いずれも 1.5 × １ｍ程度の小判形で、縄文時代後期前葉１基（第２号）、平安時代およびその可能性のあるもの６基（第３～８号）である。焼土は、形と大きさは様々で、１基は縄文時代後期前葉（第２号）、２基は平安時代（第１、３号）、残りの２基（第４～５号）は平安時代と最近のものの二つの可能性がある。

確認のみの調査範囲は、第５図の薄い網で示した範囲で、4,650 ㎡に及ぶ。工事による掘削が遺構面まで及ばないため、検出作業の後遺構の範囲を図に記録して終了となるが、遺物・遺構が確認されるまで下げるように（最終はⅦ層上面）、県教育委員会の指示があったので、地点により検出面は様々である（第 10 ～ 12 図に書かれている層名）。

遺物については次節を参照いただきたいが、遺構出土の遺物については、別々に取り上げると後々不都合が多いと判断して、原則的に埋め戻した。第 12 図№１は、残りの良い平安時代の坏で、遺構から出土していないので取り上げてしまったが、古代の残りの良い土器が遺構外から出土するという

のは普通のあり方ではない。近くに検出された第４・５号焼土のところで記したように、竪穴住居跡が存在する可能性があり、そうした眼でよく確認したつもりだが、検出することはできなかった。

第５図の“工法変更により調査不要となった範囲”は、既に砂利敷の道路となっている。工事の際に砂利を入れ替えるとのことで確認調査をする予定だったが、現状のまま砂利を補充することになり調査不要になったものである。

なお、調査で確認された最近の溝跡や疑似現象については、第１節に記した。

(1) 竪 穴 住 居 跡

平安時代と思われる竪穴住居跡を５棟確認した。なお、号数は検出順である。

第３号住居跡（第 11・21 図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央東端。Ⅵ１Ｂ～Ｃグリッドで、北側に第４号住居跡が隣接する。Ⅳ層上面まで重機で剥いだ時点で土器が出土し、その後ジョレンをかけたところ、はっきりと検出。西側の調査範囲外に続く。

＜重複＞近代以降の溝跡に切られる。

＜検出面覆土＞第１・２号住居跡と同様で、基本的な色調はⅡ層に近く、溝跡とほとんど同じだが、より淡くⅣ層の再堆積土が混じり、さらに黄褐色土のブロックや焼土粒、土器片が混じるのが違う。

＜平面形・規模＞確認できない範囲もあるが、一辺約４ｍの隅丸方形か。

＜カマド＞東壁中央付近に１つ確認された。

＜出土遺物＞土師器、須恵器が出土したが、埋め戻した。周囲から出土した第 21 図 59 ～ 61 が、この住居に帰属する可能性もある。

＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～ 10 世紀初頭）の可能性が高い。

第４号住居跡（第 11・21 図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央東端。Ⅵ１Ｂグリッドで、南側に第３号住居跡が隣接する。Ⅳ層上面まで重機で剥いだ時点で土器が出土し、その後ジョレンをかけたところ、はっきりと検出。大部分が東側の調査範囲外に続く

＜重複＞検出した範囲では、ないと思われる。

＜検出面覆土＞第１・２号住居跡と同様で、基本的な色調はⅡ層に近いが、より淡くⅣ層の再堆積土が混じり、さらに黄褐色土のブロックや焼土粒、土器片が混じる。

＜平面形・規模＞確認できないが、一辺 4.5 ｍ程度の隅丸方形か。

＜カマド＞検出した範囲では、確認できなかった。

＜出土遺物＞土師器、須恵器が出土したが、埋め戻した。周囲から出土した第 21 図 59～61 が、この住居に帰属する可能性もある。

＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～ 10 世紀初頭）の可能性が高い。

第５号住居跡（第 12 図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区北端中央。Ⅱ２Ｆ～Ｇグリッドで、西側に第６号住居跡がある。水田側、表土 20 ㎝＋Ⅲ層 20㎝下で、北側、地表下 70㎝で確認。Ⅲ層まで重機で剥いだ時点で焼土や土器が出土し、その後ジョレンをかけたところ、はっきりと検出。北側の調査範囲外に続く

＜重複＞検出した範囲では、ないと思われる。
＜検出面覆土＞第１・２号住居跡と同様で、基本的な色調はⅡ層に近く、１～２㎝大のⅣ層？ブロックや焼土粒、炭化物を多く含む。
＜平面形・規模＞北側が確認できないが、一辺4.8ｍ程度の隅丸方形か。
＜カマド＞東壁の中央付近に１つ、南東隅に１つ確認した。中央寄りのものは煙出付近に礫が認められ、また手前の焚口付近には焼土が顕著に見られる。南東隅のものは、焼土粒が疎らに散る程度で、他の柱穴状土坑等の可能性も残すが、同じく手前の住居内に焼土が認められたため、カマドと考えた。
＜出土遺物＞土器が多く出土したが、埋め戻した。
＜時期・所見＞出土土器から、平安時代の可能性が高い。

第６号住居跡（第12・22・25図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞調査区北端中央西寄り。Ⅰ 10 Ｇグリッドで、東側に第５号住居跡がある。水田側、表土20㎝＋Ⅲ層20㎝下、北側表土下70㎝、Ⅲ層で確認。試掘トレンチの時点で既に検出していたが、重機で周囲を剥いだ後改めて検出する際、土が硬くなってしまったためジョレンの刃が立たず、スコップで剥いで両刃鎌で検出したので、表面が凹凸になってしまった。
＜重複＞検出した範囲では、ないと思われる。
＜検出面覆土＞第１・２号住居跡と同様で、基本的な色調はⅡ層に近く、焼土粒多く散り炭化物含む。
＜平面形・規模＞約5.3×4.4ｍの隅丸方形。
＜カマド＞東壁の中央付近に３つ確認した。一番北側の煙出部分は良く焼けていて焼土が面的に形成されている。
＜出土遺物＞試掘や重機で剥いだ際に土師器（第22図67～70）や鉄鏃（第25図１・２）が出土した。既に原位置から大きくずれ住居に帰属するかどうかはっきりしなかったので、埋め戻さなかった。
＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

第７号住居跡（第12図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞調査区中央西端、堤防際。Ⅶ４～５Ⅰグリッド。表土30㎝＋Ⅲ層10㎝下、Ⅲ層中で確認。重機で剥いだ際、焼土や土器が発見されたため住居の存在を予測し、後にジョレンをかけて検出。住居東端のみの確認で、また水田の撹乱が入り、検出状況は良好とは言えず、古代の竪穴住居ではない可能性を残す。
＜重複＞検出した範囲では、ないと思われる。
＜検出面覆土＞第１・２号住居跡と同様で、基本的な色調はⅡ層に近く、焼土粒や炭化物散る。
＜平面形・規模＞一部のみの確認のため、不明。
＜カマド＞検出した範囲では確認できなかったが、住居の壁に沿って覆土中に焼土粒が顕著に広がる（第12図）。
＜出土遺物＞周囲から縄文土器が出土している。
＜時期・所見＞出土土器からは縄文時代の遺構の可能性も残すが、検出面と覆土から、平安時代の可能性が高い。一部のみ確認しただけなので、竪穴住居跡ではないかも知れない。

(2) 土　　坑

７基検出し、いずれも1.5×１ｍ程度の小判形だが、１基は縄文時代後期前葉（第２号）、２基は平

安時代（第６・７号）、残りの４基（第３～５・８号）も平安時代の可能性がある。なお、号数は検出順である。

第２号土坑（第10図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅳ２Ｈグリッド。重機で剥いだ時点で土器が出土し、その後ジョレンをかけたところ、はっきりと検出。南側が一部調査区境にかかる。表土下Ⅲ層という場所なので、はっきりしないが、Ⅲ層から掘り込まれていることは確実である。また、撹乱をクリーニングして、Ⅶ層まで掘り込んでいることを確認した。ただし、この地点のⅤ～Ⅵ層は10～20㎝という浅さで、Ⅳ層は黒褐色である。また、周囲は撹乱をひどく受けていて、かろうじて幅約２ｍの帯状に残った部分に検出されたものであり、本来的には周囲に同様の土坑が広がっていた可能性もある。
＜重複＞調査できた範囲ではないと思われるが、北側は撹乱を受けている。
＜検出面覆土＞Ⅲ～Ⅳ層の再堆積土で、黒褐色の砂混じり土。
＜平面形・規模＞確認できない範囲もあるが、２×0.9ｍ程度の小判形か。
＜出土遺物＞縄文時代後期前葉前半の土器が多く出土したが、埋め戻してきた。
＜時期・所見＞出土土器から、縄文時代後期前葉前半の可能性が高い。

第３号土坑（第10図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ２Ｄグリッドで、周囲に第４・５号土坑、第１号焼土も検出された。黒っぽいⅣ層上面で検出。重機で剥いだ時点で周囲から土器が出土し、その後ジョレンをかけて検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞第４号土坑と同様Ⅲ層に近い暗褐色土で黄褐色土のブロック多く含むが、霜降りといった状態ではない。炭化物、焼土粒も、ほとんど見えない。
＜平面形・規模＞1.8×1.2ｍ程度の小判形。
＜出土遺物＞遺物は出土していないようである。
＜時期・所見＞形と規模およびその位置関係から、第４・５号土坑と一連のものである可能性が高く、また、第６・７号土坑とも一連のものである可能性がある。時期は特定しにくいが、第４号土坑に隣接する第１号焼土および第６・７号土坑の出土土器から考えれば、平安時代か。

第４号土坑（第10図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ２Ｄグリッドで、周囲に第３・５号土坑、第１号焼土も検出された。黒っぽいⅣ層上面で検出。重機で剥いだ時点で周囲から土器が出土し、その後ジョレンをかけて検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞第３号土坑と同様Ⅲ層に近い暗褐色土で、黄褐色土のブロックを霜降り状に含み、炭化物、焼土粒も含む。
＜平面形・規模＞1.6×1.2ｍ程度の小判形。
＜出土遺物＞遺物は出土していないようである。
＜時期・所見＞形と規模およびその位置関係から、第３、５号土坑と一連のものである可能性が高く、また、第６・７号土坑とも一連のものである可能性がある。時期は特定しにくいが、第４号土坑に隣

接する第1号焼土および第6・7号土坑の出土土器から考えれば、平安時代か。

第5号土坑（第10図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ2Eグリッドで、周囲に第3・4号土坑、第1号焼土がある。黒っぽいⅣ層上面で検出。重機で剥いだ時点で土器が出土し、その後ジョレンをかけて検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞Ⅱ層（？）に近い土で炭化物、焼土粒散り、特に南端は焼土粒が多い。
＜平面形・規模＞1.6×1.2m程度の小判形。
＜出土遺物＞遺物は出土していないようである。
＜時期・所見＞形と規模およびその位置関係から、第3・4号土坑と一連のものである可能性が高く、また、第6・7号土坑とも一連のものである可能性がある。時期は特定しにくいが、第4号土坑に隣接する第1号焼土および第6・7号土坑の出土土器から考えれば、平安時代か。

第6号土坑（第11図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ1～2Cグリッドで、周囲に第3・4号住居、第7号土坑も検出された。Ⅳ層上面まで重機で剥いだ時点で周囲から土器が出土し、その後ジョレンをかけて住居等とともに検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞Ⅱ層にⅢ層の土が混じるといった感じで、第3～5号土坑より住居の土に似ている。
＜平面形・規模＞1.3×0.7m程度の小判形。
＜出土遺物＞遺物は出土していないようである。
＜時期・所見＞形と規模およびその位置関係から、第7号土坑と一連のものである可能性が高く、また、第3～5号土坑とも一連のものである可能性がある。時期は特定しにくいが、第7号土坑出土土器から考えれば、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）か。

第7号土坑（第11図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ1Cグリッドで、周囲に第3・4号住居、第6号土坑も検出された。Ⅳ層上面まで重機で剥いだ時点で周囲から土器が出土し、その後ジョレンをかけて住居等とともに検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞Ⅱ層にⅢ層の土が混じるといった感じで、第3・5号土坑より住居の土に似ている。
＜平面形・規模＞1.4×0.7m程度の小判形。
＜出土遺物＞土師器、須恵器が出土したが、埋め戻した。
＜時期・所見＞形と規模およびその位置関係から、第6号土坑と一連のものである可能性が高く、また、第3～5号土坑とも一連のものである可能性がある。時期は、出土土器から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

第8号土坑（第11図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞調査区北東端。Ⅱ7Eグリッド。南側10mに第2号焼土がある。Ⅲ層上面まで重機で剥いだ時点で周囲から土器が出土し、その後ジョレンをかけて検出。近現代の畑（畝間）跡に切

られて、よく見えなかったが、うすぼんやり楕円形が見えた。
＜重複＞ないと思われるが、近現代の畑（畝間）跡に切られる。
＜検出面覆土＞畝間にも似たⅡ層に近い土で、炭化物、焼土粒僅かに入る。
＜平面形・規模＞1.8 × 1.1 m程度の小判形。
＜出土遺物＞周囲から土器片が出土しているが、本土坑からは出土していない。
＜時期・所見＞覆土と第７号土坑等との類似性から、平安時代の可能性がある。

(3) 焼　　土

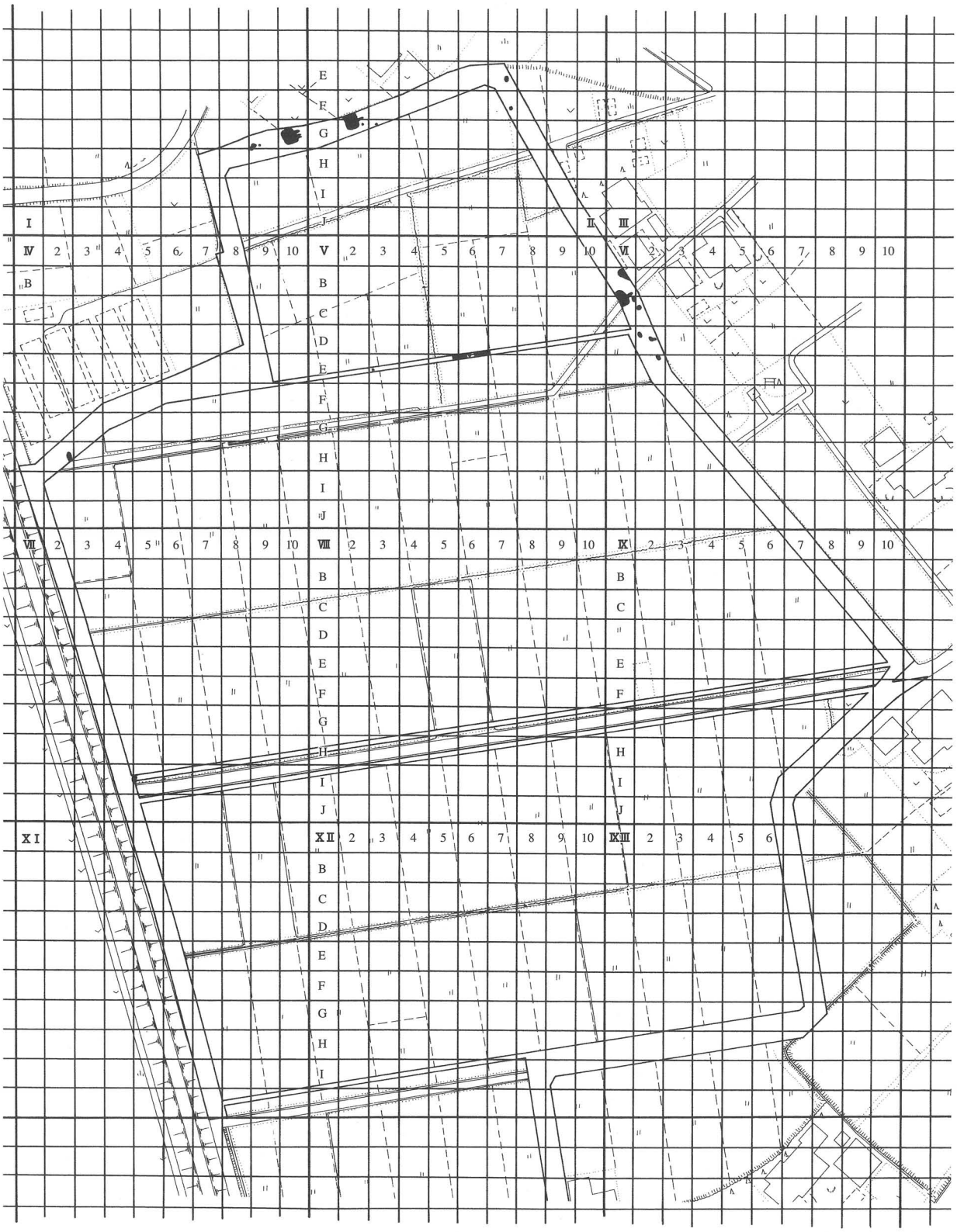
５基検出したが、形と大きさは様々で、１基は縄文時代後期前葉（第２号）、２基は平安時代（第１、３号）、残りの２基（第４・５号）は平安時代と最近のものの二つの可能性がある。また第２号の下には土坑が存在する可能性がある。なお、号数はほぼ検出順である。

第１号焼土（第 10 図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞調査区北半中央西端。Ⅵ２Ｄグリッドで、周囲に第３～５号土坑も検出された。黒っぽいⅣ層上面で検出。重機で剥いだ時点で土器が出土し、その後ジョレンをかけて検出。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞不明。
＜平面形・規模＞約 70 × 50 ㎝程度の小判形。
＜焼土の特徴＞形成面の土の特徴によるものか、良く焼けているとは言い難く、しっとりした感じ。土器片や炭化物も混じり、現地性でない可能性もある。
＜出土遺物＞土師器が多く出土したが、埋め戻した。
＜時期・所見＞出土土器から、平安時代と思われる。

第２号焼土（第 11 図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区北東端。Ⅱ７Ｆグリッドで、10 ｍほど北側に第８号土坑が検出されている。黒っぽいⅣ層中に検出。重機で剥いだ時点で確認。
＜重複＞周囲に同心円状に汚れたⅣ層再堆積土が広がり、下に土坑があるかも知れない。
＜検出面覆土＞不明。
＜平面形・規模＞ 86 ㎝× 80 ㎝程度の小判～円形。
＜焼土の特徴＞ダマになっている部分もあるが、基本的にカリカリと良く焼けている。中央の凹み？に炭化物の混じった汚れⅣ層再堆積土が認められる。現地性と思われる。
＜出土遺物＞出土していない。
＜時期・所見＞検出面から、縄文時代、それも後期前葉の可能性がある。

第３号焼土（第 12 図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区北端中央。Ⅱ３Ｇグリッドで、10ｍほど西側に第５号住居跡が検出されている。Ⅲ層中に検出。重機で剥いだ時点で確認し、土山となって残されていた。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞不明。
＜平面形・規模＞ 35 ㎝× 30 ㎝程度の楕円形。

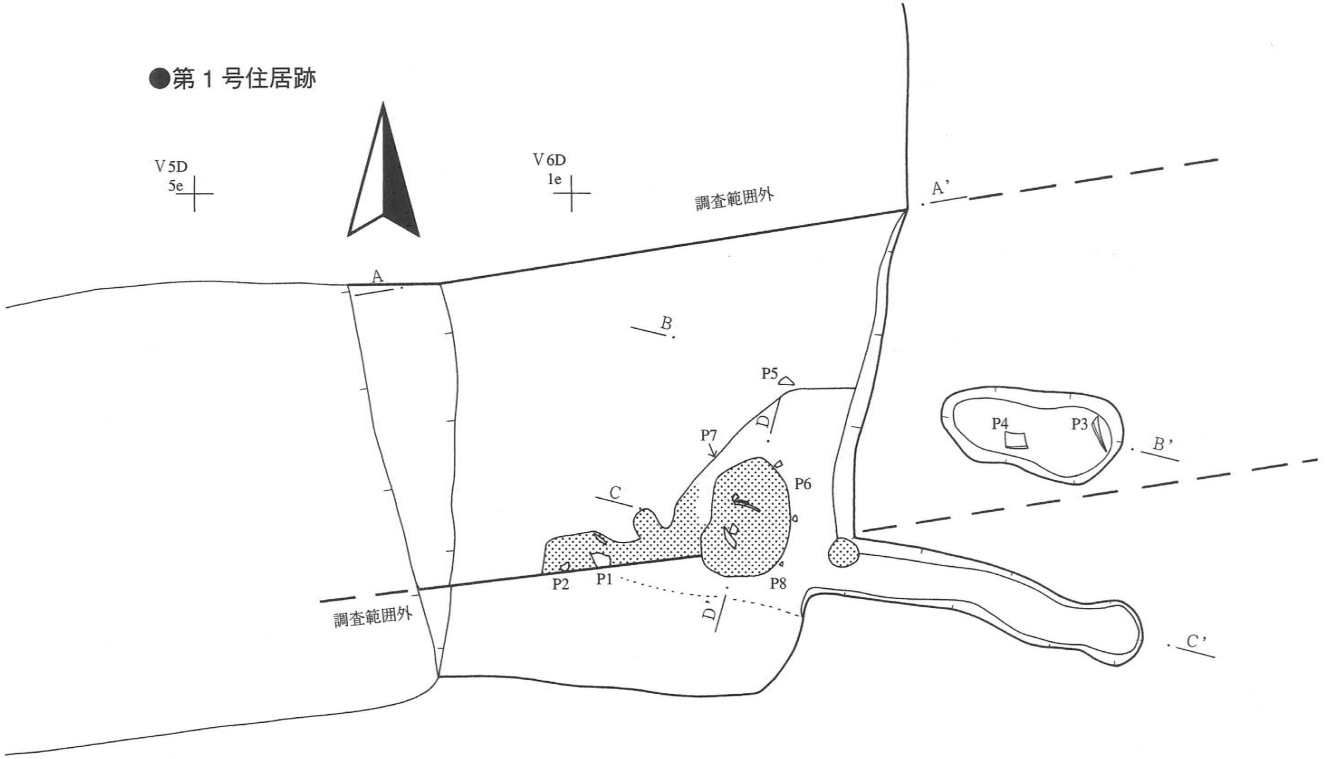
第５図　調査範囲と地山（Ⅶ層）上面の地形（濃い網は要精査範囲、薄い網は確認のみの範囲）



第6図　グリッド

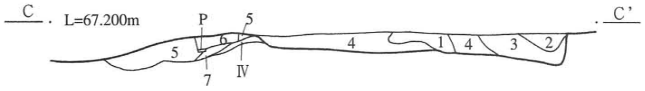
第７図　遺構配置図（網かけ部分は調査しなかった範囲）

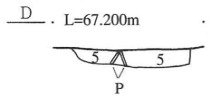
●第１号住居跡



1：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子多量に含む。

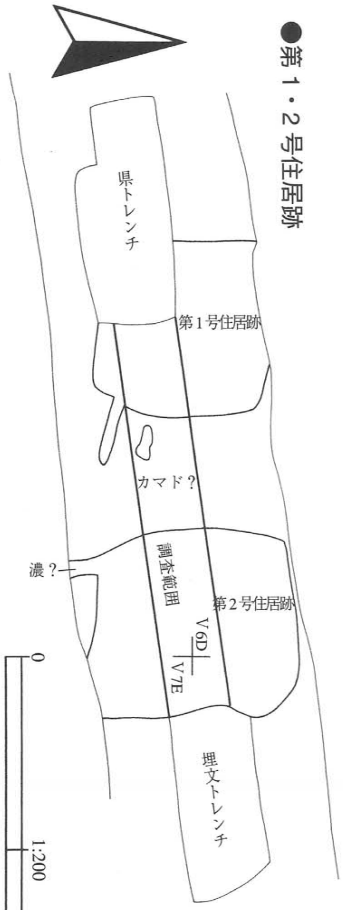
1：7.5YR3/1黒褐色　砂質シルト　1～2㎝大の焼土ブロック、
　焼土粒多量に含む。
2：10YR3/1黒褐色　シルト　もろい。Ⅲ～Ⅳ層上部？の再堆積土。
3：10YR3/1黒褐色　シルト　2層より明るい。Ⅳ層粒子多量に含み、
　1㎝大の焼土ブロック含む。Ⅳ層と覆土（南側カマドの４層に相当）の混土。床下土。





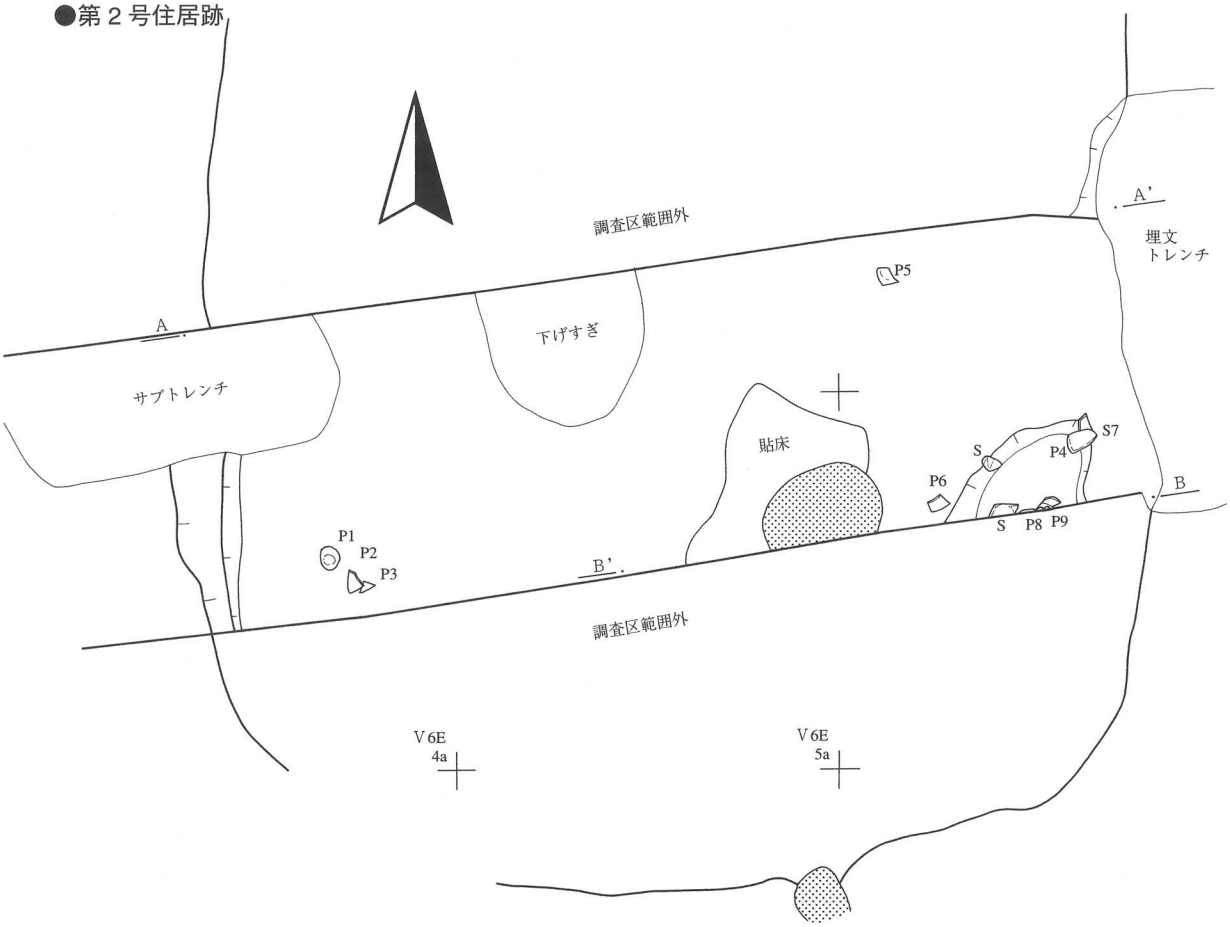
1：10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。Ⅲ～Ⅳ層上部？の再堆積土。
2：7.5YR3/1黒褐色　シルト　焼土粒多く含む。北側カマドの2層より
　焼土粒少ないが、ほぼ同じもの。
3：10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。1層とほとんど同じ。
4：7.5YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子多量に含み、焼土ブロック、
　焼土粒含む。5：7.5YR3/2黒褐色地に5YR4/8赤褐色のブロック
　シルト１～２㎝大の焼土ブロック、焼土粒多量に含む。
6：10YR3/2黒褐色　シルト　床～床下土。
7：7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　焼土粒多く含む。

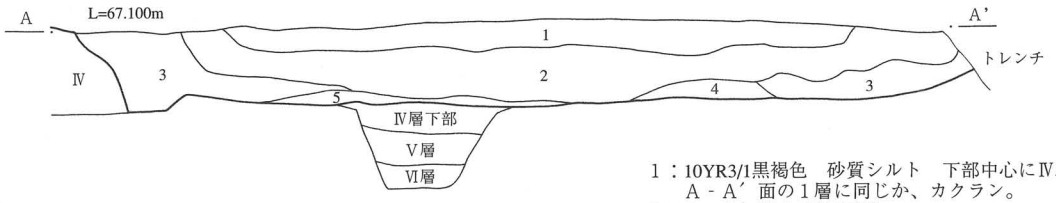
●第１・２号住居跡



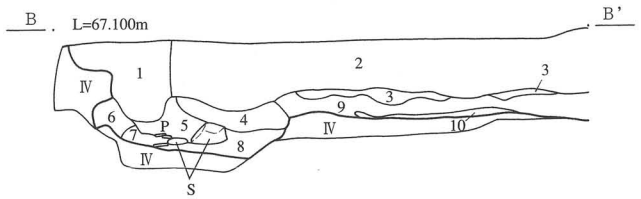
第８図　第１号住居跡

●第２号住居跡

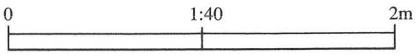




1：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多量に含む。
2：10YR2/1黒色　シルト
3：10YR3/2褐色　シルト　灰白色火山灰多く含む。
4：10YR3/1黒褐色　シルト　シルト化したⅣ層再堆積土含む。
5：10YR2/1黒色　シルト　焼土粒多く含む。

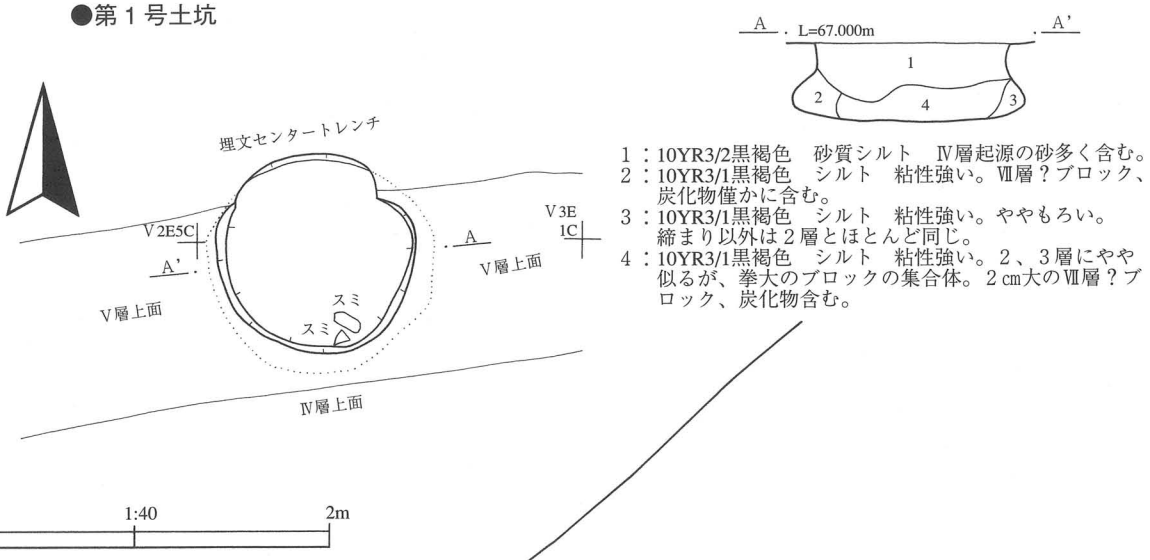


1：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　下部中心にⅣ層ブロック多い。A－A′面の１層に同じか、カクラン。
2：A－A′面の2層に同じ。
3：10YR3/1黒褐色　砂質シルト　2層と9層の中間色。１㎝大の焼土ブロック含む。
4：10YR3/1黒褐色　シルト　3層とよく似るが、焼土ブロック多く含む。
5：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多く、Ⅳ層の再堆積か。
6：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。全ての層の中で最も黒い。Ⅲ層の再堆積にⅣ層ブロック含む。
7：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。二番目に黒い。礫、土器含み、炭化物、焼土粒僅かに含む。
8：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。三番目に黒い。Ⅳ層粒子多く、炭化物、焼土粒僅かに含む。
9：7.5YR3/1黒褐色　シルト　４層とほとんど同じだが、焼土粒少ない。
10：10YR3/1黒褐色地の上面に10YR4/3にぶい黄褐色土　シルト硬く締まる。シルト化したⅣ層を貼ったもの。



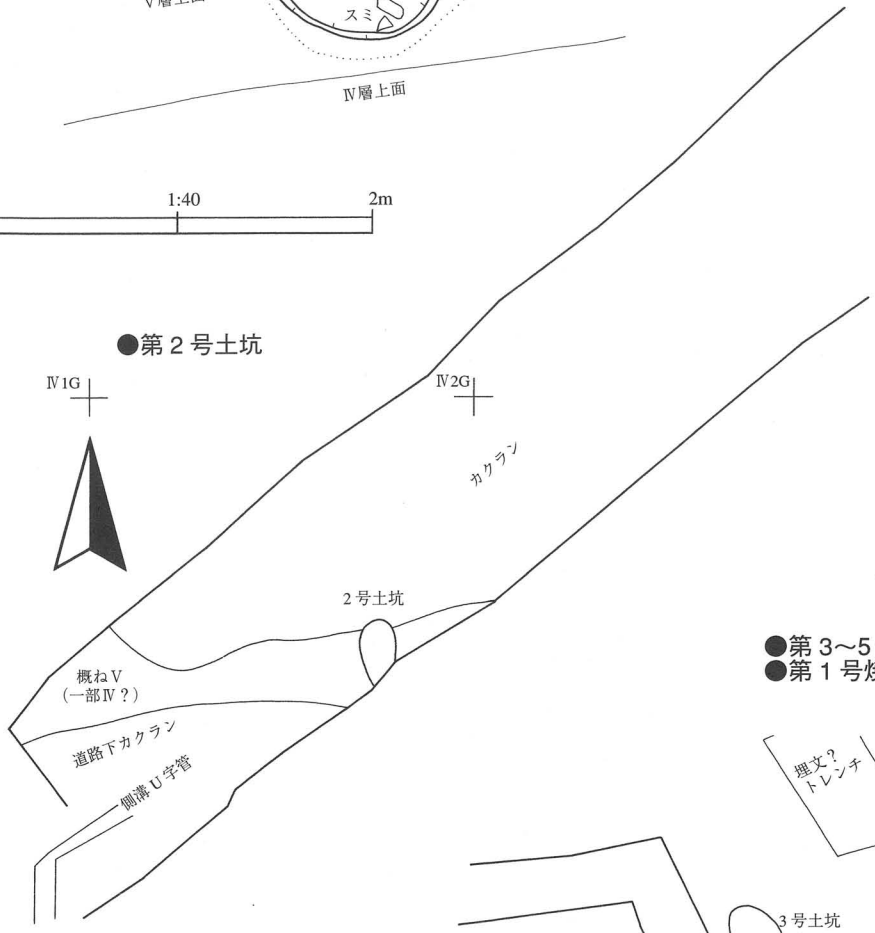
第９図　第２号住居跡

●第１号土坑

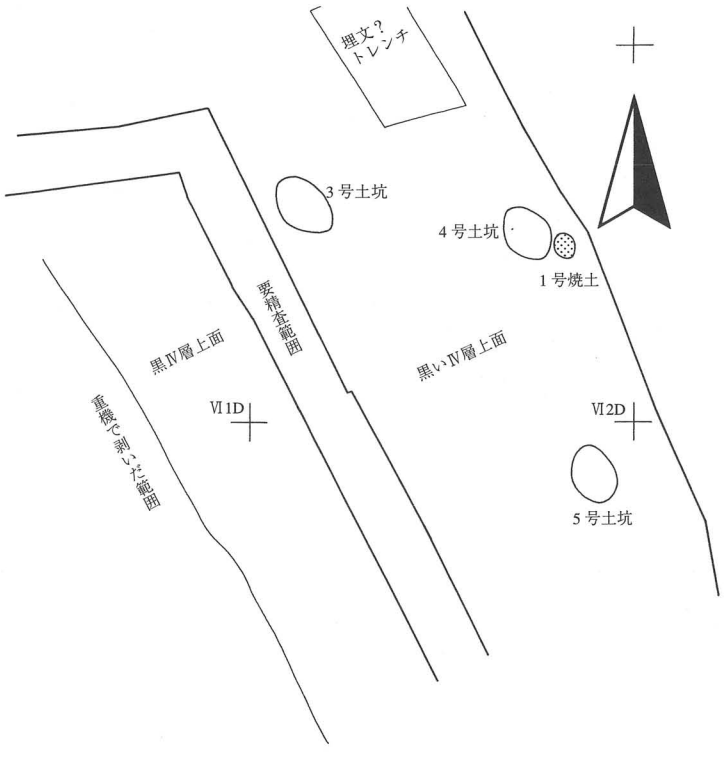


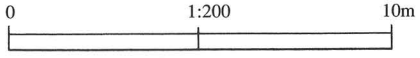
1：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層起源の砂多く含む。
2：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。Ⅶ層？ブロック、炭化物僅かに含む。
3：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。ややもろい。締まり以外は２層とほとんど同じ。
4：10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。２、３層にやや似るが、拳大のブロックの集合体。２㎝大のⅦ層？ブロック、炭化物含む。

●第２号土坑

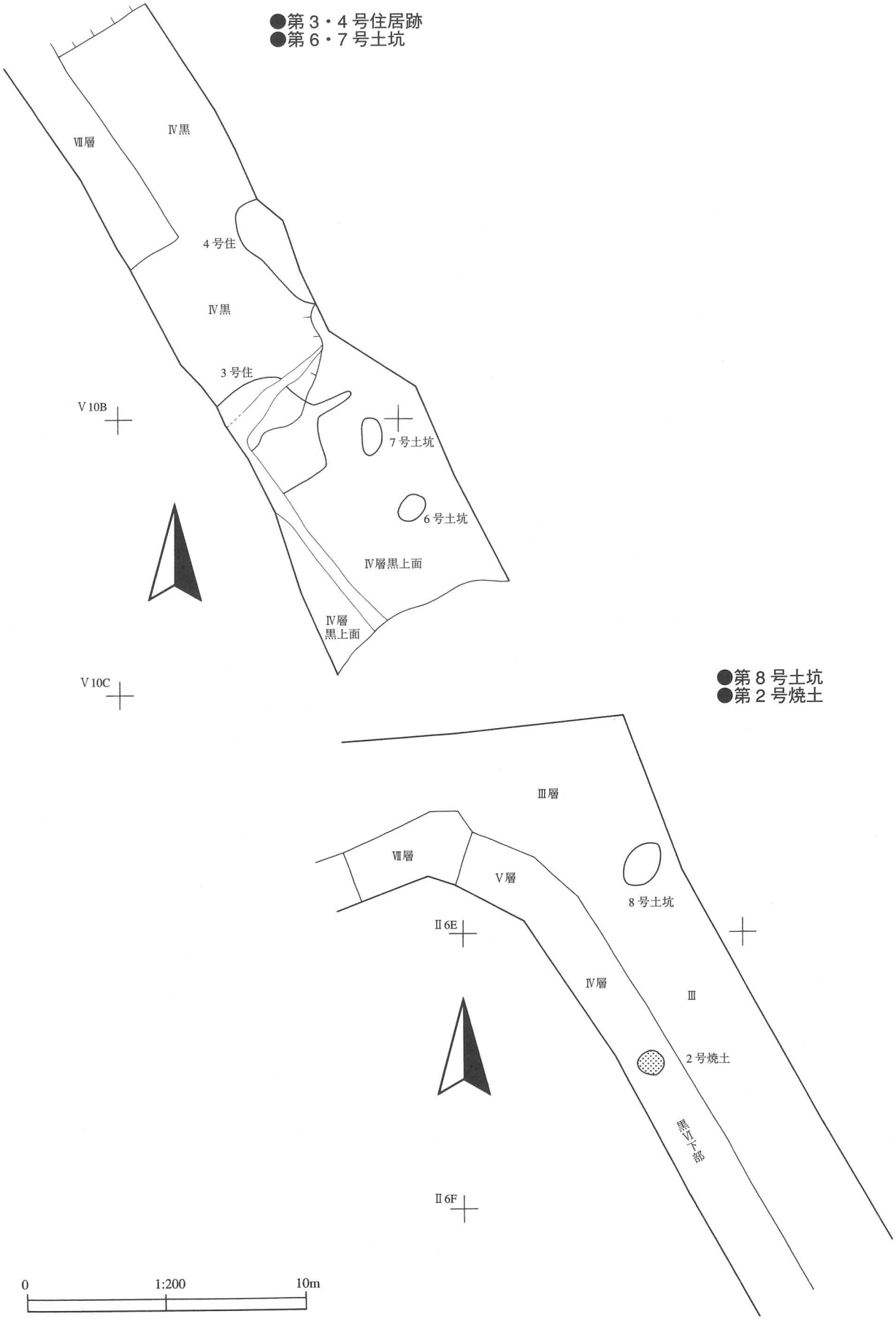


●第３～５号土坑
●第１号焼土

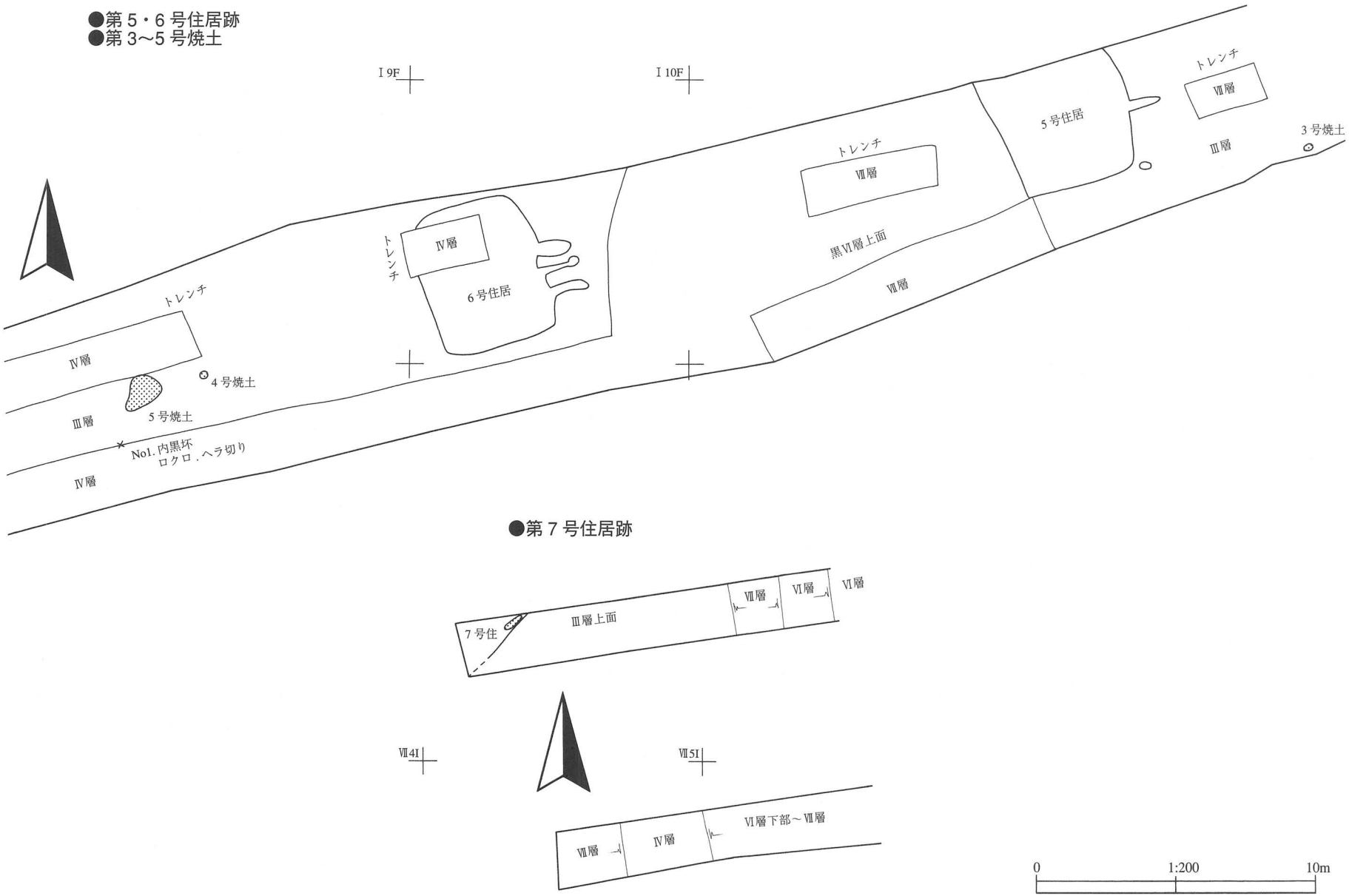




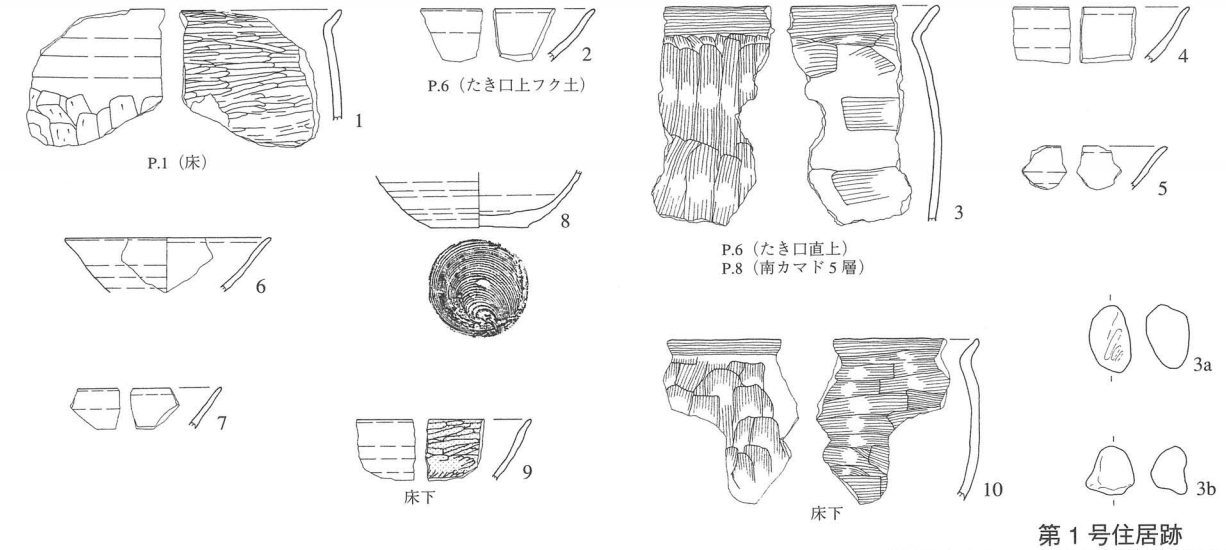
第10図　第１～５号土坑、第１号焼土

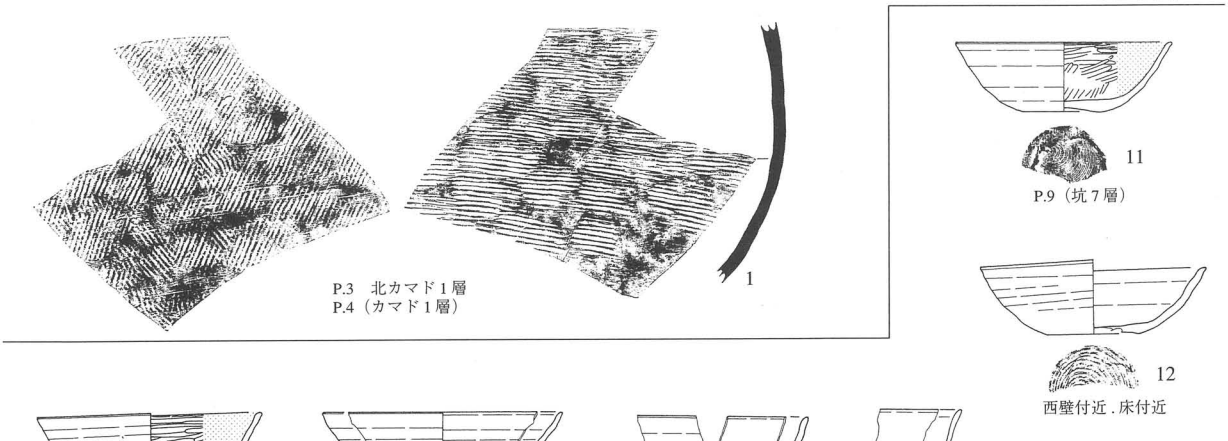


第 11 図　第３・４号住居跡、第６～８号土坑、第２号焼土

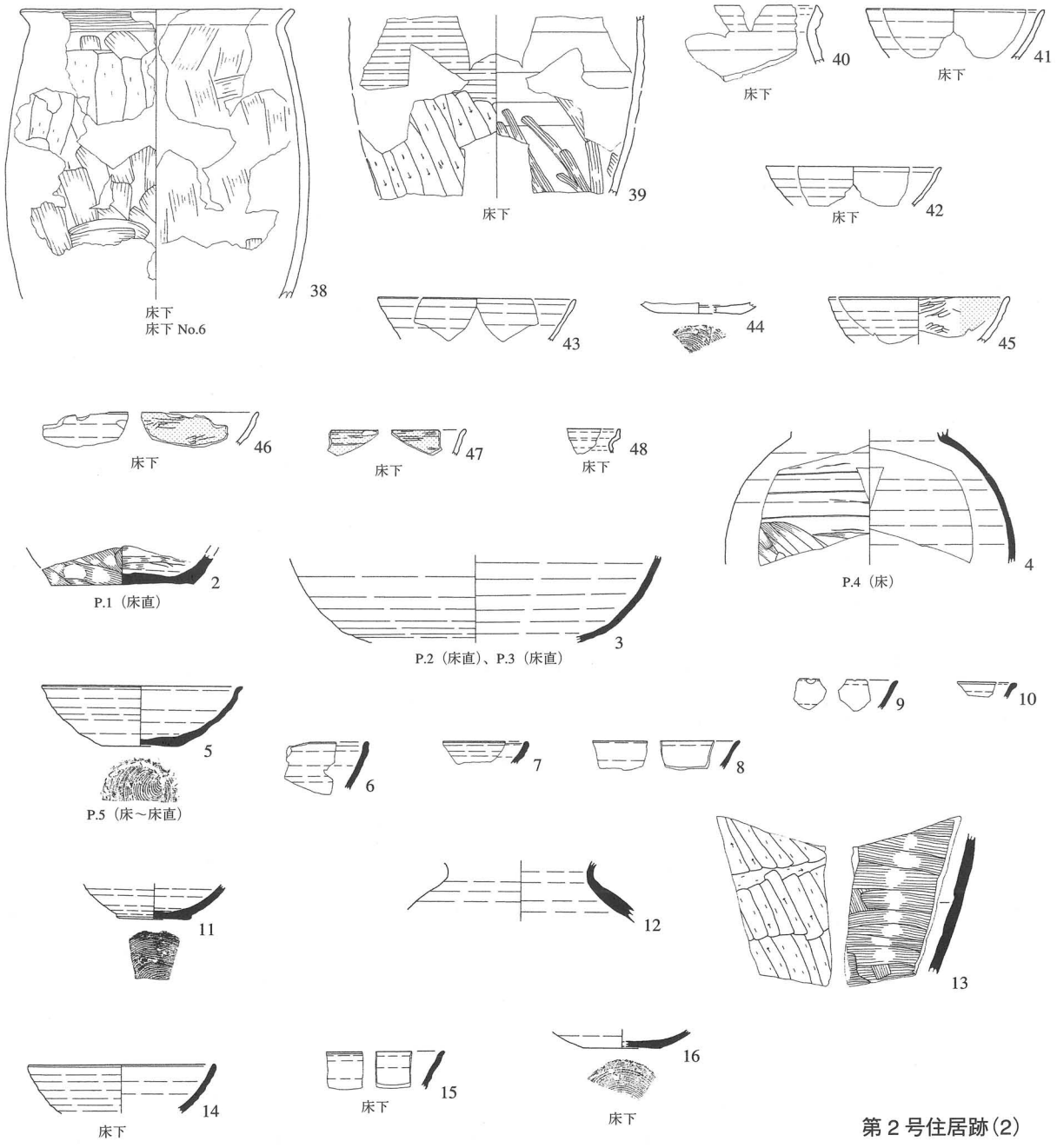


第12図　第５～７号住居跡、第３～５号焼土





第 13 図　第１号住居跡、第２号住居跡(1) 出土遺物（1/5）



第１号土坑

第 14 図　第２号住居跡(2)、第１号土坑出土遺物（1/5）

＜焼土の特徴＞狭い範囲ながら面的に焼けている。
＜出土遺物＞周囲から、土師器、須恵器の破片が比較的多く出土した。
＜時期・所見＞検出面と周囲の出土遺物から、平安時代の可能性がある。竪穴住居跡の煙出の可能性もあるかも知れない。

第4号焼土（第12図、写真図版8）
＜位置・検出状況＞調査区北端中央西寄り。Ⅱ9Hグリッド。すぐ西側に第5号焼土が検出されている。水田側、表土20㎝＋Ⅲ層30㎝、北側地表下70㎝の、Ⅲ層中に検出。重機で剥いだ時点で検出か。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞不明。
＜平面形・規模＞直径30㎝程度の円形。
＜焼土の特徴＞Ⅲ層が焼けているが、あまり良く焼けておらず柔らかい。
＜出土遺物＞周囲からの土器の出土は比較的少ないが、約4m南西から完形に近い坏が出土している（第12図№1、第20図49・50）。
＜時期・所見＞検出面と周囲の出土遺物から、平安時代の可能性があり、№1土器の存在から、近くに竪穴住居跡があって、その煙出の可能性もあるかも知れない。しかし、すぐ北側で開けたトレンチにも住居の存在は窺われず、さらには、焼土の周囲に撹乱が認められ、中からビニールが出土していることから、ずっと新しいものの可能性も残す（ゴミ焼き跡？）。

第5号焼土（第12図、写真図版8）
＜位置・検出状況＞調査区北端中央西寄り。Ⅰ8～9Hグリッドで、すぐ東側に第4号焼土が検出されている。水田側、表土20㎝＋Ⅲ層20㎝、北側地表下70㎝の、Ⅲ層中に検出。重機で剥いだ時点で確認したと思われるが、ジョレンで検出しようとした際、土が硬くてなかなかきれいにならなかった。
＜重複＞ないと思われる。
＜検出面覆土＞不明。
＜平面形・規模＞1.5×1.2m程度の不整三角形。
＜焼土の特徴＞Ⅱ層に似た土が焼けているようだが、きれいに検出できなかったのではっきりしない。一応面的に焼けているようだが、ブロック状の部分もある。
＜出土遺物＞周囲からの土器の出土はほとんどないが、約1m南西から完形に近い坏が出土している（第12図№1、第20図49・50）。
＜時期・所見＞形成面と№1土器の存在から、竪穴住居跡の覆土の可能性もある。しかし、すぐ北側で開けたトレンチにも住居の存在は窺われず、さらには、焼土の周囲に撹乱が認められ、中からビニールが出土していることから、逆にずっと新しいものの可能性も残す（ゴミ焼き跡？）。

4　遺　　物（第15～25図、写真図版14～19）

土器は、20,464.22ｇ出土し、縄文・弥生土器、土師器・須恵器が42×32×30㎝のコンテナでそれぞれ1箱弱、比較的古そうな陶器片が1点、土製品は3点（土偶、土錘？、焼粘土塊）、石器類は20点（石器製作時の剥片17点）、鉄製品4点（鉄鏃2）、その他小さなアスファルト塊が1点出土した。
遺物の記載は図･写真図版と表で行い、本文中にはその補足と概要のみ記したので、ここで、図版、

写真図版、表を見る際の留意事項について述べておく。

本章では遺構出土の遺物も含めるが、それぞれ、その種類の遺物の中で最初に並べている。遺構出土の遺物は、遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第13・14図）。個々の遺物（遺構内）の出土状況は本章第2、3節を参照していただきたい。掲載順序は、原則として、遺構→遺構外、遺構外出土の遺物は、遺構出土遺物の後に出土位置の順（はっきりしているもの→はっきりしないもの、はっきりしているものはグリッド順としているが、若干混乱がある）に並べている。あ～き区（第5図に位置）、グリッドの①～④等の出土位置の詳細については本章冒頭部分を参照していただきたい。外面、内面の観察事項の欄の「→」は施文順序を表す。矢印の左が前で、右が後となる。なお、遺物の取り上げ方針については、本章の第1節参照。

(1) 縄文・弥生土器（第15～17図、写真図版14）

42×32×30cmのコンテナ1箱弱出土した。全ての出土時期および全ての出土地点を基本的に網羅しようと選び、それに比較的残りの良い物も加えたので、通常より掲載率は高いと思われる。

大部分が、縄文時代後期前葉前半（宮戸Ⅰb式。本間　1990）、晩期中～後葉（山内　1930、山内ほか　1971）のどちらかの時期に当てはまるが、23は、縄文時代中期後～末（大木9～10式古）、5・31は、晩期前葉（大洞BC2式）、26は弥生時代中期であろう。

後期前葉前半に相当すると思われるのは、1？・3・6・7～12・16・17？・18？・21・22・25？？（中期？）・28？？・39＝40＝41・45？・46？で、晩期中～後葉のうち、大洞C2式と思われるのは、13・14・19・20・24・30・44？・48、大洞A1式と思われるのは、2・4・15・33・34・35＝36＝37＝38・43で、どちらに帰属するか分からないのは、27・29・47。32と42も、このあたりと思われるが断定できない。32は縄文時代後期末～弥生時代、42は晩期？の可能性がある。

本遺跡の土器は、いずれも胎土に白砂が目立つ。川縁の粘土を使用したことが示唆され、この付近で作っていたのであろうか。本遺跡の後期土器の地文は、縄文、撚糸文とも、原体を土器に向かって縦（上下）方向に転がしているものが多いのに対し、晩期は横方向に主として転がしているようである。後期の縄文原体は、1段がR、2段がLRが多かった。分布に特に偏りは認められず、幾つかまとまりは認められるが基本的に調査区全体から散在して出土した。後期前葉前半の土器は遺構のそばなどに比較的偏って出土することが多いが、晩期中～後葉は特に散在する傾向が強いようである。

以下、表の補足。6には、同一地点から出土した同一個体で接合しない破片が三つあり、3.7×3cmの頸～胴部片、2.5×2.5cmの胴部片、4×1.8cmの底部片である。文様意匠は、波状と釣針状の二つのようだが、釣針の方は途中がはっきりしない。これは、摩耗しているためだけでなく、整形が雑なためでもある（粘土まくれ痕あり）。33は、粘土が乾いてから胴部に縄文を転がしたようで、ほとんど圧痕されていない。

参考文献

本間　宏　1990「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『第4回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会（群馬県）

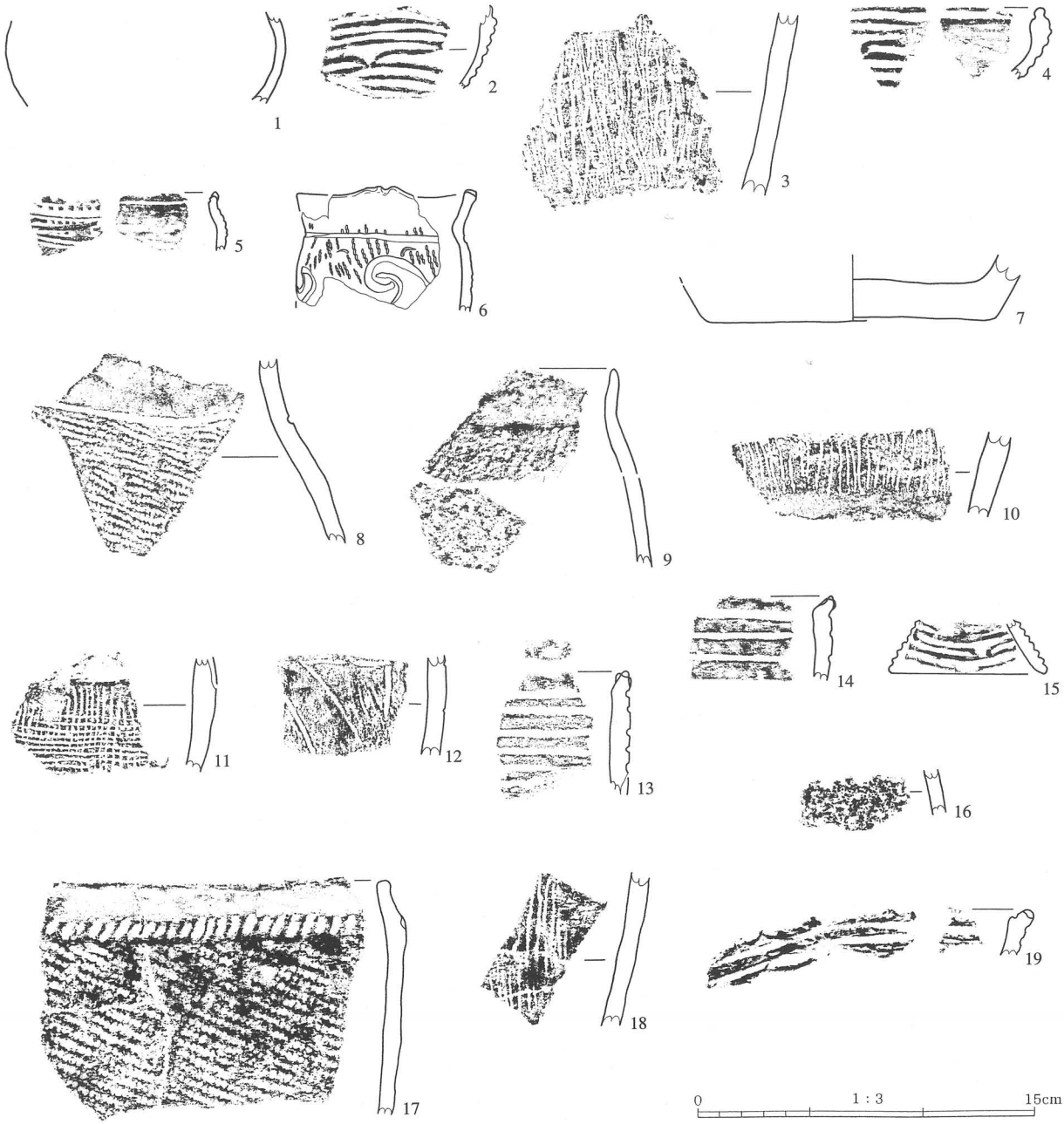
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号

1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

山内清男ほか　1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号　北奥古代文化研究会

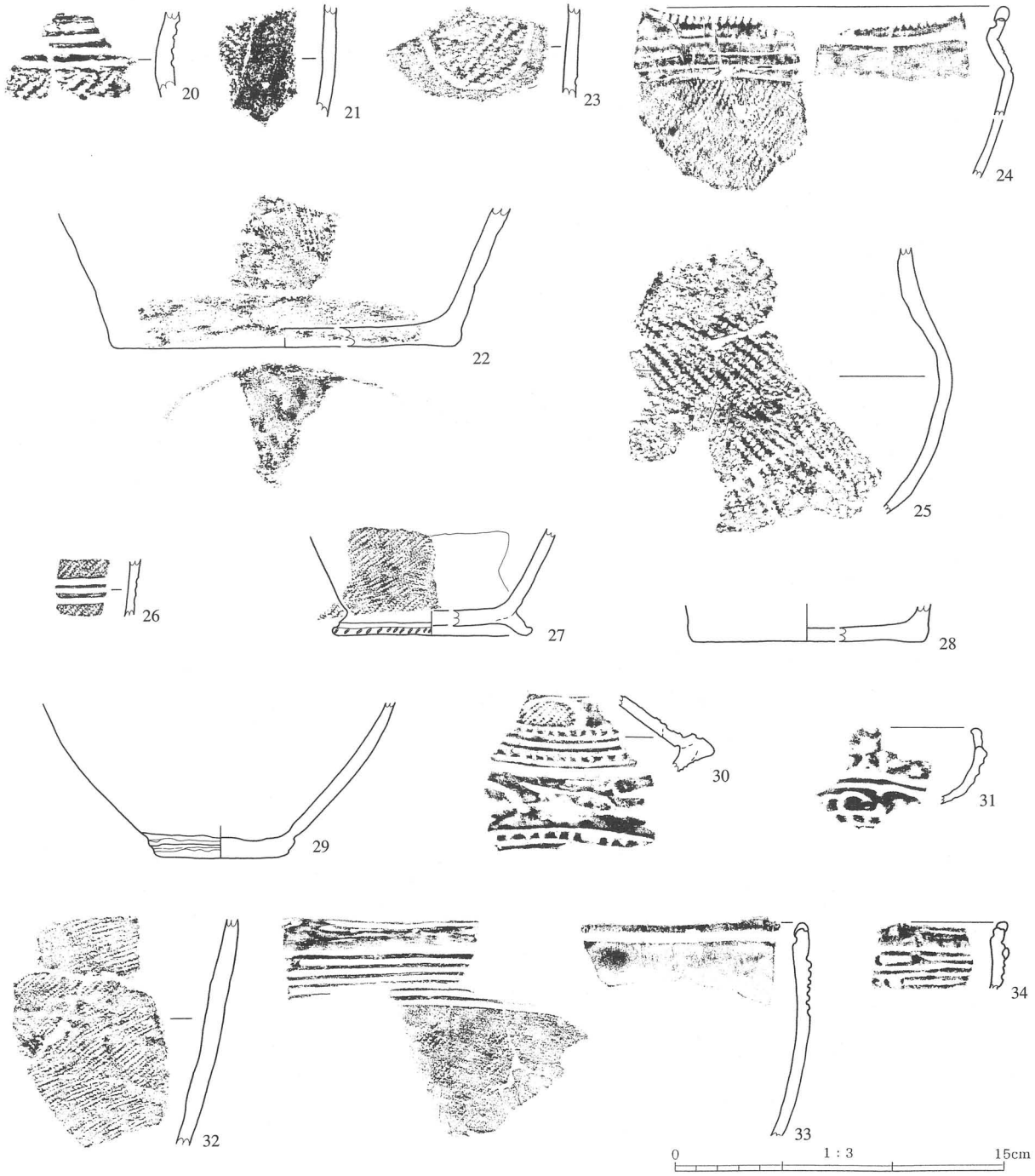
(2) 土師器・須恵器・陶磁器（第17～24図、写真図版15～17）

土師器・須恵器は、42×32×30cmのコンテナ1箱弱出土。整理時に比較的余裕があり、器形を復元



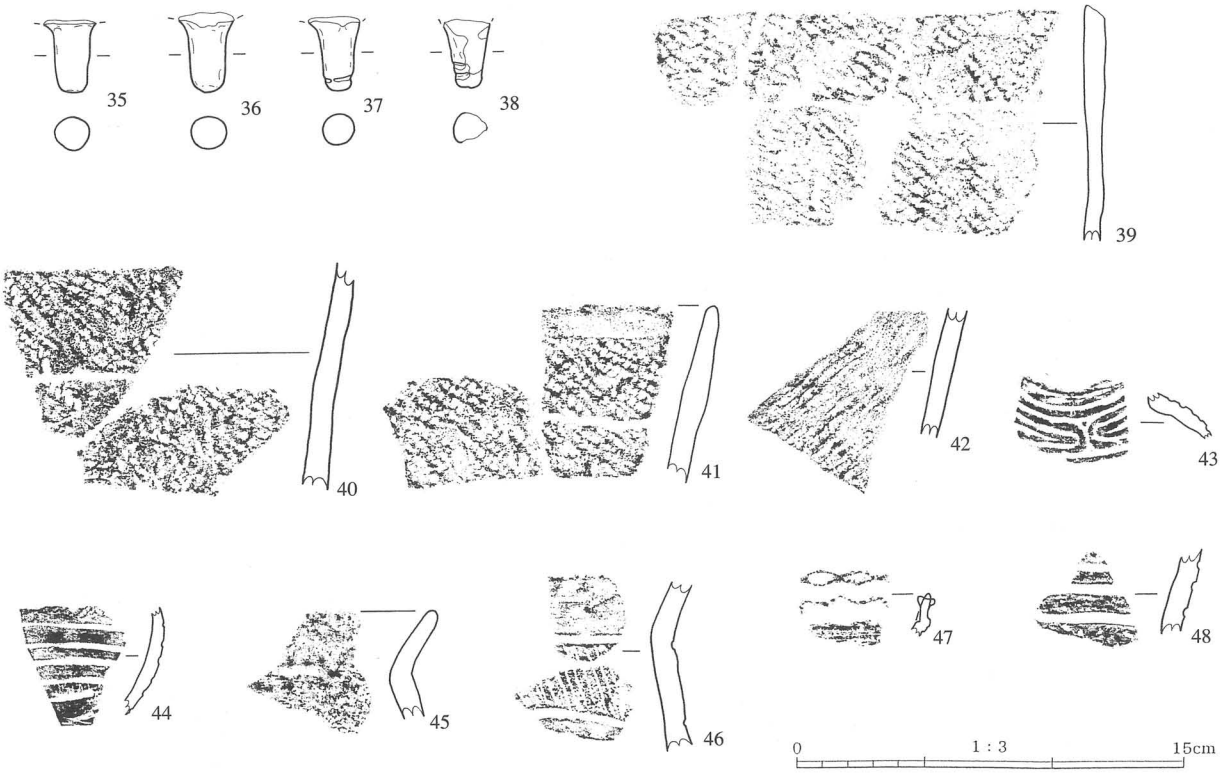
No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部／底面、縄文原体など）	内面 （調整など）	備考	本文記載
1	第１号土坑・３層	壺・胴部（1/4 周弱）	ミガキ？	指なで	外面やや摩耗	
2	Ⅰ８Ｊ・Ⅱ層（黒色土中）	壺か注口・胴	ミガキ？	指なで？	外面やや摩耗	
3	Ⅰ８Ｊ・Ⅳ層上面	深鉢・胴部	ゆるい？単軸絡条体６類（R）タテ	指なで？	外面やや摩耗	
4	Ⅱ４Ｆ～Ⅱ６Ｅ・Ⅲ層中心	浅鉢？・口縁部		ミガキ？・水平沈線１	外面やや摩耗・外沈線底赤色付着？	
5	Ⅱ４Ｆ～Ⅱ６Ｅ・Ⅲ層中心	鉢類・口縁部	口唇Ｂ突起・斜縄文？	ミガキ？・水平沈線１	外やや摩耗	
6	Ⅱ８Ｇ④～Ⅱ９Ⅰ①・Ⅳ層上面	鉢 1/2 周弱	口唇突起（頂部刻目２）・突起下胴部文様・文様意匠２？・単軸絡１(?)タテ	ナデ	外面摩耗	p.38
7	Ⅱ８Ｇ④～Ⅱ９Ⅰ①・Ⅳ層上面	深鉢・底部一周	丁寧なナデ　（上の割口、粘土接合面からの剥離）	ナデ	外面やや摩耗	
8	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・撹乱中心	深鉢・頸部	LR タテ→太く深い沈線→丁寧なナデ	丁寧なナデ		
9	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・撹乱中心	深鉢・口～胴部	突起・RL ？タテ→丁寧な？ナデ	丁寧なナデ	外面火により赤く摩耗劣化	
10	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・撹乱中心	深鉢・胴下部	単軸絡１（R）タテ→ナデ	ナデ		
11	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・撹乱中心	深鉢・胴部	単軸絡１（R）タテ→ヨコ	ナデ		
12	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・撹乱中心	深鉢・肩部	撚糸文？→太く浅い沈線→ナデ	ナデ雑		
13	Ⅳ６Ｆ付近重機で剥いだ場所	深鉢・口縁部	口唇押圧による波状・太く深い沈線→丁寧なナデ	ナデ雑		
14	Ⅳ８Ｅ住居？（Ⅱ層）	深鉢・口縁部	口唇押圧列・太く浅い沈線・粘土まくれ痕	ただれ		
15	Ⅳ１０Ｅ～Ｆ・Ⅲ層	台付浅鉢・台	交叉部深い刺突、小さな粘土粒貼付	ミガキ？		
16	Ⅴ３Ｅ・Ⅲ層	深鉢・胴部	網目状撚糸文	ナデ	外面摩耗ひどい	
17	Ⅶ５Ｊ・Ⅲ層	深鉢・口～胴部	頸隆帯→ LR タテ→頸刻目列→口縁丁寧なナデ	ナデ？	外面やや摩耗、内面摩耗ひび割れ	
18	Ⅶ５Ⅰ～６Ⅰ・Ⅲ層	深鉢・胴部	単軸絡１（R）タテ	ナデ雑	外摩耗、黒斑	
19	Ⅶ６Ⅰ・Ⅲ層中心	深鉢・口縁部	口唇～内面水平沈線・口縁押圧列・太く浅い沈線・粘土まくれ痕多	ナデ		

第 15 図　縄文・弥生土器(1)

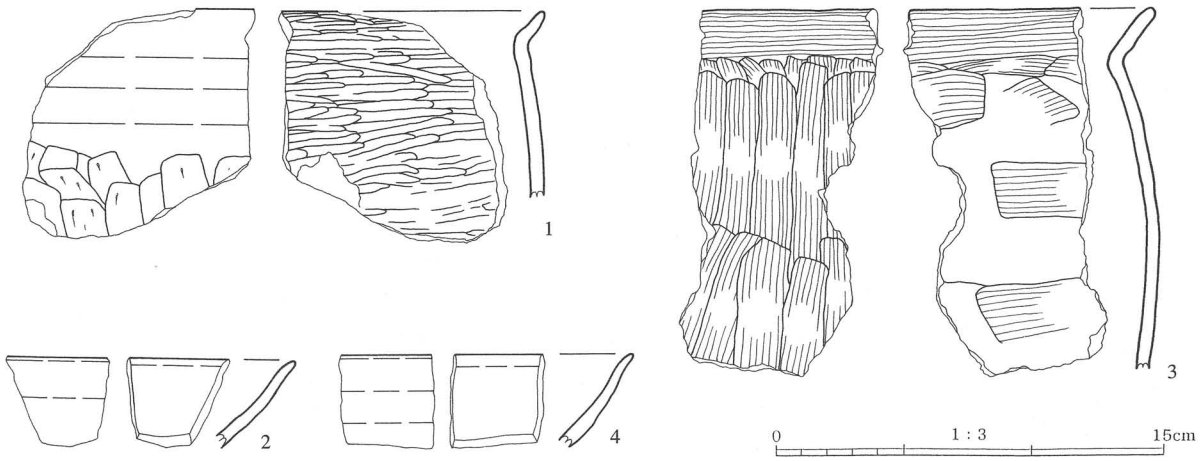


No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部／底面、縄文原体など）	内面 （調整など）	備考	本文記載
20	Ⅶ６Ⅰ・Ⅲ層中心	深鉢・頸～肩部	LR ヨコ→太く深めの沈線・粘土まくれ痕	ナデ丁寧		
21	Ⅶ６Ⅰ・Ⅲ層中心	深鉢・胴部	LR タテ→太めの浅い沈線→丁寧なナデ？	摩耗		
22	Ⅶ６Ⅰ・Ⅲ層中心	深鉢・底部 1/3 周	単軸絡１（R）タテ→底部付近ナデ／底面笹状網代？→ナデ	ナデ	外赤く二次焼成全面・内底ただれ	
23	Ⅸ６Ｇ・Ⅳ層上面	深鉢・胴部	RL タテ？→太く浅い沈線→丁寧なナデ	ナデ丁寧	外スス付着	
24	Ⅸ７Ｂ②付近	浅鉢・口～胴部	口唇突起、刻目列・LR ヨコ、細く浅めの沈線→丁寧なナデ	ナデ・口水平沈線１	内外やや摩耗	
25	Ⅸ９Ｇ・Ⅲ層上位	壺・胴部	RL ヨコ、ナナメ→頸部ナデ	ナデ雑	外肩黒斑	
26	Ⅸ９Ｇ・Ⅲ層上位	鉢類？・胴部	LR ヨコ→太めの浅い沈線→ミガキ	ミガキ	外全面スス付着	
27	Ⅸ９Ｇ・Ⅲ層上位	台付鉢 1/3 周以下	LR ヨコ、ナナメ・太く浅めの沈線・ミガキ	ミガキ	外接地部摩耗	
28	ＸⅠ１０Ｊ・Ⅲ層中心	深鉢・底部 1/4 周	摩耗ひどい	ナデ？		
29	ＸⅠ１０Ｊ・Ⅲ層中心	壺・底のみ一周	底部付近太く浅い痕跡的な水平沈線・ミガキ	ナデ（底は雑）	外黒斑、接地部摩耗	
30	ＸⅠ１０Ｊ・Ⅲ層中心	注口・肩部	LR ヨコ・細く深い沈線・肩部“つ”字状印刻・ミガキ？	ナデ丁寧	外面やや摩耗	
31	ＸⅠ１０Ｊ・Ⅲ層中心	注口・口縁部	突起に印刻・太く浅めの沈線・ミガキ	ミガキ	内外やや摩耗	
32	ＸⅠ１０Ｊ・Ⅲ層中心	深鉢・胴部	LR ヨコ、ナナメ	ナデ整形痕		
33	ＸⅡ３～４Ⅰ・Ⅲ層中心	浅鉢・口～胴部	突起挟んで口唇沈線・深めの沈線途中に粘土粒・LR ヨコ・ミガキ	ミガキ・口水平沈線	外、口と肩に黒斑・内面沈線太く深い	p.38
34	ＸⅡ３～４Ⅰ・Ⅲ層中心	浅鉢？・口縁部	口唇Ｂ突起挟んで沈線・交叉部掘り去り、粘土粒貼付・ミガキ？	ミガキ・口水平沈線	内外やや摩耗・内面沈線細く深め	

第 16 図　縄文・弥生土器(2)

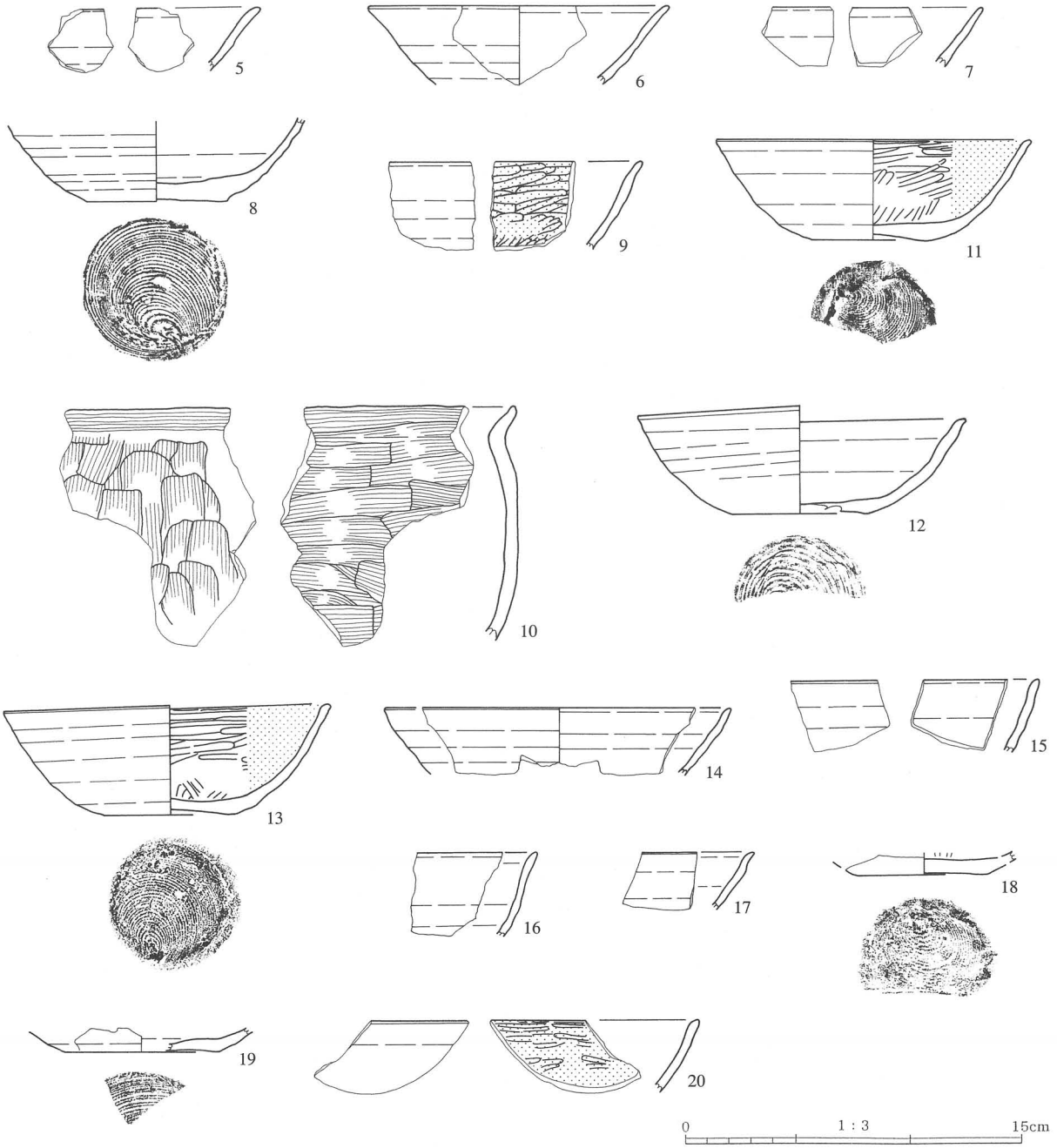


No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部 / 底面、縄文原体など）	内面 （調整など）	備考	本文記載
35	Ⅹ Ⅱ 3 ～ 4 Ⅰ・Ⅲ層中心	脚	（粘土接合面から剥離）	—	35 ～ 38 同一個体？・やや摩耗	
36	Ⅹ Ⅱ 3 ～ 4 Ⅰ・Ⅲ層中心	脚	（粘土接合面から剥離）	—	35 ～ 38 同一個体？・やや摩耗	
37	Ⅹ Ⅱ 3 ～ 4 Ⅰ・Ⅲ層中心	脚	下、一周しない沈線　（粘土接合面から剥離）	—	35 ～ 38 同一個体？・やや摩耗	
38	Ⅹ Ⅱ 3 ～ 4 Ⅰ・Ⅲ層中心	脚	下、沈線？ 2 条？（上の割れ口、粘土接合面から剥離、所々剥落）	—	35 ～ 38 同一個体？・摩耗	
39	Ⅹ Ⅲ 5 H中心	深鉢・胴部	LR タテ、ナナメ　（40、41 と同一個体）	ナデ	上下割口、接合面から剥離・内コゲ	
40	Ⅹ Ⅲ 5 H中心	深鉢・底近く	〃（二次焼成で赤い）	ナデ	〃・〃・39、41 と同一個体	
41	Ⅹ Ⅲ 5 H中心	深鉢・口縁部	LR タテ→口縁ナデ　（39、40 と同一個体）	ナデ	下の割口、接合面から剥離	
42	え南区試掘	深鉢・胴部	LR ヨコ	ナデ	上の割口、接合面から剥離・外摩耗	
43	お区南試掘	壺か注口・肩	細めで深い沈線	頭ミガキ、下指なで	内外やや摩耗	
44	き区試掘	壺？・胴部	LR ヨコ？・浅い沈線・ミガキ	指なで	外黒斑、やや摩耗	
45	東肩三角地・Ⅰ層	深鉢？・口縁部	LR タテ？	ナデ？	外摩耗、内肩ただれ	
46	東肩三角地Ⅰ層	深鉢？・肩部	単軸絡 1（R）タテ→太く深めの沈線→ナデ	ナデ	外やや摩耗	
47	北西部分試掘トレンチ	深鉢・口縁部	口唇強い押圧列・ナデ	剥落		
48	北西角部分試掘トレンチ	深鉢・頸部	太く深い沈線→ナデ・粘土まくれ痕	ナデ雑		



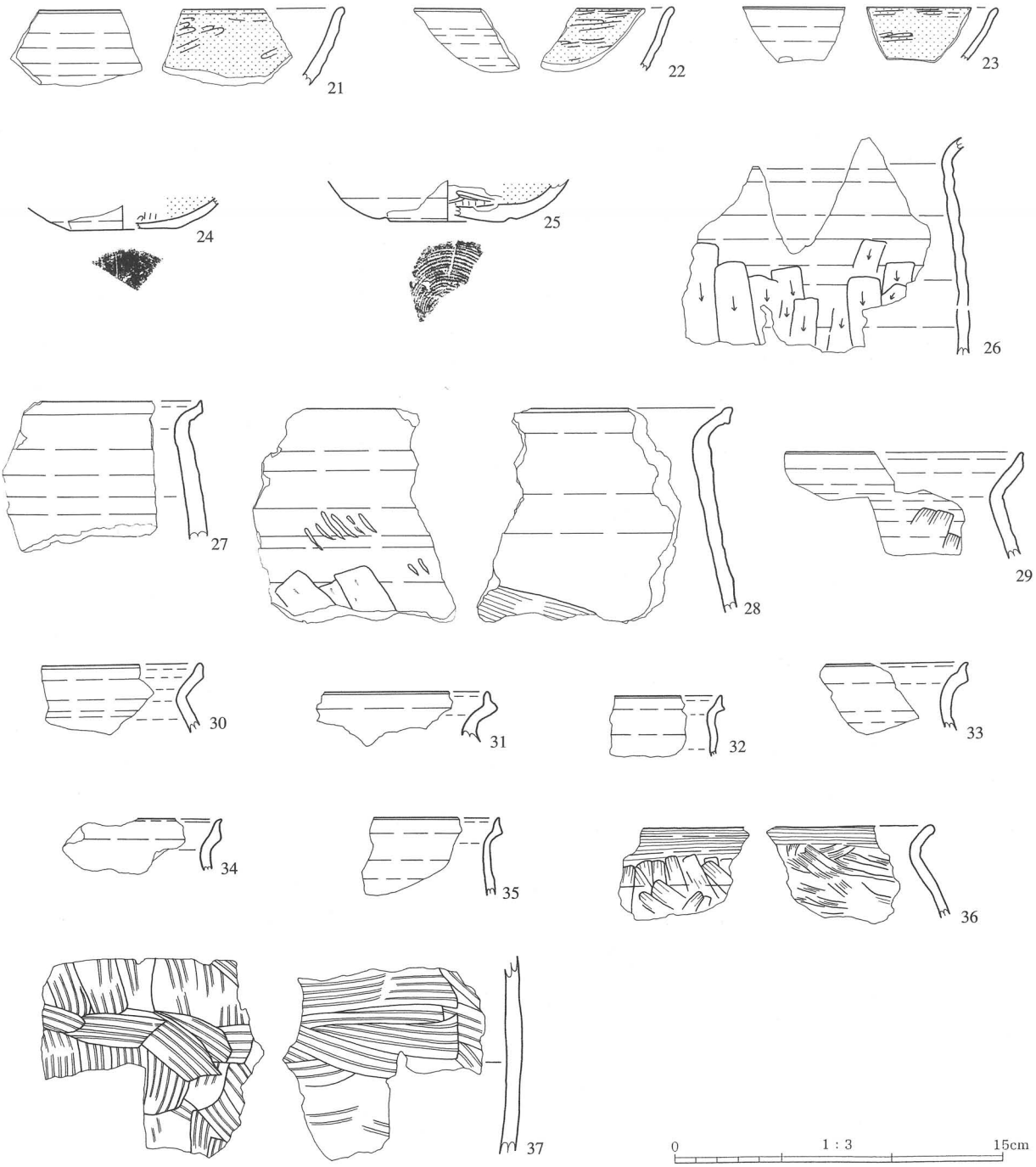
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	内面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
1	第 1 号住居 p. 1（床）	甕	1/5 周	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒い光沢（黒色処理？）	
2	第 1 号住居 p. 6（焚口上覆土）	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
3	第 1 号住居 p. 6（焚口直上）、p. 8（南カマド 5 層）	甕	破片	ナデ（指？）	ナデ	外面二次焼成で赤い・3/5 が p. 8	p.48
4	第 1 号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土小石混入	

第 17 図　縄文・弥生土器(3)・土師器(1)



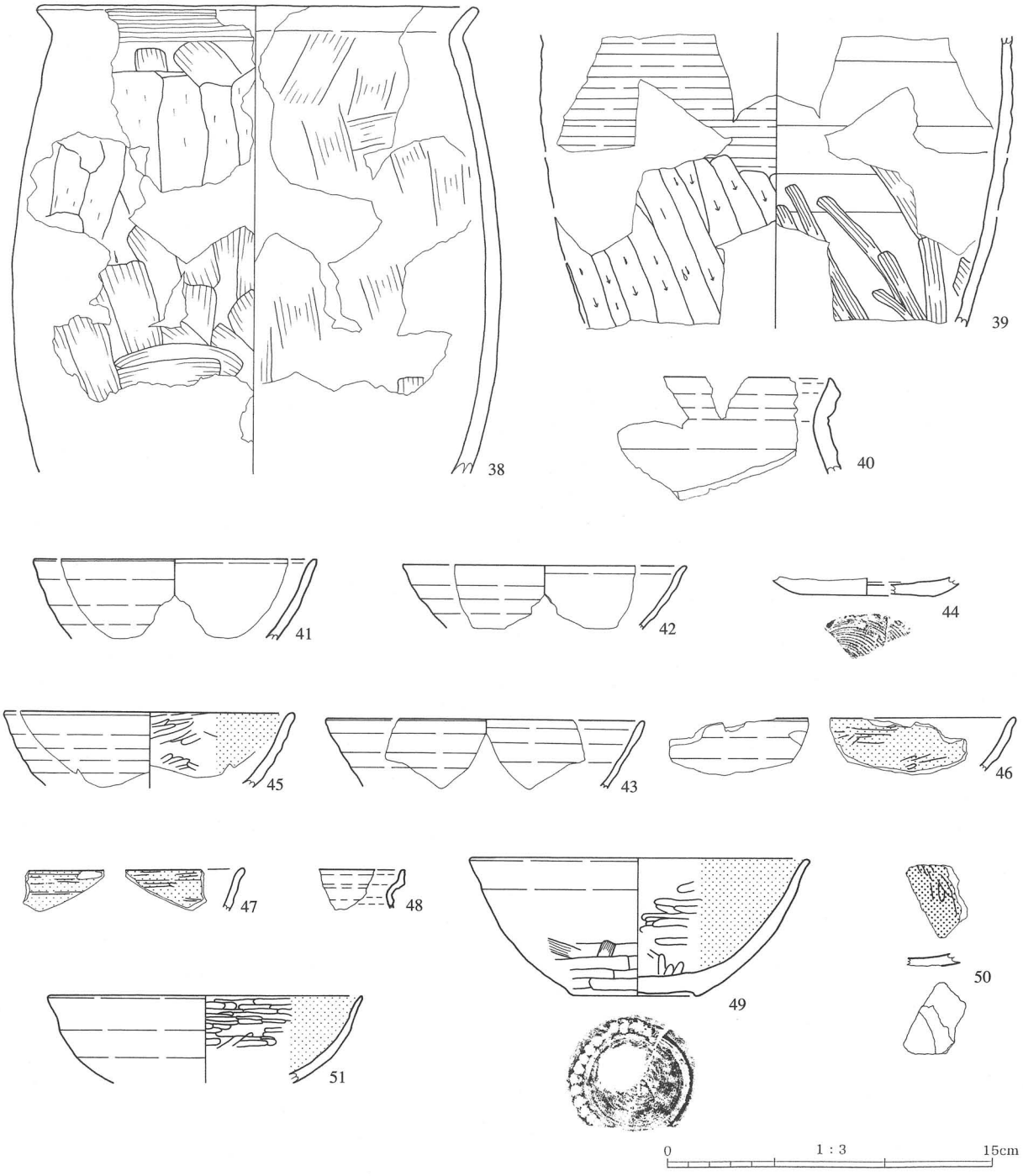
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部 / 胴部 / 底部）	内面（口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
5	第１号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵系土器？	
6	第１号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵系土器？・胎土小石混入	
7	第１号住居	坏	破片	ロクロナデ？	ロクロナデ	内外摩耗	
8	第１号住居	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	須恵系土器？・外面一部糸切り状痕	
9	第１号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理	
10	第１号住居床下	甕	1/5 周以下	口：ヨコナデ？→胴：ナデ（指？）	口：ヨコナデ？→胴：ヘラナデ	胎土砂目立つ	
11	第２号住、第２号住 p. 9（坑７層）（出土割合２：３）	坏	1/2 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外底面黒斑	
12	第２号住、第２号住西壁付近床付近（割合ほぼ１：１）	坏	4/5 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切？	ロクロナデ	胎土に小石混入	
13	第２号住、第２号住西壁付近床付近（割合２：３）	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外底面大きく黒斑	
14	第２号住西壁付近、床下（出土割合３：２）	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	一部灰色・須恵系土器	
15	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
16	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外摩耗・須恵系土器？	
17	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ？	内外摩耗	
18	第２号住居	坏・底部	2/3 周	底：回転糸切	ミガキ	外面摩耗ひどい・須恵系土器？	
19	第２号住居	坏・底部	破片	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	内外やや摩耗	
20	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外口縁黒い、下黄白い	

第 18 図　土師器(2)



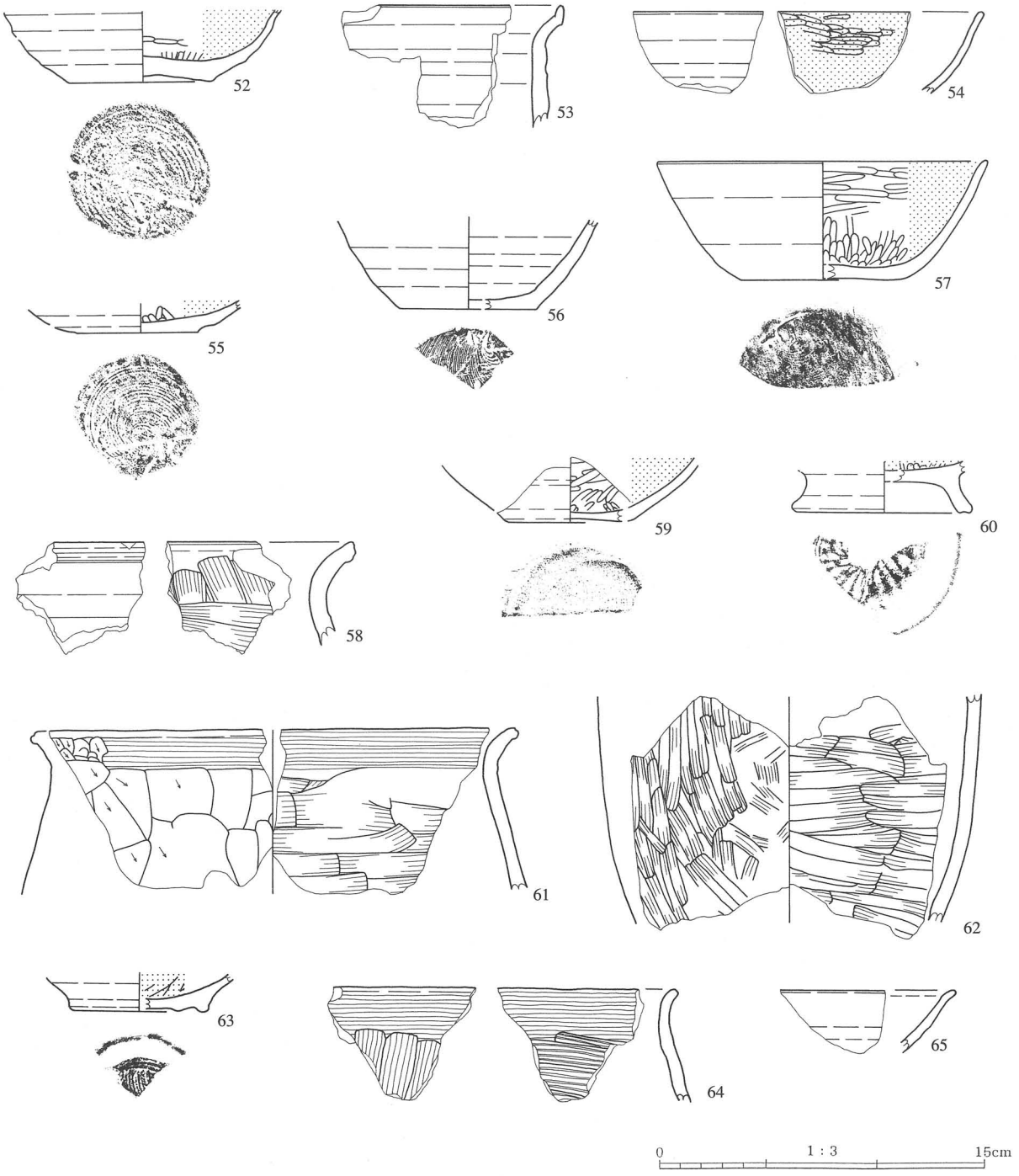
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部 / 胴部 / 底部）	内面（口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
21	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外やや摩耗	p.48
22	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理	
23	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外口縁一部黒い	
24	第２号住居	坏・底部	破片	ロクロナデ／底：ヘラケズリ？	ヘラミガキ	内面黒色処理	
25	第２号住居	坏・底部	破片	ロクロナデ？／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外摩耗、内剥落	
26	第２号住居	甕・頸部	1/5 周	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	小石含む・外下部赤く二次焼成	
27	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外やや摩耗	
28	第２号住居	甕・口縁部	1/5 周	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	内面コゲ？	
29	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ→ヘラナデ？	ロクロナデ	内外摩耗	
30	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外摩耗	
31	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	外摩耗・内面コゲ？	
32	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内面摩耗	
33	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外摩耗	
34	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外摩耗	
35	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ？	内外摩耗ひどい	
36	第２号住居	甕・口縁部	破片	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	内外赤く、二次焼成？	
37	第２号住居	甕・胴部	破片	ハケメ	ハケメ	内面コゲ、摩耗	

第 19 図　土師器(3)



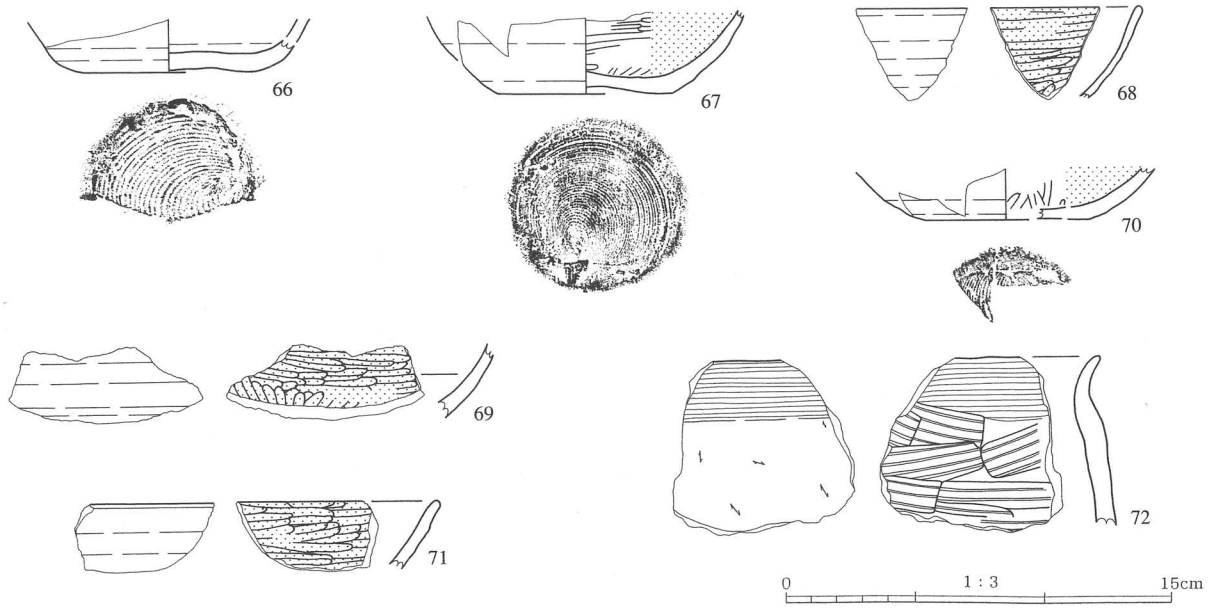
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部 / 胴部 / 底部）	内面（口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
38	第２号住、第２号住床下、第２号住床下 p. 6	甕	1/3 周以下	ケズリ→ナデ、ヨコナデ	ハケメ→ナデ	胎土小石・内外摩耗	p.48
39	第２号住、第２号住床下　（割合１：３）	甕	1/4 周以下	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラナデ	外面一部摩耗	
40	第２号住、第２号住床下　（割合３：２）	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外やや摩耗	
41	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ？（摩耗）	ロクロナデ		
42	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外やや摩耗・須恵系土器？	
43	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ？	内外やや摩耗・須恵系土器？	
44	第２号住居床下	坏・底部	1/5 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外面黒斑	
45	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外やや摩耗	p.48
46	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外口縁黒い、下赤い	
47	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面黒色処理	
48	第２号住居床下	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内面コゲ？	
49	Ｉ８HNo１（Ⅲ層）	高台付？坏	1/3 周以上	ロクロナデ→一部ヘラナデ？	ヘラミガキ	内面黒色処理	p.48
50	Ｉ８HNo１（Ⅲ層）					49 と同一個体、手違いで掲載	
51	Ｉ９Ｇ付近・重機で剥いだ面まで（Ⅱｂ層？）	坏	1/3 周	ロクロナデ？（摩耗ひどい）	ヘラミガキ	内面黒色処理	

第 20 図　土師器(4)

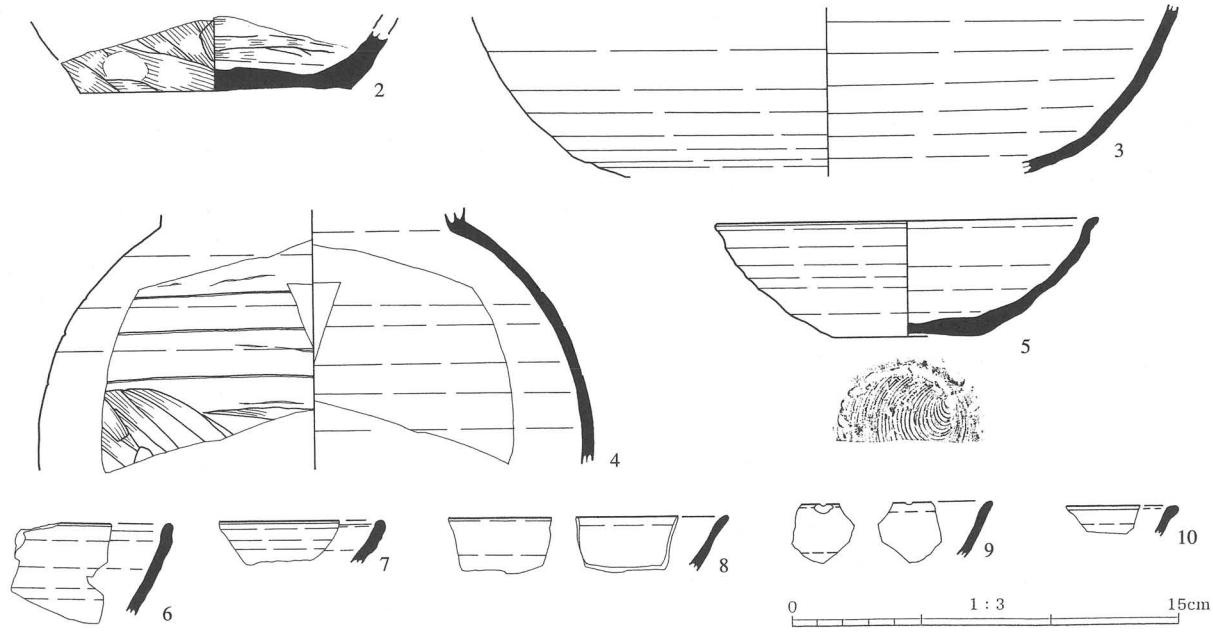


No.	出土地点・層位	器種・部位	残　存 状　況	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	内面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文 記載
52	Ⅰ９Ｇ付近・重機で剥いだ面まで （Ⅱｂ層？）	坏・底部	底のみ一周	摩耗ひどい；底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外コゲ状付着物	
53	Ⅰ９Ｇ付近・重機Ⅱｂ層、 Ⅰ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層上面	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	内外摩耗、外スス付着	p.48
54	Ⅰ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層	坏・口縁部	破片	ロクロナデ（摩耗）	ヘラミガキ	内面黒色処理	
55	Ⅰ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層上面	坏・底部	2/3 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外面摩耗	
56	Ⅰ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層上面	甕？・底部	1/4 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ		
57	Ⅱ２Ｇ①～Ⅱ３Ｆ④・Ⅲ～Ⅳ層上面	坏	1/3 周以下	ロクロナデ？／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外摩耗ひどい（二次焼成？）	
58	Ⅱ４Ｆ～Ⅱ６Ｅ・Ⅲ層中心	甕・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ		
59	Ⅳ１Ｂ～２Ｃ（Ⅵの間違い？）・Ⅳ層上面	坏・底部	1/3 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外面摩耗	
60	Ⅳ１Ｂ～２Ｃ（Ⅵの間違い？）・Ⅳ層上面	台付坏・台	1/3 周以下	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外面やや摩耗	
61	Ⅳ１Ｂ～２Ｃ（Ⅵの間違い？）・Ⅳ層上面	甕・口縁部	1/5 周	ロクロナデ→ヘラケズリ？	ロクロナデ→ヘラナデ	外面ナデに近い・内面やや摩耗	
62	Ⅳ８Ｅ住居？（Ⅱ層）	甕・胴部	1/4 周以下	ヘラナデ	ヘラナデ	内面コゲ？・胎土小石目立つ	
63	Ⅴ５Ｅ～６Ｅ・Ⅲ層上部	坏・底部	1/4 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切？	ヘラミガキ	外面底摩耗	
64	Ⅴ５Ｅ～６Ｅ・Ⅲ層上部	甕・口縁部	破片	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ハケメ	内外やや摩耗	
65	Ⅴ７～８Ｄ・Ⅲ層	坏・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ？（滑らか）		

第 21 図　土師器(5)

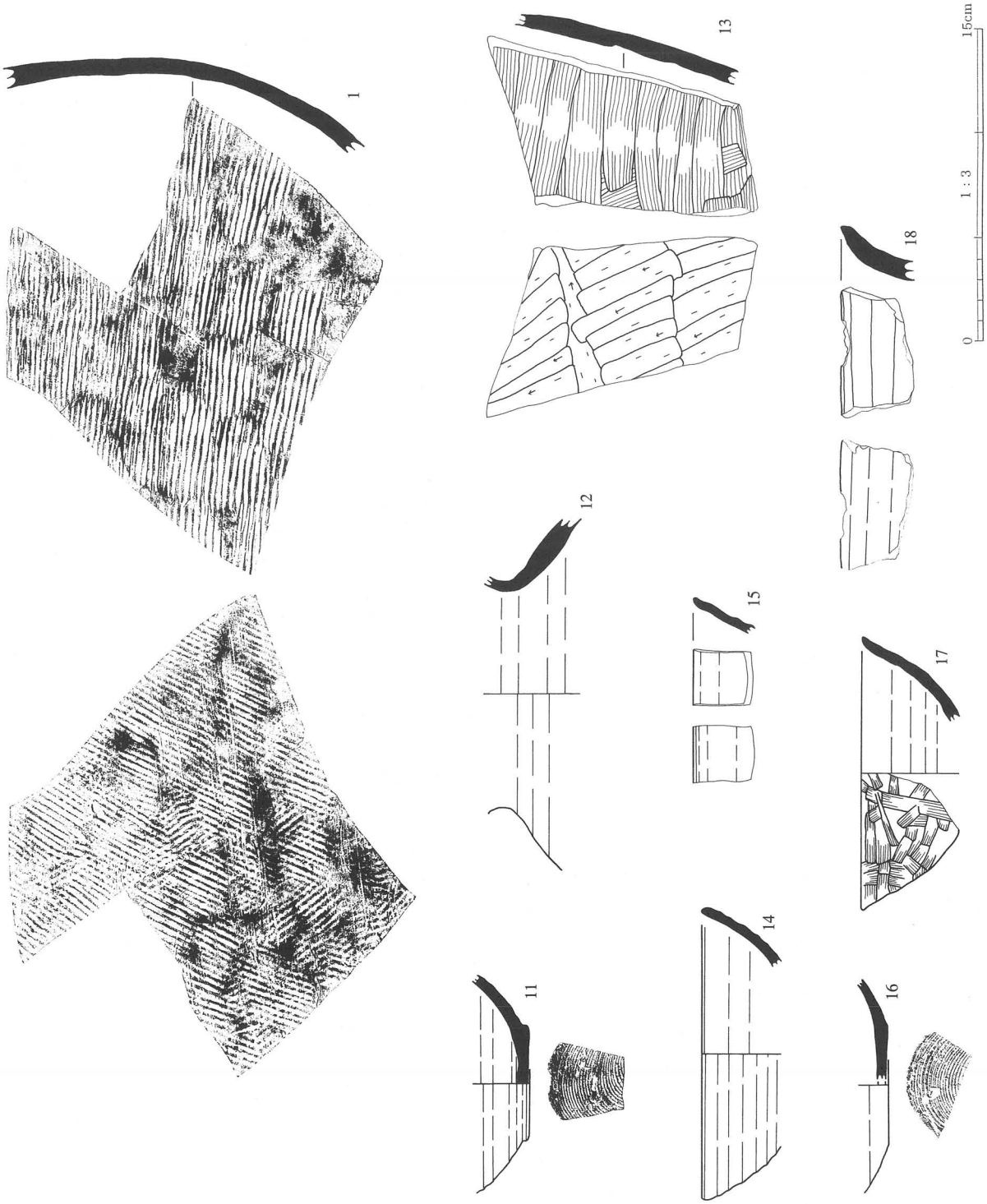


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部 / 胴部 / 底部）	内面（口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
66	ⅩⅡ1Ｊ・炭化物多い層	坏・底部	1/2 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外面底粘土まくれ痕・外二次焼成で灰色	
67	う西区試掘住居？（第６号住付近）	坏・底部	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外底黒斑？	
68	う西区試掘住居？（第６号住付近）	坏・口縁部	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理	
69	う西区試掘住居？（第６号住付近）	坏・胴部	1/5 周以下	ロクロナデ（粘土まくれ痕）	ヘラミガキ	内面黒色処理	
70	う西区試掘住居？（第６号住付近）	坏・底部	1/4 周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外底黒斑？、胴摩耗	
71	け区試掘	坏・口縁部	破片	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理？（ほとんど黒くない）	
72	け区試掘	甕・口縁部	破片	ロクロナデ→ヘラケズリ？	ロクロナデ→ハケメ	ヘラケズリというよりナデ・内外やや摩耗	



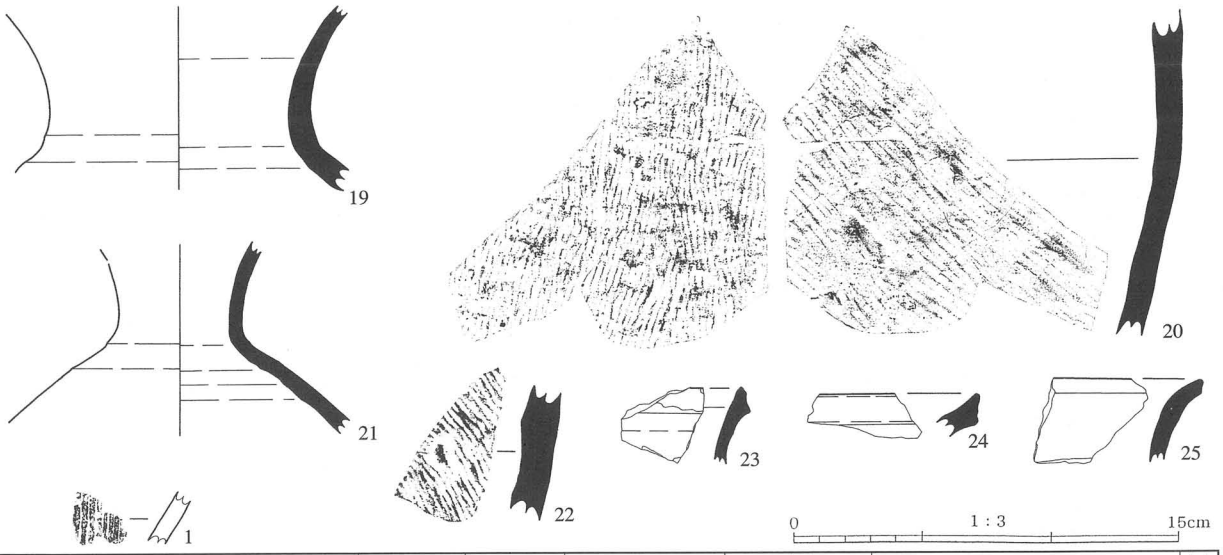
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部 / 胴部 / 底部）	内面（口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文記載
2	第２号住居 p. 1（床直）	壺・底部	底一周	胴：ヘラナデ？／底：ヘラナデ？	ヘラナデ	外胴半周黒い、接地部摩耗	
3	第２号住居 p. 2（床直）、p. 3（床直）（割合２：１）	壺・胴部	1/4 周弱	ロクロナデ→一部ヘラナデ？	ロクロナデ	外面自然釉付着	
4	第２号住、第２号住№４（床）（割合１：２）	壺・肩部	1/4 周以下	ロクロナデ→ヘラナデというよりケズリ？	ロクロナデ		
5	第２号住居 p. 5（床～床直）	坏	底のみ 1/2 周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外側粘土まくれ痕	
6	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	16 と同一個体？	
7	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	薄い	
9	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	第２号住居	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		

第 22 図　土師器(6)・須恵器(1)



No.	出土地点・層位	器種・部位	残　存 状　況	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	内面 （口縁部 / 胴部 / 底部）	備考	本文 記載
1	第１号住 p. 3 （北カマド１層）、 第１号住 p. 4 （北カマド１層）	甕・胴部	1/5 周以下	平行タタキ目	当て具痕 （平行タタキ目状）	出土割合、ほぼ１：１	
11	第２号住居	坏・底部	1/5 周	ロクロナデ／ 底：回転糸切	ロクロナデ	砂混入・粘土まくれ痕・外茶色がかる	
12	第２号住居	壺・肩部	1/5 周	ロクロナデ	ロクロナデ	肩部器壁厚い	
13	第２号住、 Ｖ５Ｅ～６Ｅ（住居あり）（割合１：８）	壺・胴部	破片	ヘラケズリ	ヘラナデ	胎土に黒い粒	
14	第２号住居床下	坏	1/5 周	ロクロナデ	ロクロナデ	外面摩耗・内面付着物？	
15	第２号住居床下	坏	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
16	第２号住居床下	坏・底部	底 1/4 周	ロクロナデ→ナデ？／ 底：回転糸切	ロクロナデ	６と同一個体？	
17	Ｉ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層上面	坏	1/5 周以下	ロクロナデ→ヘラ？ナデ	ロクロナデ	外面圧痕、粘土まくれ痕	
18	Ｉ１０Ｇ～Ｈ・Ⅲ～Ⅳ層上面	壺？・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土に黒い粒	

第 23 図　須恵器(2)



No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備考	本文記載
19	Ⅰ10G～H・Ⅲ～Ⅳ層上面	壺・頸部	1/5周	ロクロナデ	ロクロナデ	内突出部ヘラナデ？、粘土まくれ痕・茶色	
20	Ⅱ4F付近重機で剥いだ面（Ⅱb層？）	甕・胴部	破片	平行タタキ目	当て具痕（平行タタキ目状）		
21	Ⅳ1B～2C（Ⅵの間違い？）・Ⅳ層上面	壺・頸～肩	2/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		
22	Ⅳ1B～2C（Ⅵの間違い？）・Ⅳ層上面	甕・胴部	破片	平行タタキ目（粘土まくれ痕）	当て具痕	外面自然釉付着（焦げ茶色）	
23	え上区試掘	壺・頸部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
24	け区試掘	壺？・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	甕にしては薄い？	
25	北西角部分試掘トレンチ	壺・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	外自然釉付着・内外摩耗	

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	胎土・釉薬、絵付など	製作地・年代	備考	本文記載
1	け区試掘	擂鉢・胴部	小片	灰色・鉄釉			

第24図　須恵器(3)・陶器

できないような小片も多く掲載した。陶磁器は、古くなりそうなものは掲載した1点のみで、他は近代以降と思われるものが数点出土した。土師器・須恵器は、9世紀後半～10世紀初頭あたりと思われるものがほとんどで、明らかに逸脱していると思われるものはない。陶器は、近世末以降であろう。

土師器には、縄文土器と同様、砂の混入が目立ち、この付近での製作を窺わせる。焼粘土塊の出土がこれを裏付けるか。土師器、須恵器とも、基本的に住居などの遺構の周辺から出土している。

以下、表の補足。3の外面口縁のヨコナデ、実際にはほとんど見えず、工具痕も全く見えない。21＝45の同一個体か。38の出土割合、「2号住」1/7、「床下」1/7、「p.6」5/7で、外面、器面の状態からナデと判断したがケズリでよいかも知れない。49の外面底面を見ると、台が取り付けられていたような成形痕が認められるが、残存状態から判断するとせいぜい井戸底程度の高さのものである。外面1/2周スス付着し（クレーター状に器面が剥落している）、残りの1/2周は赤く二次焼成を受けている。53の出土割合、「Ⅰ9G」:「Ⅰ10G～H」が1：2である。

参考文献

八木光則　1993「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙検討会　特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相』同青森大会事務局（青森県埋文センター）(1992年開催のシンポジウム結果をまとめたもの)

(3) 土　製　品（第25図、写真図版19）

土偶1点、土錘？1点、焼粘土塊2点出土した。

土偶（第25図1、写真図版19の1）

調査区南西端の旧河道上のⅢ層から１点出土した。周囲から大洞A1式土器が出土しており、この時期の大型遮光器に系譜を引く土偶の可能性が高い（金子　2001）。10～20mほど西からは炭化物を顕著に含む層が2.5 × 1.5 mの範囲で認められ、生活痕跡の比較的濃い場所である。

土錘？（第25図、写真図版19の２）

内部に土錘状の溝を持つが、外面の丸みからすると土錘とは考えにくい土製品が１点ある。近代の溝跡から出土しているが、遺構・遺物の広がりを考えれば、おそらく古代に帰属するものであろう。

焼粘土塊（第25図、写真図版19の３）

古代の住居から焼粘土塊が２点出土。出土位置が同じ、特徴が同じなため、１点として扱った。

焼粘土塊は、縄文時代の遺跡ではしばしば出土するものである。筆者は、これまで形状から大きく５種類に分けてきた（金子　2004、2006）。粘土をそのまま手の中でひねったような形で（人糞状）表面は割とザラザラしており、やや重く橙色を呈するもの（手びねりと仮称）、方形を基本としたブロック状で軽く表面が滑らかで朱～クリーム色（白色基調）を呈するもの（軽石状と仮称）、橙色で薄く粘土の圧痕がはっきりしない土器破片状、表面の凸凹著しく（ギザギザ）金平糖のような形状で、やや重め、土器破片（が摩耗した）のように見える場合もあるもの（金平糖状と仮称）、橙色で土器破片状に似るが（薄く表面ツルツル）ねじれているもの（樹皮状と仮称）。しかし、金平糖状、樹皮状は、遺跡によっては見られず、また、それぞれ手びねりあるいは土器破片状の変形と捉えることもできるので、ほとんどが前の３種類のいずれか、あるいは折衷的なものとすることができる。

今回出土した焼粘土塊は、軽石と手びねりの中間的なもので、縄文時代の一般的な焼粘土塊に符合するものと言える。しかし、出土したのは、古代の住居跡であり、周囲からほとんど縄文土器が出土していないことから、混入とは考えにくい。やはり、古代（土師器）の土器に関係する焼粘土塊と言えよう。当然といえば当然かも知れないが、縄文時代のものと特に異なることはないようである。

参考文献

金子昭彦　2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史④　同成社
2004「Ⅴ３(4)　焼粘土塊」『平清水遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2005「Ⅵ４(7)　焼粘土塊」『金附遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(4) 石　　器（第25図、写真図版18 ～ 19の１～ 20、観察表は写真図版の方にある）

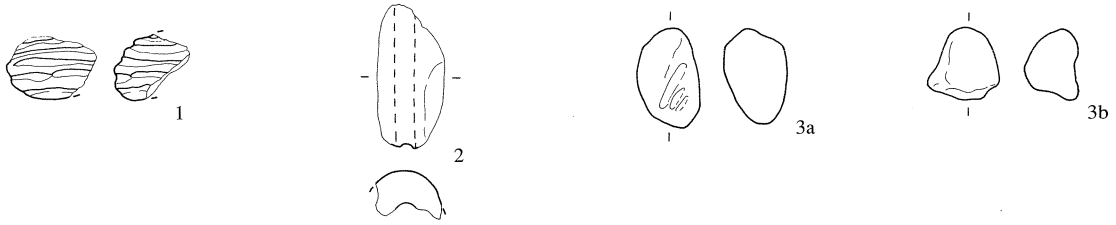
今回の調査で最も顕著な特徴が認められたのが、石器である。怪しげな礫石器？３点を除けば（18 ～ 20）、いずれも石器製作時の剥片ばかりで、トゥールは見られなかった。その剥片も、怪しげなものを含めても17点と、決して多いとは言えない。19は、古代に帰属する可能性があるが、その他のほとんどは、縄文土器の出土が多い地点から発見されており、縄文時代に帰属するものと言えよう。

(5) 鉄　製　品（第25図下段、写真図版19）

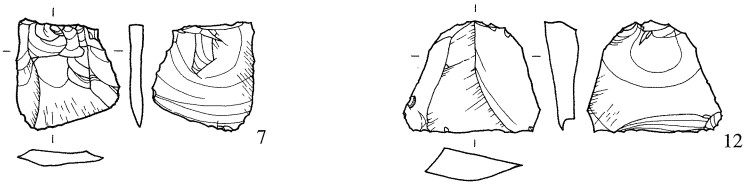
鉄鏃が２点、不明品が２点出土。３は、全体の形や木質部の残存状況から斧に近い印象を受けるが、幅がずっと狭い。４は、板状で一部が隆帯状に盛り上がる。１、２は古代に帰属するであろうが、３、４は不明である。出土位置からは、３は古代に帰属する可能性もあるが、４は新しいか。

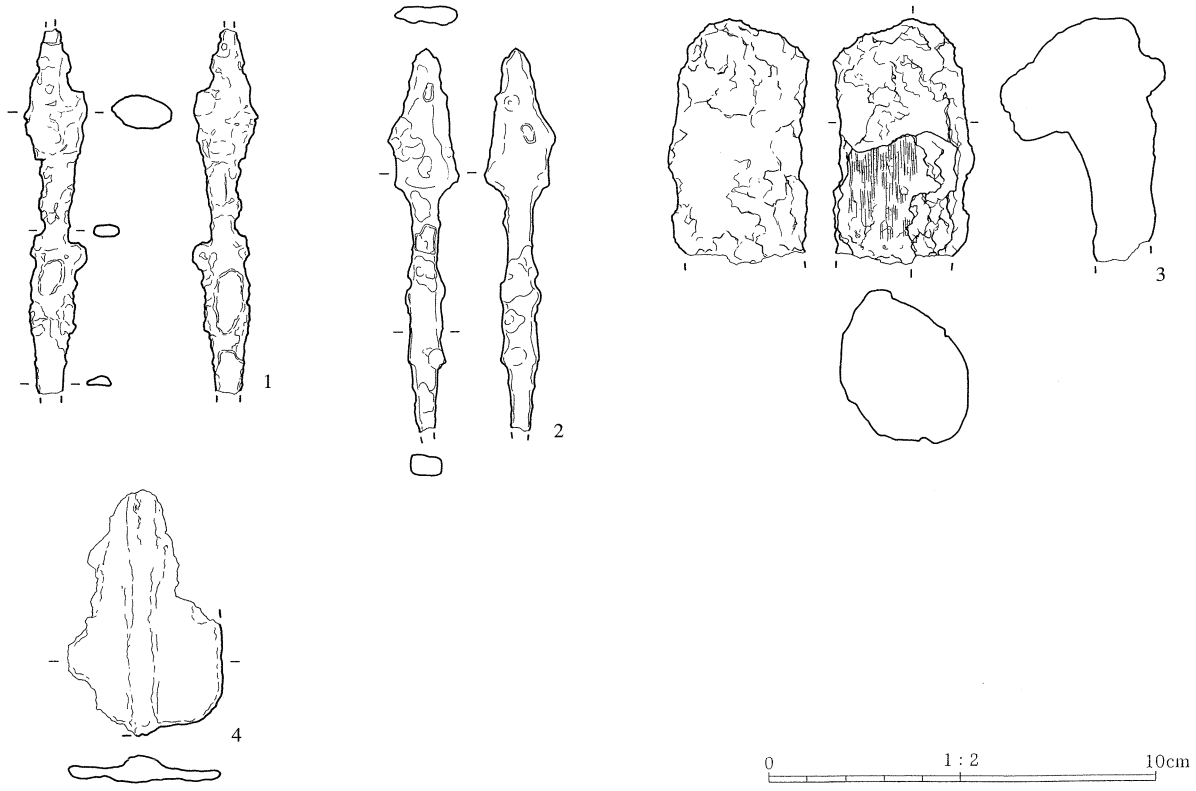
(6) そ　の　他（写真図版19の中段）

アスファルト塊らしき（未分析）ものが１点出土。出土位置から、縄文時代後～晩期のものか。



No.	出土地点・層位	種類	残存状況	重量（g）	特徴	本文記載
1	ⅩⅡ３～４Ⅰ・Ⅲ層中心	土偶	肩か腰	4.33	中実→肩か？・大洞Ｃ２～Ａ1式の大型遮光器系統の土偶	
2	Ⅴ９Ｄ（近代以降溝）	土錘？	欠損	6.52	外面摩滅、内面中央長軸方向に土錘状の溝・土錘にしてはやや丸み強い	
3	第１号住居	焼粘土塊	摩耗	7.55	２点（同様）・2.6×1.7×1.5、2×1.7×1.3㎝・軽石と手びねりの中間的・淡い朱色	





No.	出土地点・層位	種類	残存状況	最大計測値（㎝）			重量（g）	備考	本文記載
				長さ	幅	厚さ			
1	Ⅰ１０Ｇ～Ｈ（６号住付近）・Ⅲ～Ⅳ層上面	鉄鏃	先端欠損	(9.6)	1	0.15	10.15	基部サビによる膨れひどい	
2	う西区住居？（６号住付近）試掘	鉄鏃	基部欠損	(10)	1.5	0.5	16.78		
3	Ⅱ３Ｇ付近重機で剥いだ面（Ⅱｂ層？）	不明	欠損	(6.3)	3.1	2.8	96.76	厚い・中に木質部残存	p.49
4	き区試掘	不明	破片	(6.4)	(3.9)	(0.7)	21.9		

第25図　土製品・石器・鉄製品

V 駒板遺跡

1 概　　要

精査した遺構は、縄文時代後半の溝状の陥し穴状遺構2基、確認のみの遺構は、縄文時代（後期前葉）の土坑2基、焼土1基などである。その他、土坑、柱穴の可能性のあるものが確認調査区で各1基づつ認められた（第3節参照）。出土遺物は、縄文土器（後期前葉がほとんど）が42×32×8㎝のコンテナ1箱弱、須恵器小片1点、石器製作時の剥片2点である。

縄文時代（後期前葉）の遺物包含層は、調査区中央を北東から南西に延びる水路の両側で検出され、陥し穴状遺構を除く全ての遺構、縄文土器のほとんど全て（28除く）、石器剥片も、ここから発見され、当時も水が流れていた可能性がある。

精査範囲と確認のみの調査範囲の別は、第26図参照。調査範囲と実際に調査した範囲と若干の齟齬を生じている地点がある。西端の堤防脇と南端の水路脇である。堤防脇には側溝があり、どちらも調査時に使用中であり、ギリギリまで掘ることは不可能であった。重機による掘削は幅1m未満は無理なため、水路と側溝に余裕を持たせた分、調査範囲がずれたのである。

図の凡例は、例言の下にある。遺構名称は、野外では、精査、確認のみの遺構それぞれ別に付けていたが、報告にあたり若干変更した（第Ⅱ章参照）。基本層序、調査経過・方法は第Ⅱ章参照。確認範囲での遺物の取り上げ方針については、第3節参照。遺構の検出状況についても、第Ⅱ章参照。調査の具体的な状況は、第2、3節および第Ⅲ章を参照いただきたい。

調査は、調査員一名が重機に張り付いて第一次検出面まで下げ、その後人力で検出するという手順で行った（詳細は第Ⅱ章）。①～④も含めたグリッドについては第Ⅱ章参照。なお、第27図のグリッド図は、工事用図面に縮小コピーかけたものに測量業者がメッシュを入れ、それをトレースして作成したもので、現地で打設した杭を基に作成した図面とは若干のずれが生じている。

以上に示した遺構の他に、溝跡が1条検出されている。ＸＸⅢ９ＪとＸＸⅣ１Ｃの別々の地点に確認されたものであるが、方向と規模・形から同じものと判断された。最初、ＸＸⅢ９Ｊで確認されたときには掘り込み面が十分に確認できなかったため精査を行ったが、後にＸＸⅣ１Ｃで確認した際に、掘り込み面がⅢ層より上にあることは確実で、覆土が表土（Ⅱ層再堆積）とⅢ層の混土であり、確認面での輪郭が極めてシャープであることから、新しいと分かった。穂貫田遺跡と同様の、ほぼ南北に延びる溝である。

なお、県教育委員会が事前に行った試掘調査で、今回と同じ調査範囲ではＸⅦ１Ｆ付近に土坑が検出されているが、今回の調査では確認できなかった。

2 精査した遺構（第26～29図、写真図版10）

精査範囲で検出された遺構は、溝状の陥し穴状遺構2基であり、両方とも、調査区南端の沖積段丘上の高い場所にあり、検出面などから、縄文時代後半の可能性が高い。なお、平面図と断面図の照合は、現地で行っており、どうしても合わなかった場合は、本文にその旨を記している。

今回の調査で精査した範囲は、第26図の濃い網がかかった部分700㎡で、幅約1.5mの狭い範囲である。なお、調査範囲と調査した範囲のずれについては、第1節参照。

検出作業は、概ね、Ⅳ層上面とⅦ層上面の２回行っている。なお、調査で確認された最近の溝跡や疑似現象については、第１節に記した

第１号陥し穴状遺構（第29図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査範囲最南端に位置し、東西に伸びる排水路予定地内の中央よりやや西寄りにある。Ⅶ層（やや砂質）上面で検出。周囲の地山（Ⅶ層）の標高は、66.9ｍ前後で、今回の調査範囲で最も高い67.3ｍにはやや及ばないが、それを西側に持つ（すなわち東に向かって僅かに下る）自然堤防上に立地する。周囲の土層は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅲとの漸移層→砂質のⅦ層→砂のⅦ層の順に堆積している。北側の調査区境に長楕円形の黒いシミの端を検出し、陥し穴状遺構の可能性が高いと予想したが、検出したのが一部であり、形がややいびつだったのと、同様のものが穂貫田遺跡で全て疑似現象であったため、調査範囲内の部分をまず掘ってみた。その結果、それらしいと感じたので、調査範囲を広げて全貌を現してから土層観察用ベルトを設定して精査を開始した。

＜精査状況・図＞調査範囲を広げる前に検出面からベルトを設定しようと考えてはいたが、指示が悪く遺構範囲ギリギリまで下げてしまったため、いびつなベルトになってしまった。平面図と断面図は、上場、下場に若干の認識状の違いはあるが、ほぼ合致する。

＜重複＞ないと思われる。

＜覆土・堆積状況＞底直上にⅦ層（砂）の再堆積（13層）が見られ、その上にⅢ層の再堆積（12層）、以下、上に向かって、Ⅶ層の再堆積（11層）、Ⅶ層の汚れ再堆積（10層）、Ⅲ層とⅦ層の混土（９層）、Ⅲ層の再堆積（４層）となる。６～８層は、根によるカクランか？

＜平面形・規模＞Ⅶ層上面（検出面）で、308×50㎝の長楕円形。

＜断面形・深さ＞短軸方向の断面形は、Ｙ字形か。掘り込み面と推測される高さから約116㎝。検出面から約71㎝。

＜壁・底＞長軸方向の壁はオーバーハングしており、特に北東方向は顕著。ベルトの設定がまずくて不確かだが、Ⅲ層の上面付近から掘り込んでいるようで、一部上面にⅡ層とⅢ層の混土らしいものが入る（３層）。壁の上部約30㎝はⅢ層、その下20㎝ほどⅢ層とⅦ層の漸移層、そこから約55㎝ほどが砂質シルトのⅦ層、下部10㎝ほど～底が砂のⅦ層。底は、砂のため十分な観察はできなかった。

＜副穴等の付属施設＞底が砂のため確実ではないが、なかったと思う。

＜出土遺物＞なし。

＜時期・所見＞掘り込み面と立地と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。Ⅲ層上部から掘り込んでいるとすれば、縄文時代晩期の可能性もあり、そうすると次の第２号陥し穴状遺構と時期が異なる可能性が出てくる。

第２号陥し穴状遺構（第29図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査範囲最南端に位置し、東西に伸びる排水路予定地内の東寄りにある。Ⅶ層（シルト質）上面に黒色（1層）ということで、明瞭に検出。また覆土も形も陥し穴状遺構然としていた。多くは北側の調査範囲外に続くが、第１号と違って陥し穴状遺構であることは確実なので掘り広げることはしなかった。周囲の地山（Ⅶ層）の標高は、66.9ｍ前後で、今回の調査範囲で最も高い67.3ｍにはやや及ばないが、それを西側に持つ（すなわち東に向かって僅かに下る）自然堤防上に立地する。周囲の土層は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ層の再堆積（８層）→Ⅴ（９層）→Ⅵ（10層）→シルト質のⅦ層→砂のⅦ層の順に堆積している（第29図参照）。

＜精査状況・図＞下半部に「黒土」が入らず遺構の範囲が不明瞭であったこと（3～5層が10＝Ⅴ層とほとんど変わらなかったため）と、下半部が極端に細くなって掘るのも容易でなくなったので、中央にトレンチを入れて掘り広げた。
＜重複＞調査した範囲では、ないと思われる。
＜覆土・堆積状況＞下→上に、Ⅶ層の再堆積（6～7層）→Ⅵ～Ⅶ層の再堆積（3～5層）→Ⅴ層再堆積（2層）→Ⅲ～Ⅳ層の再堆積（1層）。下部に「黒土」が入らないことが特徴である。
＜平面形・規模＞多くは北側の調査範囲外に続くため、長さ不明。幅は約80㎝。比較的上位で検出できたためか、幅広の長楕円形になりそうである。
＜断面形・深さ＞短軸方向の断面形は、Y字形で、上部の幅約80㎝から約16㎝と、下半部は極端に狭くなる。掘り込み面と推測される高さから約102㎝。検出面から約81㎝。
＜壁・底＞調査できた長軸方向の壁はオーバーハングしていない。調査区境の断面から、Ⅴ層の上面付近から掘り込んでいるようだ。壁の上部約10cmはⅤ層、その下10cmほどⅥ層、そこから約40cmほどが砂質シルトのⅦ層、下部40㎝ほど～底が砂のⅦ層。底は砂で十分な観察はできなかった。
＜副穴等の付属施設＞底が砂のため確実ではないが、なかったと思う。
＜出土遺物＞なし。
＜時期・所見＞掘り込み面と立地と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。上面にⅣ層が堆積しているのを額面通りに受け取れば後期以前ということになるが、あくまで汚れた再堆積であり、そこまで古くはならないであろう。しかし、その上にⅢ層が堆積していることも確かなので、両方を合わせて後期初め頃という時期が仮定される。地点は離れているが、調査区内に後期前葉の土器が比較的多く出土していることから、このあたりか。陥し穴の覆土にⅢ層起源の「黒土」が入っていないことから、周囲にⅢ層が発達する以前に掘られたと推測され、この点でも前述の仮定は裏づけられる。
少なくとも、Ⅲ層が未発達の頃に掘られたことはほぼ確実であり、この点で、Ⅲ層上部から掘り込んでいる第1号陥し穴状遺構とは時期が異なる可能性が高い。

3　確認のみの遺構（第26～28・30～31図、写真図版9～13）

土坑2基、焼土1基が検出され、いずれも縄文時代に属すると思われ、中でも後期前葉の可能性がある。この他、溝、土坑、柱穴らしきものが各1基づつ確認されたが、遺構であるかどうか定かでない（土坑？は、土坑の項で、その他は下に詳述）。これらも含めて全て調査区中央水路両側から確認され、遺物すらも、縄文時代は、1点を除いて、全てここから発見されている。
確認のみの調査範囲は、第26図の薄い網で示した範囲で、4,890㎡に及ぶ。工事による掘削が遺構面まで及ばないため、検出作業の後遺構の範囲を図に記録して終了となるが、遺物・遺構が確認されるまで下げるように（最終はⅦ層上面）、県教育委員会の指示があったので、地点により検出面は様々であるが（第30・31図に書かれている層名）、駒板遺跡の場合は、穂貫田遺跡と違って、出土遺物が顕著で重機で剥いでいる段階に遺構を確認できたのは、調査区中央を北東から南西に横断する水路の北西側部分に限られていたため（本来はおそらく南東側部分にもそういう地点があったと思われるが）、大部分をⅦ層上面まで下げており、原地形を推測できる状態にあった（第Ⅱ章参照）。なお、調査範囲と調査した範囲のずれについては、第1節参照。
第1号焼土の北側に検出した、幅2m程度の東西に伸びる深さ30cm程度の溝状の落ち込みは、断ち割った結果、Ⅱ層そのもので混入物がなく、底がはっきりしないため、雨裂等の自然現象と判断した。

柱穴状土坑様のものは、水路北側中央付近、ⅩⅥ３Ｈグリッド、Ⅲ層下部で確認された（第31図）。南北方向に長い30×21cmで、南側が尖る弾丸のような形を呈し、西側の縁に沿って炭化物が巡り、炭化物は柱の外側が残ったように見える。周囲には焼土粒が散る。ジョレンで検出した際には確認できず、後で周囲から多く発見された土器の出土状態をメモする時に気づいたものだが、既に地割れを生じていたので十分な確認はできず、新しいものである可能性も否定できない。少なくとも、隣のⅥ層上面まで下げた箇所の断面を見る限り（第31図）、竪穴住居跡は確認できず、Ⅲ層の下にはⅣ層が認められ、特に炭化物などが多く見られるわけではない。

確認のみの調査範囲で出土した遺物については、次の遺物の節を参照いただきたいが、遺構出土の遺物については、別々に取り上げると後々不都合が多いと判断して、原則的に埋め戻している。

第26図の“工法変更等により調査不要となった範囲”について。堤防際の道路については、穂貫田遺跡と同様である。その東側の隣接部分は、県教育委員会が「穂貫田排水樋管改築工事」に伴って既に調査していたため（第Ⅱ章第3節）、不要となった。排水路反対側の南の箇所は、この工事によって水路が北側に変更されて曲げられ、元の水路の部分は更地になり、道路をこの更地に曲げることで工事計画が変更されたため、調査が不要になったものである。南側の今回調査対象外になった範囲は、調査中に告げられたもので、7月下旬に県教育委員会が試掘調査を行っていた。

なお、調査で確認された最近の溝跡や疑似現象については、第1節に記した。

(1) 土　　坑

２基検出し、両方とも縄文時代の可能性が高く、第1号は後期前葉の可能性もある。

なお、水路南側のⅩⅥ７Ｆグリッドにも土坑らしいものを確認した（第31図、写真図版11）。調査区断面に残っていたもので、Ⅲ層中からⅤ層上面にかけて異なる土が落ち込んでいた。ただし、層境はいずれも不整形で疑似現象の可能性も高い。長さ1.5ｍ程度で、大部分は7.5YR4/1褐灰色シルト、Ⅳ層というよりⅡ層の再堆積に炭化物が混じる土で、その上に一部、7.5YR3/1黒褐色シルト、焼土粒多い、炭化物少し含む、Ⅲ層とⅣ層？（というよりⅡ層）の再堆積土に焼土粒、炭化物が混じる土がブロック状に見える。深さは50cm程度で、Ⅲ層上面から25cm下に始まり、20cm程度のⅣ層を抜いてⅤ層上部までかかる。周囲から縄文後期前葉の土器片が比較的多く出土したので、念のため報告する。

第１号土坑（第30図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北寄り、Ｘ６Ｊグリッド。傾斜が緩やかな東西方向に延びる雨裂？（旧河道？）の底に検出。Ⅶ層上面から25cmほど下がった位置にあり、ジョレンで検出。ちなみに、隣接する部分の土層堆積状況は、Ⅰ層40㎝、Ⅲ層40㎝、Ⅳ層（シルト質）10㎝、Ⅴ層20㎝、Ⅴ２層20㎝、Ⅶ層再堆積10㎝、Ⅵ層10㎝、その下がⅦ層である。

＜重複＞ない。

＜検出面覆土＞中央部は、10YR4/4褐色地に10YR4/1褐灰色土が混じる層で、Ⅶ層汚れダマ状再堆積土に１㎝大の炭化物を多く含む。その周囲は、10YR3/1黒褐色（Ⅲ層の再堆積？）に10YR4/4褐色（Ⅶ層）のダマを含む層。

＜平面形・規模＞直径約２ｍの円形。

＜出土遺物＞上面から１㎝程度の大きさの土器片が数点出土したが、検出後の雨で水につかり消失。

＜時期・所見＞覆土から、本来はもっと高い位置から掘り込まれていた可能性が高く、また縄文時代後期（前葉？）ころの可能性がある。

第２号土坑（第 30 図、写真図版 10）

＜位置・検出状況＞調査区中央堤防際北寄り、ＸＶ７Ｆグリッド。重機で剥いだⅥ層下部をジョレンでクリーニングしたところ検出。なお、本土坑の南東側に同様の覆土を持つ不整形小穴を検出したが（第 30 図）、疑似現象らしい。隣接する部分の土層堆積状況は、Ⅰ層 35 ㎝、Ⅱ層 15 ㎝、Ⅲ層 35 ㎝、Ⅳ層見あたらず、Ⅴ層 25 ㎝、Ⅵ層 18 ㎝、Ⅶ層である。

＜重複＞ない。

＜検出面覆土＞ 10YR2/1 黒色土、シルト、Ⅳ層粒子混じる。Ⅲ層の再堆積土で、炭化物僅かに含む。

＜平面形・規模＞ 60 × 50 ㎝程度の楕円形。

＜出土遺物＞なし。

＜時期・所見＞隣接する疑似現象から、これも疑似現象である可能性もあるが、輪郭はシャープで明らかに掘り込んだものと考える。検出面から、縄文時代の可能性がある。

(2) 焼　　土

縄文時代後期前葉と思われる１基を、堤防際で検出した。

第１号焼土（第 30・32 図、写真図版 10）

＜位置・検出状況＞調査区中央堤防際中央。ＸＶ７Ｇ～Ｈグリッド。Ⅲ層下部で検出。重機で剥いだ時点で比較的多くの土器が出土したため、ここで止めて、その後ジョレンをかけて検出。

＜重複＞ない。

＜検出面覆土＞Ⅲ層らしい（検出時に一部残っていた）。

＜平面形・規模＞約 90 × 60 ㎝程度の不整楕円形。

＜焼土の特徴＞形成面の土の特徴のため、はっきりしないが、面的に焼けており、現地性であることは間違いない。ただし、現状ではブロック状の集合体のように見えるが、これは間に後から根などにより黒土が入り込んだためと思われる。なお、北東側にも焼土が認められるが（第30図の白抜きの部分）、ここは粒子が混じっているだけで焼けてはいない。

＜出土遺物＞周囲から比較的多くの土器片が出土した（第 32 図１～４）。

＜時期・所見＞出土土器と検出面から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。

4　遺　　物（第 32・33 図、写真図版 20）

縄文土器が 42 × 32 × 8 ㎝のコンテナ１箱弱、2,588.8ｇ、須恵器小片１点、石器製作時の剥片２点が出土したのみである。縄文土器は、中期後葉、後期中葉、晩期中～後葉らしきものが各１点ずつ出土した以外は、全て後期前葉前半である。

遺物の記載は図･写真図版と表で行い、本文中にはその補足と概要のみ記したので、ここで、図版、写真図版、表を見る際の留意事項について述べておく。

遺物の掲載順序は、原則として、遺構→遺構外、遺構外出土の遺物は、出土位置の順（はっきりしているもの→はっきりしないもの、はっきりしているものはグリッド順としているが、若干混乱がある）に並べている。用水等の出土位置の詳細については本章冒頭部分を参照していただきたい。外面、内面の観察事項の欄の「→」は施文順序を表す。矢印の左が前で、右が後となる。

(1) 縄　文　土　器（第 32・33 図、写真図版 20）

42×32×８㎝のコンテナ１箱弱出土した。全ての出土時期および広い全ての出土地点を基本的に網羅しようと選び、それに比較的残りの良い物も加えたので、通常より掲載率は高いと思われる。

大部分が、縄文時代後期前葉前半（宮戸Ⅰｂ式。本間　1990）に当てはまる（４・13～16・20・21・27 は不確か）。24 は後期中葉（あるいはそれ以後、弥生時代中期の間）、25 は晩期中～後葉か。28 は文様から判断すれば中期後葉大木８ｂ式のようだが、整形が非常に丁寧で器壁が薄く、十腰内Ⅰ式の古い部分の感じに似ている。

今回出土した土器は、残りの悪く摩耗しているものが多い。28 の中期後葉かと思われる土器以外は、全て水路の両側から出土し、著しく偏っている。

その水路の北側西端で排水樋管路敷設に伴って県教育委員会が発掘調査しているが（第Ⅱ章参照）、その際も出土土器の大部分は縄文時代後期前葉前半だったらしく、掲載されている土器は該期しかないようである（岩手県教育委員会　2006：pp.33 ～ 34）。

以下、表の補足。８は、最大径の部分は摩耗しており、その下は赤く二次焼成を受けている。内面は、口縁付近を除いてコゲが認められる。

参考文献

岩手県教育委員会　2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 16 年度)』岩手県文化財調査報告書第 120 集
本間　宏　1990「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『第４回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会 (群馬県)
山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

(2) 土師器・須恵器・陶磁器

土師器・須恵器は、第 26 図の堤防寄りの「段丘崖」の南側から小指の先ほどの須恵器小片が１点、陶磁器は、北側調査区の民家の西側から近現代と思われる磁器が十数点出土したのみである。

今回の調査では該期の遺物は非常に少なかったが、周囲の田面を調査した県教育委員会の試掘では、「方形周溝」などの平安時代の遺構や土師器が出土しているそうだ（岩手県教育委員会　2006：p.82）。また、水路の北側西端で排水樋管路敷設に伴って県教育委員会が発掘調査した際にも（第Ⅱ章参照）、ロクロ使用の内黒土師器坏破片が出土しているようだが（岩手県教育委員会　2006：p.29）、掲載遺物の中に土師器・須恵器が１点もないところを見ると、出土量はやはり少なかったようである。

参考文献

岩手県教育委員会　2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 16 年度）』岩手県文化財調査報告書第 120 集

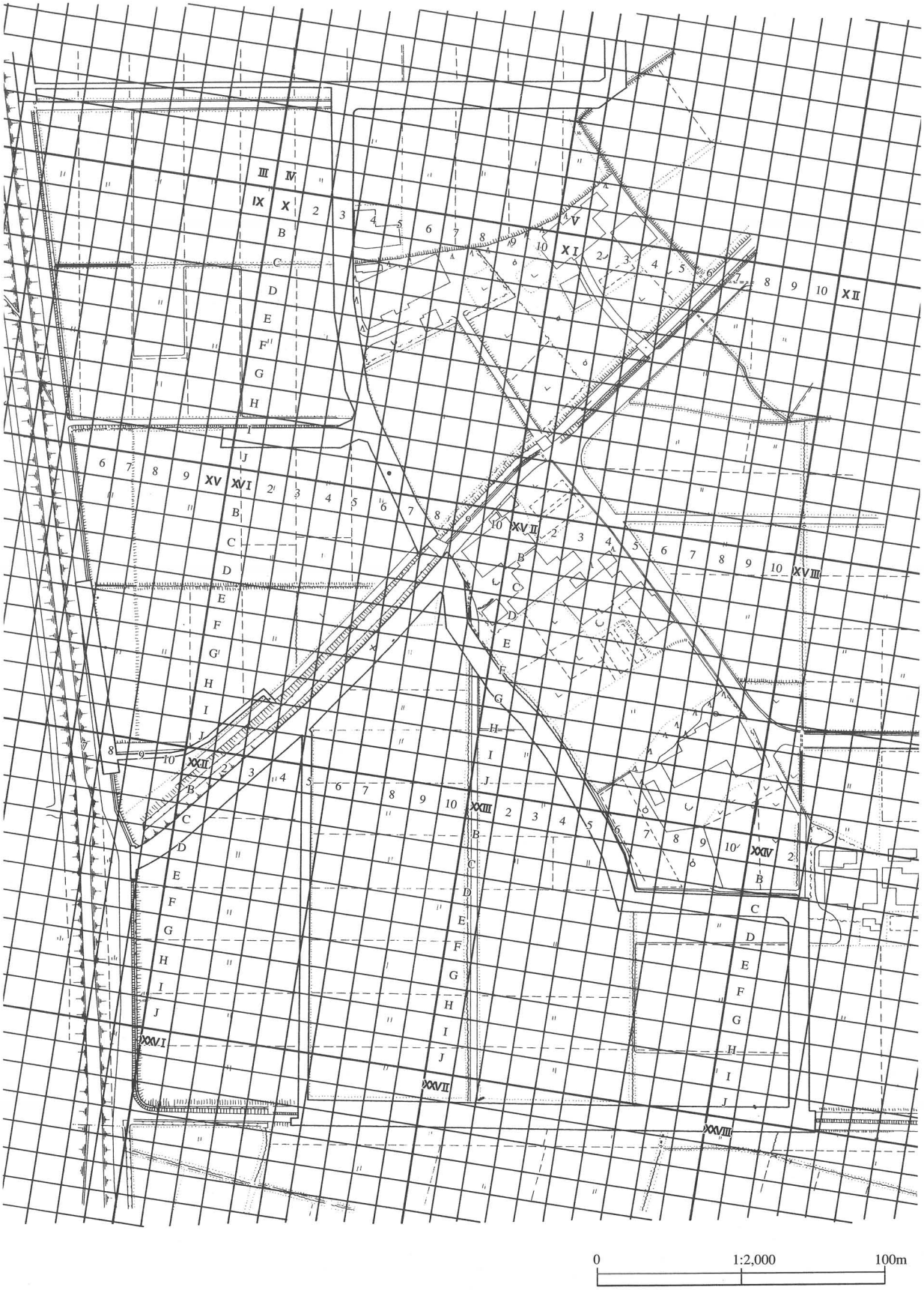
(3) 石　　器（第 33 図、写真図版 20）

水路北側の縄文土器が比較的まとまって出土した地点から、石器製作時の剥片が２点出土したのみである。ただし、前述の排水樋管路敷設に伴って県教育委員会が発掘調査した際には、石鏃１点、凹石らしきものが１点出土している（岩手県教育委員会　2006）。

参考文献

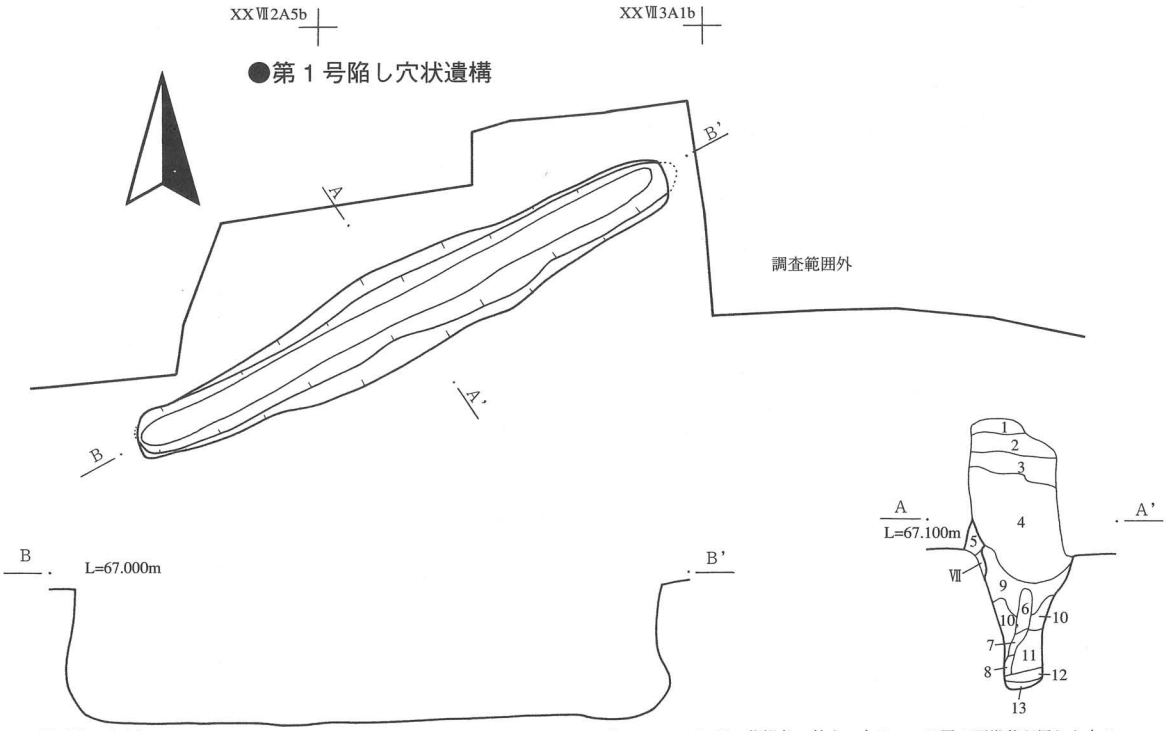
岩手県教育委員会　2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 16 年度）』岩手県文化財調査報告書第 120 集

第 26 図　調査範囲と地山（Ⅶ層）上面の地形（濃い網が要精査範囲、薄い網が確認のみの範囲）

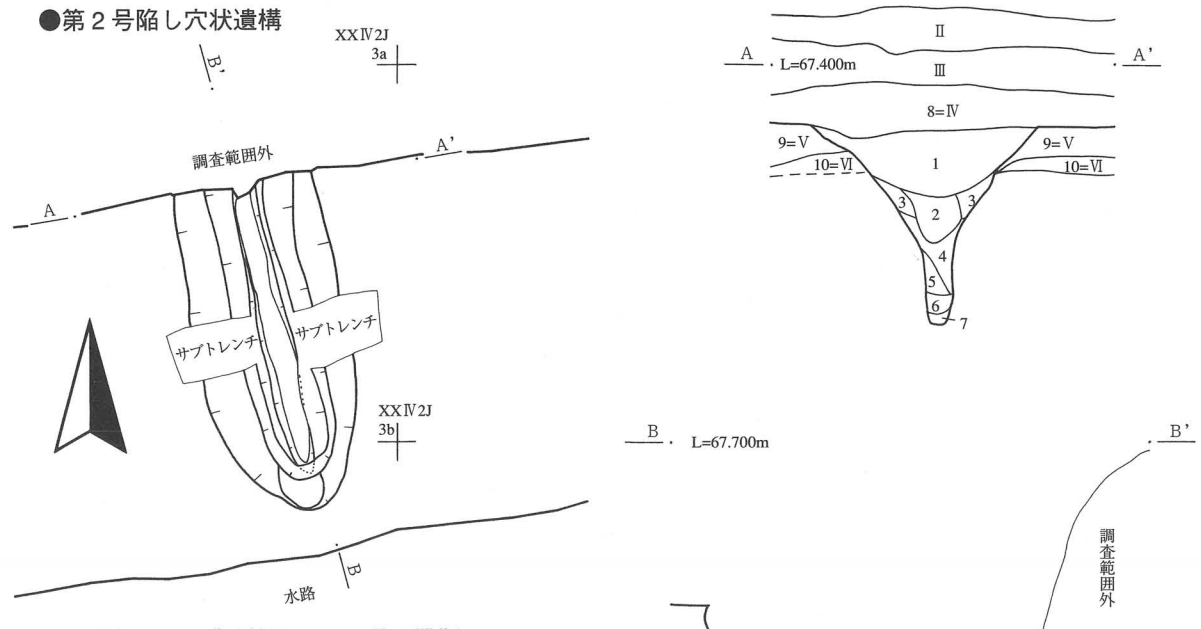


第27図　グリッド

第 28 図　遺構配置図（網かけ部分は調査しなかった範囲）



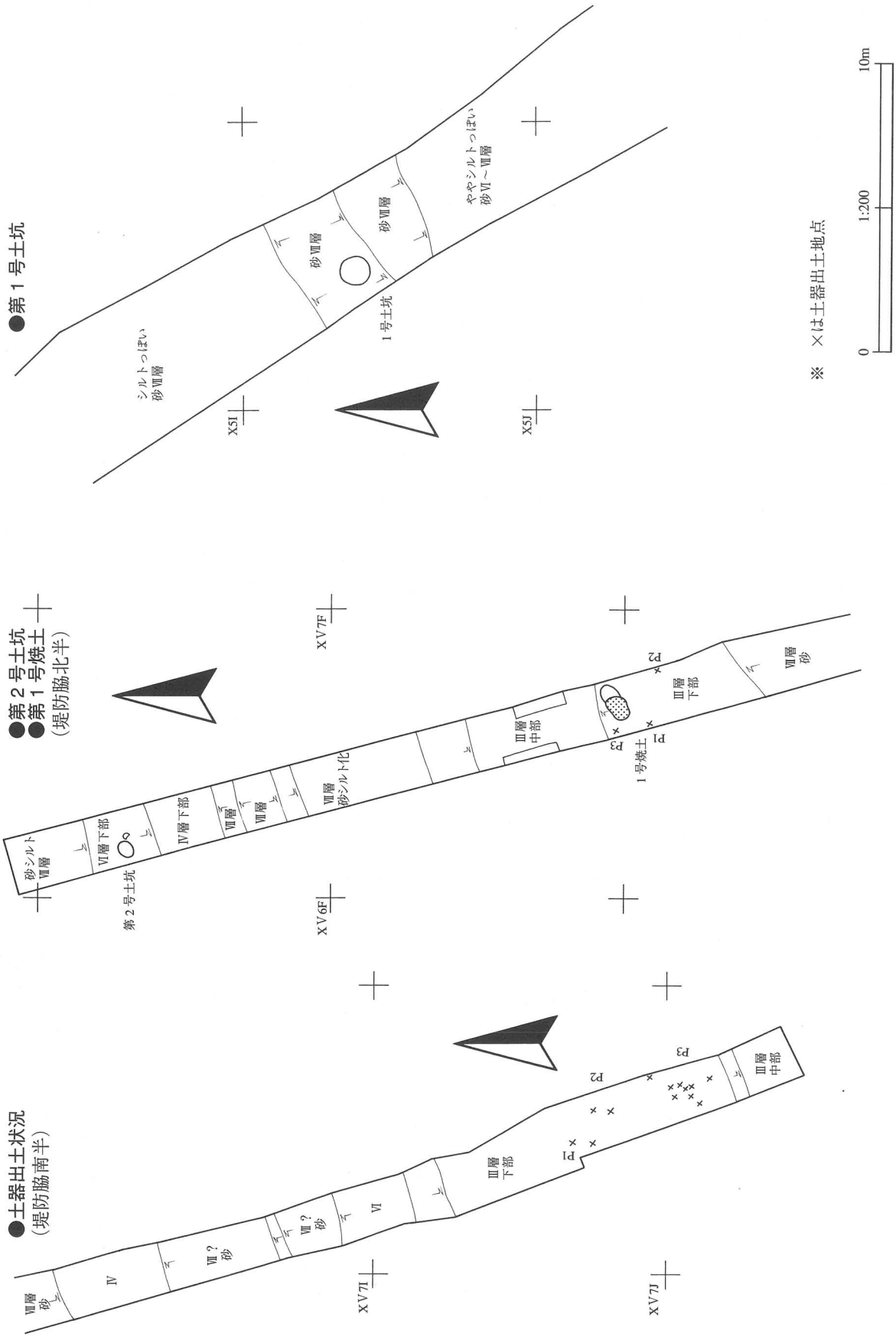
1：Ⅰ層（水田床土）。
2：10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　Ⅱ層と思われる。
3：10YR3/1黒褐色に10YR4/2灰黄褐色の小さなブロック　シルト　Ⅱ層とⅢ層の混土？4：10YR2/1黒色　シルト　Ⅲ層の再堆積と思われる（Ⅲ層の違いほとんどなし）。
5：10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅲ層とⅦ層の漸移層（Ⅵ層）。
6：10YR2/1黒色　シルト　ややもろい。Ⅲ層の再堆積にⅦ層粒子混じる。根によるカクランか。
7：10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性強い。もろい。Ⅲ層とⅦ層の混土。根によるカクランか。
8：10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　もろい。Ⅶ層の再堆積が汚れたもの。根によるカクランか。
9：10YR3/1黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の混土　シルト　Ⅲ層とⅦ層の混土。
10：10YR4/4褐色　粘土質シルト　Ⅶ層の汚れ再堆積に若干黒土混じる。
11：10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　もろい。粘性ややあり。Ⅶ層の崩れたもの。
12：10YR3/1黒褐色　シルト　もろい。Ⅲ層の再堆積。
13：10YR4/3にぶい黄褐色　砂　Ⅶ層下部の再堆積か、掘りすぎ（Ⅶ層そのもの）。



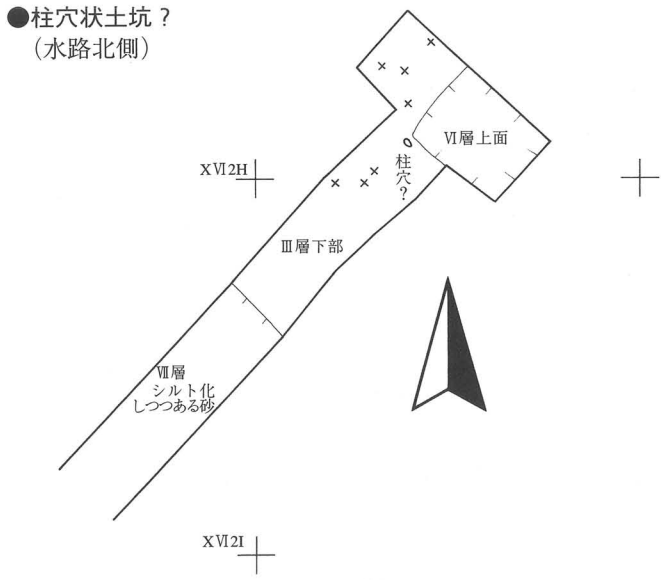
1：10YR1.7/1黒色　シルト　若干砂混じる。Ⅲ～Ⅳ層の再堆積か。
2：10YR2/2黒褐色　シルト　Ⅶ層粒子含む。9層の再堆積らしい。
3：10YR3/1黒褐色地に10YR4/3にぶい黄褐色の斑　粘土質シルト　粘性あり。Ⅶ層ブロック多く含む。10層とほとんど同じで、10層の再堆積か。
4：10YR3/2黒褐色地に10YR4/2灰黄褐色の斑　粘土質シルト　Ⅶ層ブロック非常に多く含む。10層の再堆積らしい。
5：10YR3/2黒褐色と10YR4/2灰黄褐色の混土　シルト　ややもろい。Ⅶ層粒子多く含む。10層の汚れ再堆積か。
6：10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　もろい。Ⅶ層（砂部分）の再堆積。
7：10YR3/2黒褐色　砂質シルト　非常にもろい。Ⅶ層（砂部分）の汚れ再堆積。
8：10YR1.7/1黒色　シルト　砂多く含む。Ⅳ層の再堆積と思われる。
9：10YR1.7/1黒色　シルト　粘性あり。Ⅴ層と思われる。
10：10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　Ⅵ層と思われる。

0　1:40　2m

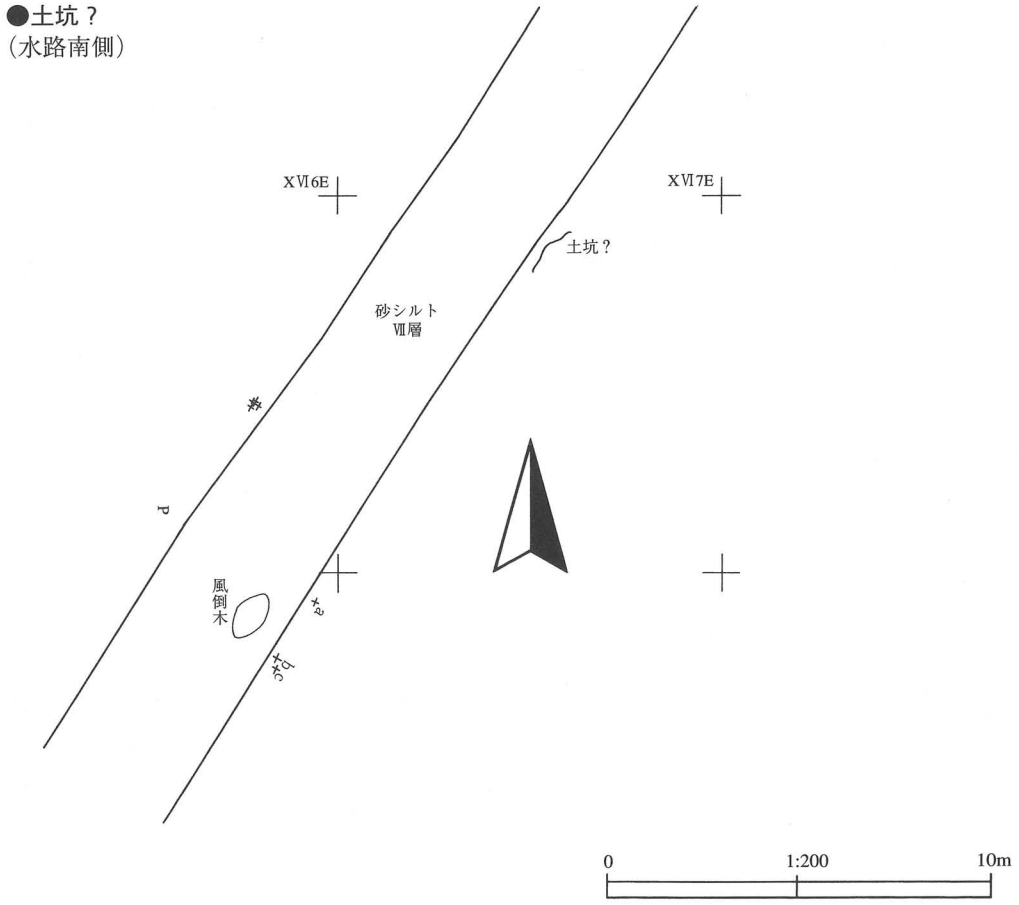
第29図　第１・２号陥し穴状遺構



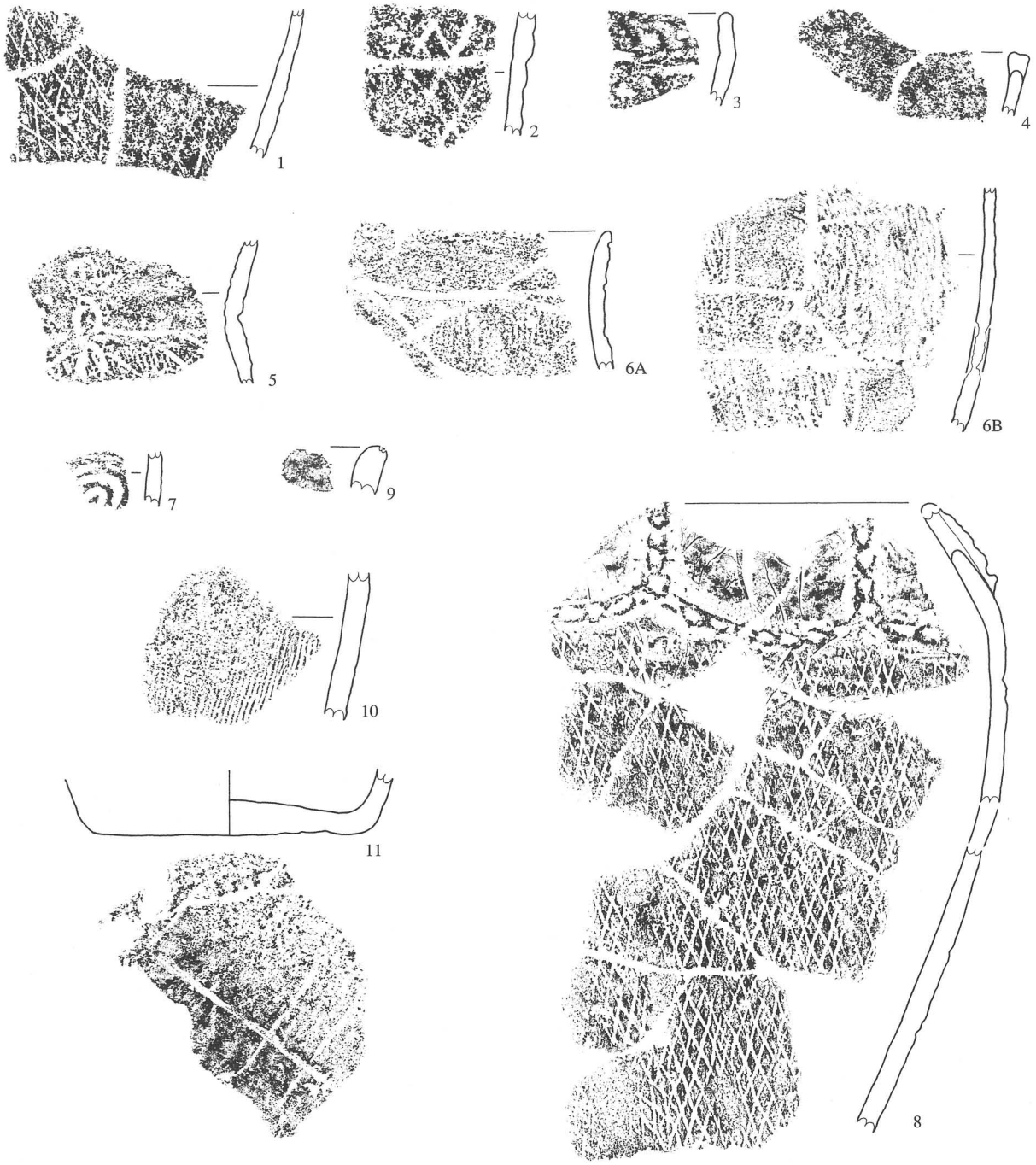
第30図　第1・2号土坑、第1号焼土、土器出土状況（堤防脇）



※　×は土器出土地点

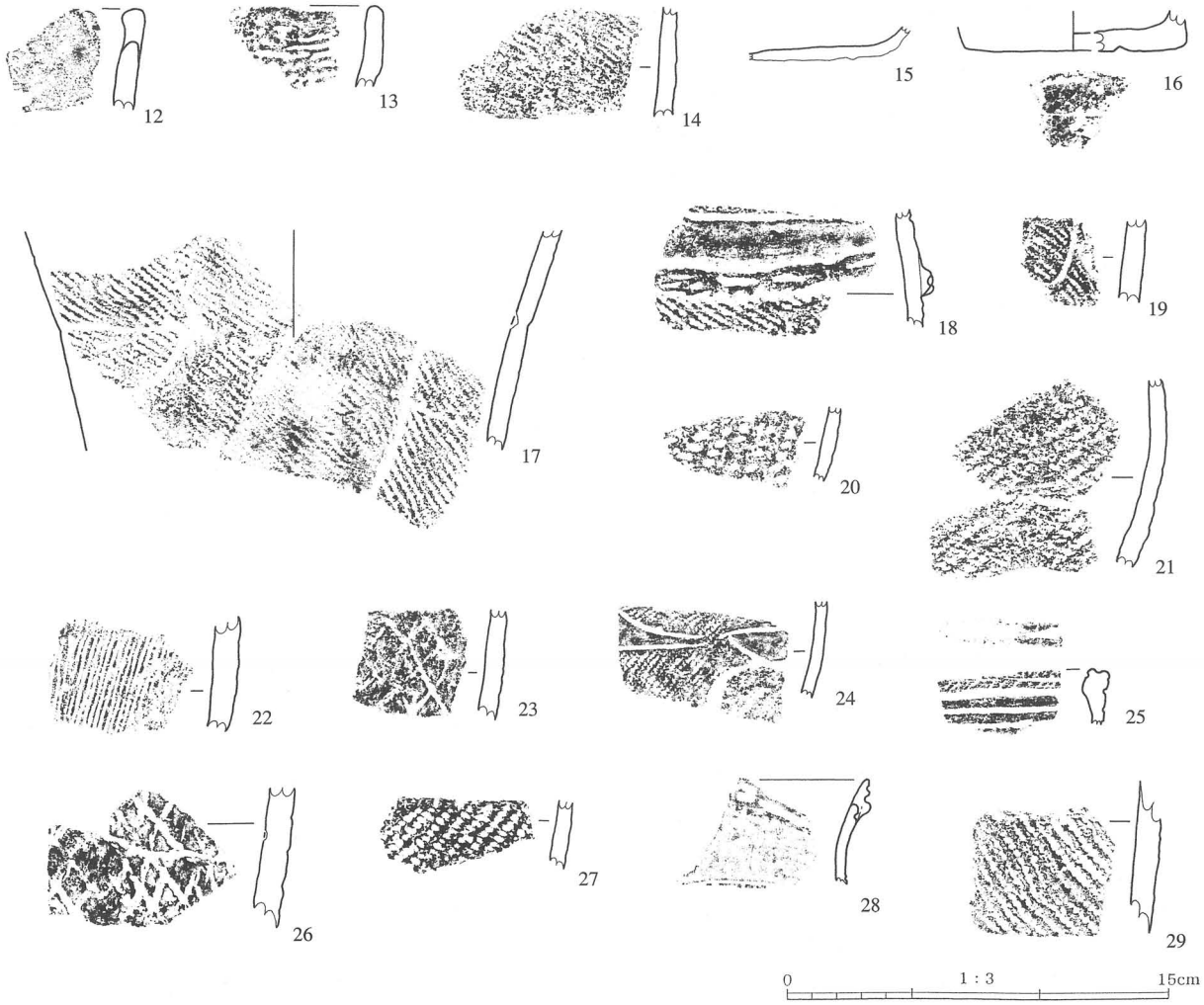


第 31 図　中央水路両脇柱穴？、土坑？、土器出土状況

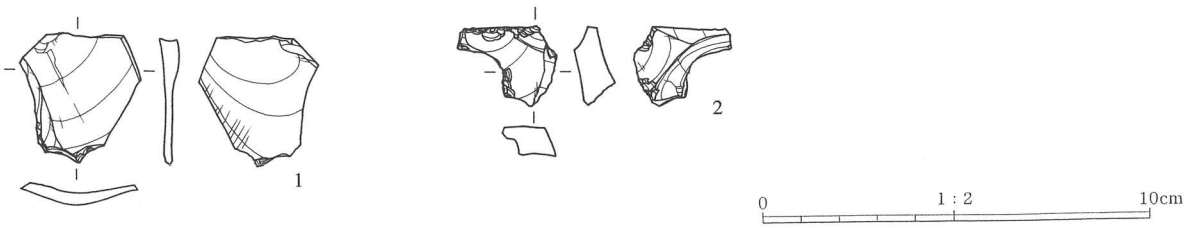


No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部／底面、縄文原体など）	内面 （調整など）	備考	本文記載
1	第 1 号焼土横 p. 1 （Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡 5 （R） タテ （下の割れ口、粘土接合面から剥離）	ナデ	外面摩耗	
2	第 1 号焼土横 p. 2 （Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡 5 （？） タテ	ナデ	外面摩耗ひどい、剥落	
3	第 1 号焼土内と周辺・Ⅲ層下部	深鉢・口縁部	斜縄文？→口縁ナデ	ナデ	内外剥落	
4	第 1 号焼土内と周辺・Ⅲ層下部	深鉢・口縁部	口唇突起頂部に押圧	ナデ	内外摩耗、剥落	
5	ⅩⅤ8 J　p. 1 （Ⅲ層下部）	深鉢・口縁部	突起・単軸絡 1 （？） タテ	ナデ	内外摩耗、剥落	
6	ⅩⅤ8 J　p. 1 （Ⅲ層下部）	深鉢	太く深めの沈線・単軸絡 1 （R） タテ （A と B は同一個体）	ナデ	内外摩耗、剥落ひどい	
7	ⅩⅤ8 J　p. 1 （Ⅲ層下部）	深鉢？・胴部	太く深めの沈線	ナデ	内面コゲ？	
8	ⅩⅤ8 J　p. 2 （Ⅲ層下部）	深鉢	突起頂部刺突・隆帯貼付→単軸絡 5 （R） タテ、横方向、垂直方向刺突→ナデ	ナデ	粘土貼付痕跡残る	p.56
9	ⅩⅤ8 J　p. 2 （Ⅲ層下部）	深鉢・口縁部？	ミガキ？ （粘土、裏表貼り合わせ）	ナデ		
10	ⅩⅤ8 J　p. 2 （Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡 1 （？） タテ	ナデ	外面摩耗ひどい、剥落	
11	ⅩⅤ8 J　p. 2？Ⅲ層下部	深鉢・底 1/5 周	底面木葉痕？	ナデ？	内底コゲ？・胴内外摩耗ひどい	

第 32 図　縄文土器(1)



No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 （口縁部 / 胴部 / 底部／底面、縄文原体など）	内面 （調整など）	備考	本文記載
12	ⅩⅤ８Ｊ・Ⅲ層下部	深鉢・口縁部	突起	ナデ		
13	ⅩⅥ３Ｈ～Ⅰ・Ⅲ層下部	深鉢？・口縁部	LR ナナメ？	摩耗剥落	14 と同一個体？	
14	ⅩⅥ３Ｈ～Ⅰ・Ⅲ層下部	深鉢・胴部	LR タテ？（摩耗ひどい）	ナデ	13 と同一個体？	
15	ⅩⅥ３Ｈ～Ⅰ・Ⅲ層下部	底部	（外面全て剥落）	ナデ？	内面もやや摩耗	
16	ⅩⅥ３Ｈ～Ⅰ・Ⅲ層下部	深鉢？・底部	底部～底面ナデ	ナデ	外面二次焼成で赤い？	
17	ⅩⅥ６Ｆ　p. １ａ、p. １ｂ（Ⅲ層）（割合不明）	深鉢・底部近く	LR タテ （上の右半、下の割れ口、粘土接合面から剥離）	ナデ	外面やや摩耗	
18	ⅩⅥ６Ｆ　p. １ｃ（Ⅲ層）	深鉢・頸部	LR タテ？→隆帯貼付→その上に横から刺突、太く深めの沈線→ナデ	ナデ	下の割れ口、接合面から剥離	
19	ⅩⅥ６Ｇ　p. １（Ⅲ層中）	深鉢？・胴部	LR タテ→太く浅めの沈線	ナデ	やや摩耗	
20	ⅩⅥ６Ｇ　p. ２（Ⅲ層下部）	深鉢？・胴部	RL ナナメ？	ナデ	外面摩耗	
21	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３（Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	RL タテ、ナナメ	ナデ	外面赤く二次焼成、摩耗ひどい	
22	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３（Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡１（R）タテ	ナデ	外面赤く二次焼成、摩耗ひどい	
23	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３（Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡５（R）タテ （下の割れ口、粘土接合面から剥離）	ナデ丁寧	外面摩耗	
24	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３（Ⅲ層下部）	壺？・胴部	LR ヨコ→細めの深めの沈線→ナデ？（丁寧）	指なで？		
25	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３（Ⅲ層下部）	浅鉢？・口縁部	口唇太く深い沈線・細めで深めの沈線・爪形状刻目列	ミガキ？	内外やや摩耗	
26	ⅩⅩⅠ８Ａ　p. ３？（Ⅲ層下部）	深鉢・胴部	単軸絡５（R）タテ （下の割れ口、粘土接合面から剥離）	ナデ		
27	ⅩⅩⅡ？２Ｃ　p. １（Ⅲ層中部）	深鉢・胴部	RL タテ？　（土器選別の際に紛れ込んだ？）	ナデ	外面やや摩耗	
28	調査区最北部・Ⅱ層下	鉢・口縁部	突起・深い沈線・ミガキ	ミガキ	外口縁黒斑	
29	用水南　風倒木・Ⅲ層？	深鉢・胴部	LR タテ	ナデ丁寧		



第 33 図　縄文土器(2)・石器

Ⅵ 山口遺跡

山口遺跡は、北上市内において周知されていた平安時代の遺跡だが、県教育委員会の試掘調査で今回の事業予定地内に埋蔵文化財が確認されたため、遺跡範囲が北に拡張されたものである。ただし、第Ⅱ章でも述べたように、現在の岩手県遺跡地図のくくりでは、北側に隣接する大木遺跡の南端に含まれている可能性もあるようだ（第3図）。

県教育委員会の試掘トレンチは、調査範囲内にある水路と道路が使用中であったこととその南側は電力関係の水路が地中深く埋設され埋蔵文化財は残っていないとの判断から、事業予定地の北側隣接地に設置されたらしい。第34図の「調査範囲」の北側に、調査範囲に平行するように東西に伸びる2本のトレンチが設定された（岩手県教育委員会　2006：p.111）。一つは、東側の小屋に隣接する狭い水田内に（Ｔ２）、もう一つは、その西側に隣接する東西に伸びる水田内に設置され（Ｔ１）、Ｔ２の東端で40×60㎝の土坑1基が確認されている。また、Ｔ１で埋蔵文化財が確認されなかったため、事業自体は西の駒板遺跡まで続くが、調査は第34図の範囲までということになったようである。

山口遺跡は、事業で掘削が深く及ぶため全て発掘調査で、調査面積491㎡である。

事業予定地内には、幅2ｍ深さ1ｍほどのコンクリート製の頑丈な排水路が敷設され、調査直前まで使用されていた。当初の予定では9月1日（金）までとのことであったが、4日（月）の朝の時点でまだ水が流れており、連絡を取ると例年通り6日（水）まで使用したいので待つようにとの指示があった。そこで、駒板遺跡の調査と平行しながら周囲の草刈りなどの雑物撤去を行い、使用中止を待って本格的に調査を開始した。ただし、7日（木）は降雨により作業を中止したため、実際には8日（金）からの開始である。

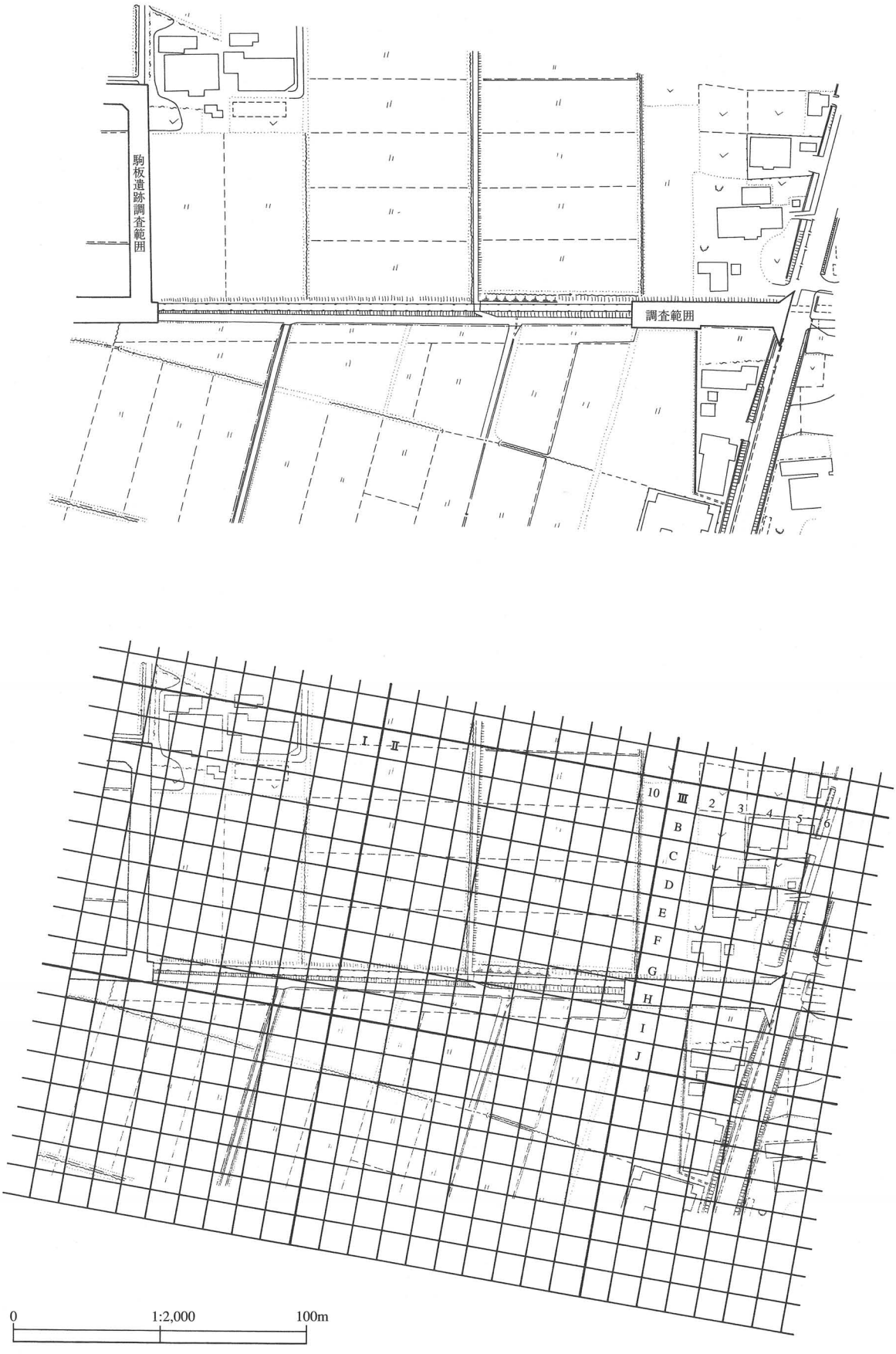
パワー・シャベルで掘削しキャリア・ダンプで土を運ぶことにしたが、排土の関係で、まず、調査範囲内の水路の西端を壊して、南側の道路から北側の休耕田に抜けられるようにした。思った以上に水路は頑丈で、1日がかりで通路を確保するのが精一杯であった。そこへ、4時少し前に、付近を巡回していた東北電力の用地センターの方から、この道路の下にはダムの排水路が入っており、その関係で周囲も含めて重量（3トン以上不可）及び掘削制限があるとの連絡があった。そこで、関係各方面に連絡を取った結果、「調査は中断、重機は引き上げ、今後のことは既に予定されていた14日（木）の駒板遺跡の終了確認の際に話し合い、それまで作業は中止するが、本日既に作業員は4時で引き上げてしまったので、11日（月）は人力による作業を行う」ということになった。

11日は、重機で掘削した部分を人力でクリーニングし、可能な限り掘り下げてみた。撹乱が多いため想像以上に作業ははかどらず、終了時に現水田面より20㎝程度掘り下げられただけであったが、本来の土層はいまだ確認できず、今回の事業地内は、排水路埋設の際に掘削され、埋蔵文化財は既に残っていないことが予測された。

この結果を受けて、14日には、県教育委員会、事業者、当センターの調査第二課長と担当者で協議が持たれ、その場で調査中止ということになった。14日は降雨予報で作業員作業は中止していたので、15日（金）には駒板遺跡の調査と平行して梱包等を行い、18日（月）は敬老の日で作業中止、19日（火）の午後に器材を搬出して、調査の一切を終了した。

参考文献

岩手県教育委員会　2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成16年度）』岩手県文化財調査報告書第120集



第 34 図　調査範囲とグリッド

Ⅶ　ま　と　め

1　地形について

(1) Ⅶ層上面の地形・形成年代

第Ⅱ章で述べたとおり、穂貫田遺跡では、調査区の南東端を中心に、駒板遺跡でも南端を中心に段丘状の地形が認められた。穂貫田遺跡の場合は、西側には段丘崖が認められたが、北東側は高低差のあまりない旧河道が二本平行に東西方向に延びるだけで（－0.7 m）、だらだらと北側に向かって下がるだけであった。南側は、より高低差の大きい二本の旧河道ではあったが（－1.5 m）、やはり段丘崖は認められず、旧河道の南側で再び段丘状（あるいは自然堤防状）にいったん高くなった後、再びだらだらと南に向かって下がっていくという地形である。駒板遺跡の場合は、南側は調査していないのでわからないが、北側にははっきりとした段丘崖が認められた。

段丘の形成はいつか。遺物が出土するのはⅢ層だけ（一部Ⅳ層再堆積層）であり、最も古いのは縄文時代中期後～末である。最古の遺物がこの時期というのは、駒板遺跡から約 10 ㎞下流にある金附遺跡と同じである（(財) 岩手県文化振興事業団　2006）。金附遺跡では、大きな自然堤防（Ⅴ層）に中期末の竪穴住居が掘られ、おそらく、このⅤ層は、穂貫田･駒板遺跡のⅣ層に相当するものであろう。しかし、金附遺跡で晩期末～弥生時代中期の集落が形成された新しい自然堤防（Ⅳｂ層）は、今回ははっきりしなかった。穂貫田・駒板遺跡のⅢ層の上部からは平安時代の遺物が出土し、この間に洪水堆積層は認められない。同じ河川でも、同じ時期に洪水が起こるとは限らないのであろう。

Ⅳ層より古いⅦ層（段丘）の形成はいつか。駒板遺跡から約 40 ㎞下流にある柳之御所遺跡周辺の沖積地を調査した野中（2005）によれば、三つの沖積段丘が認められ、Ｌ１面、Ｌ２面、そして現在の氾濫原であるＬ３面であり、「Ｌ２面は縄文時代後期には存在していたと考えられる」（同：p.41）とする。このＬ２面は、金附遺跡のⅣｂ層かⅤ層のどちらかに相当するのではないか。堆積時期と離水時期にはズレがあり特定しにくいが、そうだとすると、穂貫田・駒板遺跡のⅦ層は、Ｌ１面と関係するのか。Ｌ１面の形成時期は、最終氷期最盛期（約２万年前）とされているそうである。こんなに古くなるだろうか。「Ｌ１面は丘陵基部に限られて分布する」（同：p.40）というのも気になる。

日本各地の沖積面をまとめた高木勇夫氏によると、現沖積面を含めると２～５面の沖積面があり、地域によるバラツキが大きいようだ（高木　1985：p.54）。東北地方は、太平洋側では、沖積段丘と氾濫原低地の二つの沖積面がほぼ全域に分布し、沖積段丘は、名久井面、六戸面などに対比され、段丘上の火山灰に挟まれた泥炭は 2,140 ± 90 年 B.P. だそうである（同：p.49）。日本海側の津軽平野では、上位沖積面と下位沖積面に分けられ、上位の形成時期は 6,000～5,000 年 B.P.、下位は 2,240～840 ±85年B.P.ごろまでと考えられているようだ。柳之御所遺跡で特定されたＬ２面に近いものは各地で確認されているようである。ところで、仙台付近では、仙台下町段丘と呼ばれる沖積段丘が確認され、その地形面は完新世海進に対応しているそうである。穂貫田・駒板遺跡は内陸の遺跡なので何とも言えないが、Ⅶ層は、この仙台下町段丘くらいの年代がふさわしいように思われる。

(2) その後の地形

より多くの遺構や遺物が発見された穂貫田遺跡との違いは、駒板遺跡では高低差が著しく、より遅くまで低い部分が凹んでいたことである。ほぼ平らになったのは、穂貫田遺跡では、Ⅳ層上面かⅢ層下部辺りで縄文時代中期の終わり～後期初めころと推測されるが、駒板遺跡ではⅡ層で中～近世と推

測される。Ⅲ層下部から縄文時代後期前葉の土器、上部から平安時代の土器が多く出土するためである。Ⅳ層もⅡ層も基本的には洪水堆積層である。Ⅳ層は、柳之御所遺跡付近のＬ２面を形成する堆積層に相当するのであろう。そして、「奥州藤原氏滅亡後、鎌倉時代後期になると洪水頻度が高く」なったとされており（野中　2005：p.44）、Ⅱ層はおそらくこの時によるものと推測される。

参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集

高木勇夫　1985『条里地域の自然環境』古今書院

野中奈津子　2005「柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出」『平泉文化研究年報』第5号　岩手県教育委員会

2　穂貫田・駒板遺跡の歴史

・縄文時代中期後葉～末

穂貫田遺跡で大木９～10式古の土器片、駒板遺跡で大木８ｂ式の可能性もある土器片が出土。

・縄文時代後期前葉前半（宮戸Ⅰｂ式期）

土坑や焼土、比較的多くの土器を発見。駒板遺跡では、現在の水路の両側に集中するので、当時ここに川があり、その周りに人がいた可能性が高い。遺物の出土量から、ある程度の期間ここに寝泊まりしていたと思われるが、竪穴住居が見あたらず、何より石器の道具が全く発見されていないことから、“定住”というほど長期間住んでいなかった可能性が高い。また、駒板遺跡の南端から見つかった溝状の陥し穴状遺構の一つは、この時期の可能性があり、“高台”を狩猟の場としていた可能性もある。同様の遺跡が周囲に見られ（第Ⅱ章）、この地域で比較的遊動的な生活を営んでいたことが窺われる。

・縄文時代（後期中葉～）晩期前葉

穂貫田遺跡から大洞BC2式、駒板遺跡で後期中葉以降の可能性のある土器片が出土している。

・縄文時代晩期中～後葉（大洞Ｃ２～A1式期）

穂貫田遺跡では、土器が比較的多く出土し、特に南端の旧河道上のⅢ層中から多く発見されている。炭化物なども認められることから、ある程度ここで過ごしたことは確実であろう。ただし、遺構や石器がほぼ全く見つかっていないことから、後期前葉前半より短い時間だったと思われる。土偶が１片出土しているが、そのような活動にも土偶を伴うということであろうか。駒板遺跡でも僅かながら土器片が出土し、南端の高台の陥し穴状遺構一つはこの時期の可能性があり、当時の活動範囲であった可能性が高い。同様の遺跡が周囲にも認められ(第Ⅱ章)、遊動的な生活を営んでいたことが窺われる。

・弥生時代中期

穂貫田遺跡でこの時期の土器片が出土している。

・平安時代（９世紀中～10世紀初頭前後）

集落の拡散化によって（第Ⅱ章）、人々がやってきて集落が営まれた。穂貫田遺跡では、住居の数や鉄製品などの出土から（報告書抄録参照）、この時期に限れば周囲の集落（第Ⅱ章）と何ら遜色がなかったと推測されるが、集落の中心は北側の高い部分にあった可能性がある。また、駒板遺跡は、いまだ地形の凹凸が顕著であったためか、あまり住居は作られなかったようである。

・近世末以降

この間に起こった洪水によって、駒板遺跡も、穂貫田遺跡と同様にほぼ平らに埋まり、今と同様に水田が作られ、集落が営まれていたと思われる。

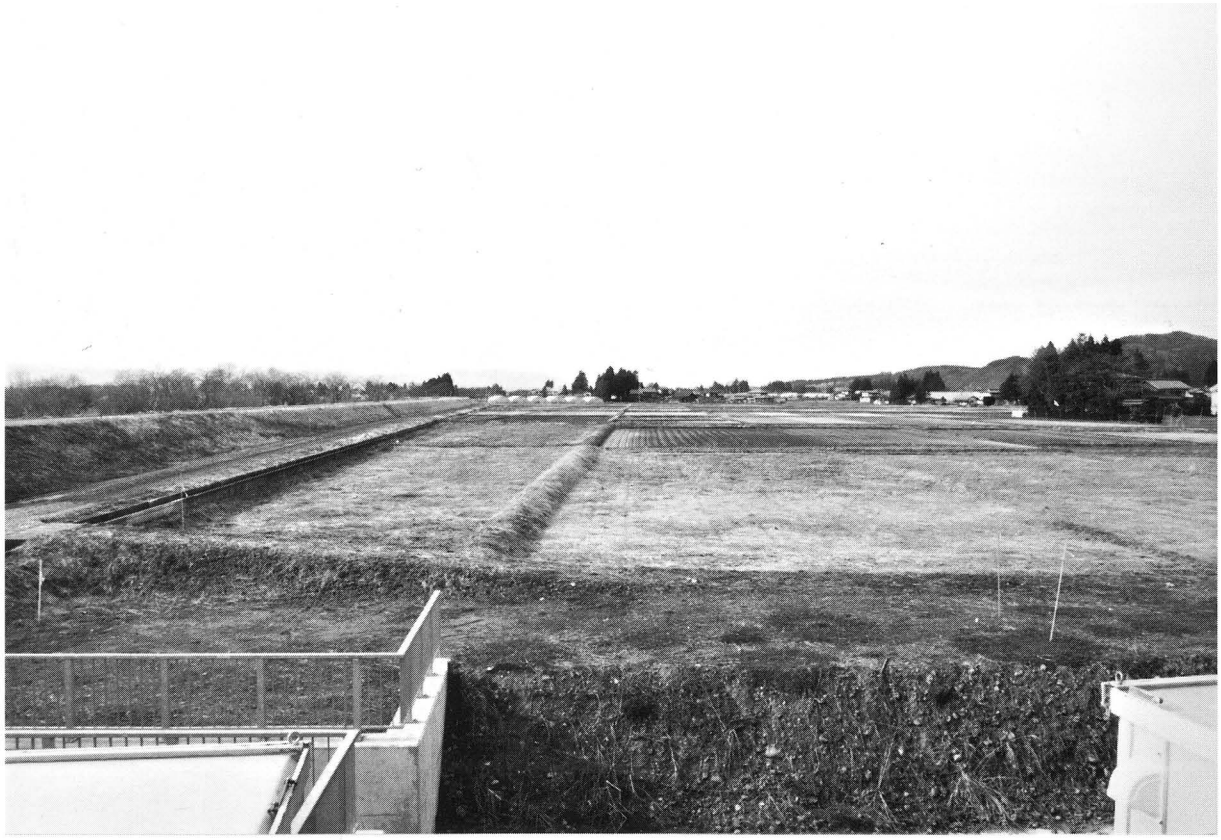
写　真　図　版

遺跡遠景（西側上空から）

遺跡遠景（東側上空から）

写真図版１　遺跡遠景

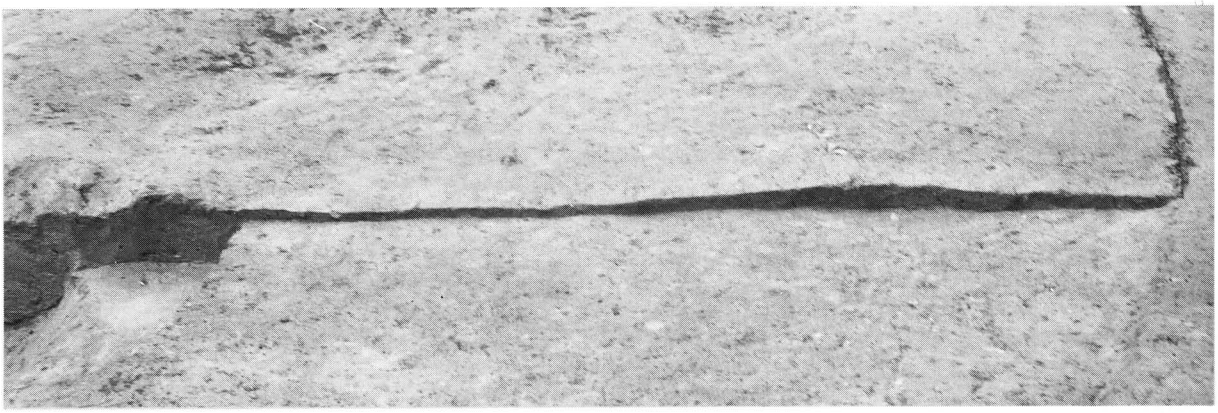
調査区全景（東側上空から）



調査前風景（南から）

写真図版２　調査区全景・調査前風景

第１号住居跡全景（西から）

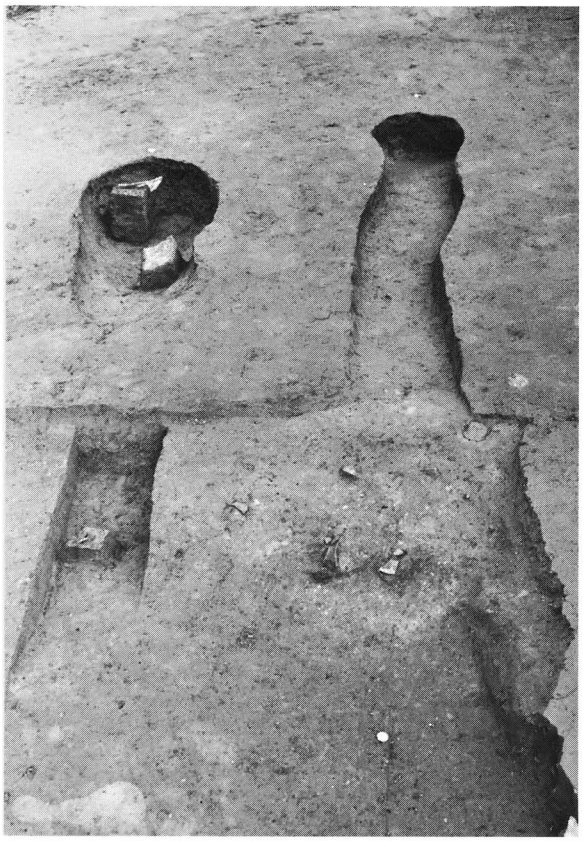


覆土断面（東西）

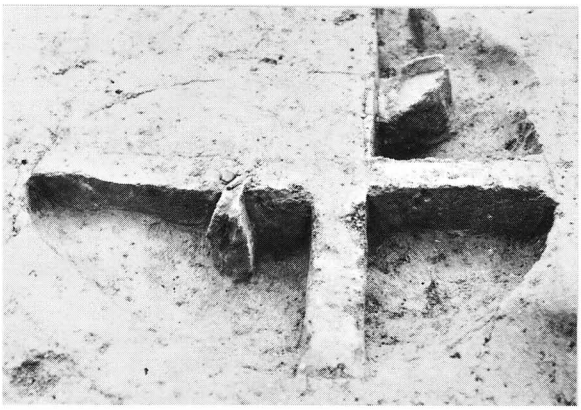
調査風景

南北カマド覆土断面（南から）

写真図版３　第１号住居跡(1)



南北カマド全景（西から）

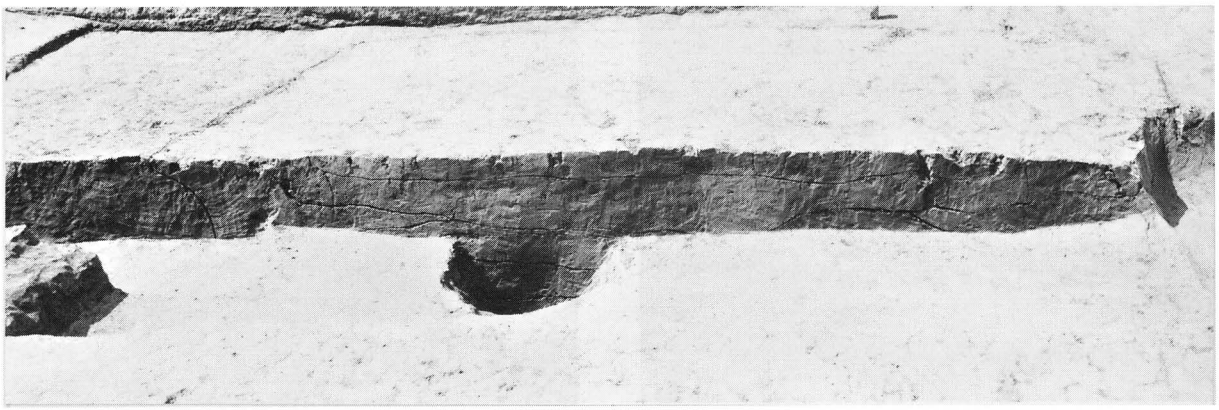


南カマド燃焼部断ち割り（南北）

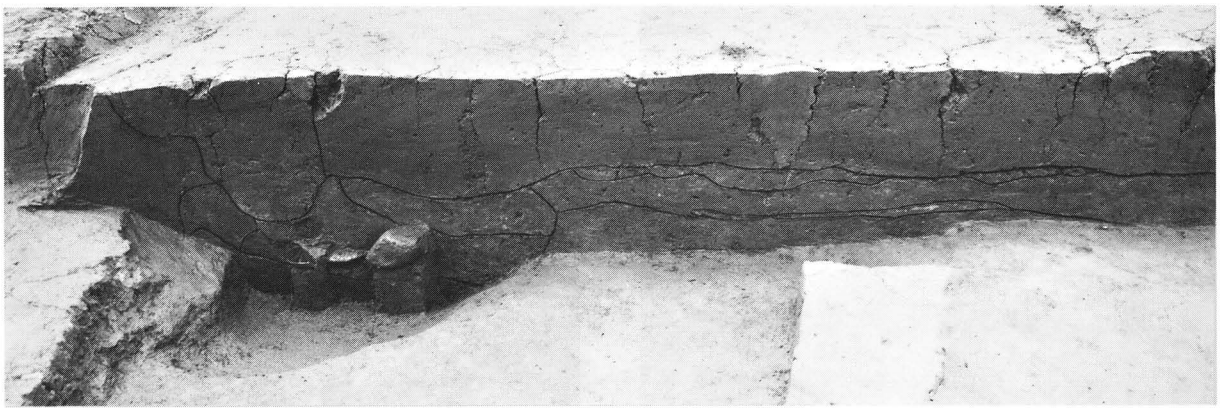
同（東西）

第２号住居跡全景（東から）

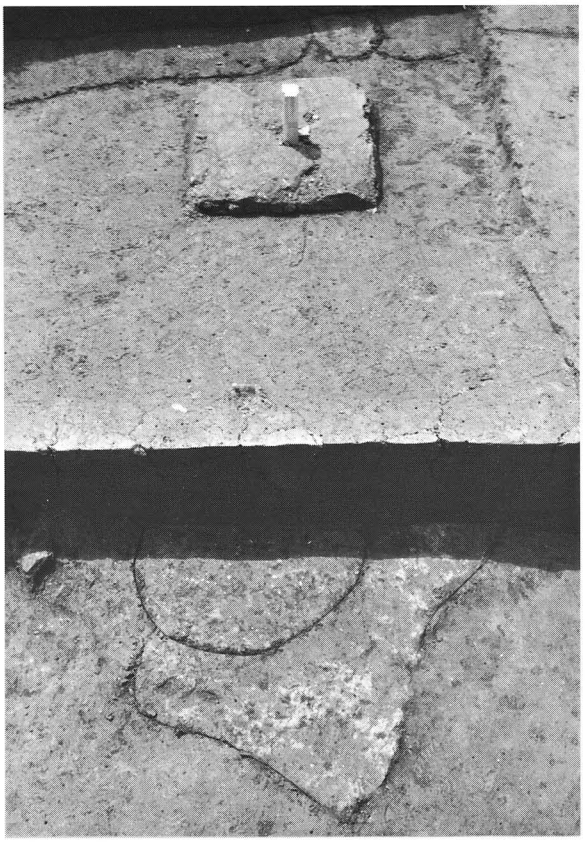
写真図版４　第１号住居跡(2)・第２号住居跡(1)



覆土断面（東西）

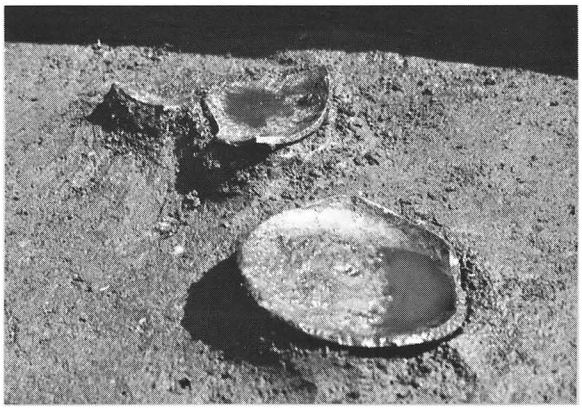


土坑？断面、焼土と貼床断ち割り（北から）



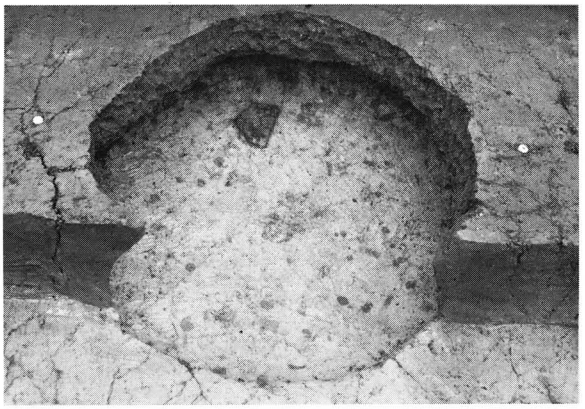
焼土と貼床（北から）

P. 1～3土器出土状況（上から）



同（横から）

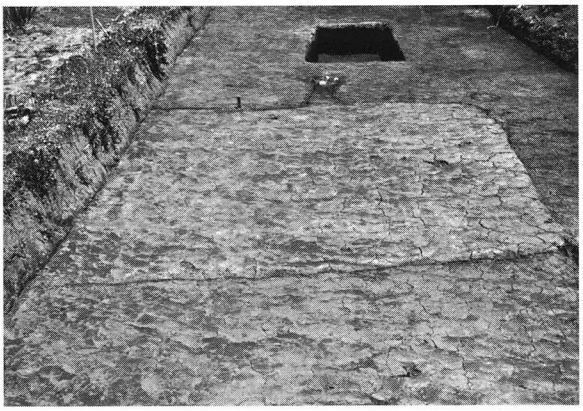
写真図版5　第2号住居跡(2)



第１号土坑

第３号住居跡（西から）

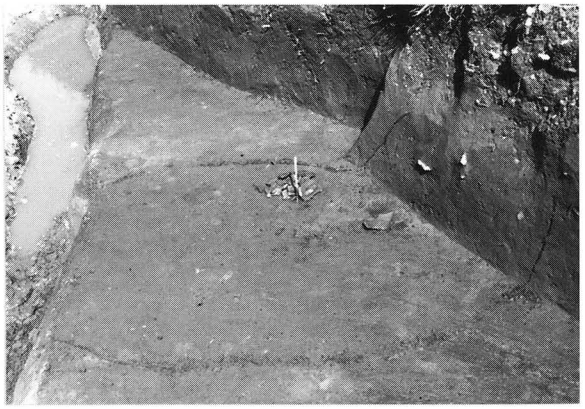
第４号住居跡（西から）



第５号住居跡（西から）

第６号住居跡（西から）

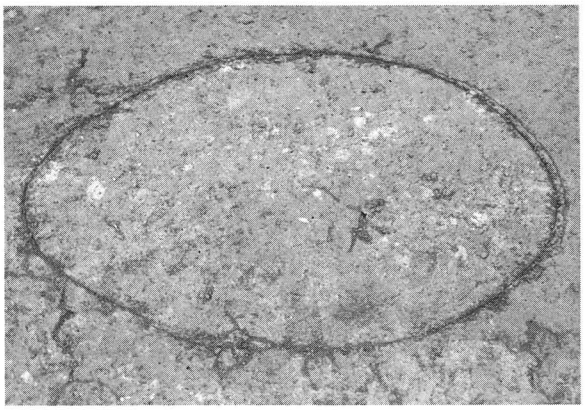
第７号住居跡（南から）



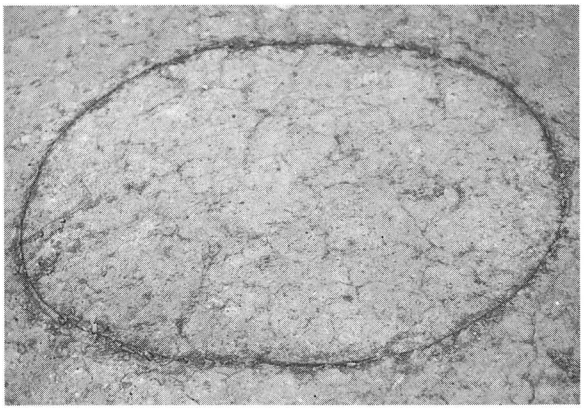
第２号土坑（西から）

写真図版６　第１号土坑、第３～７号住居跡、第２号土坑

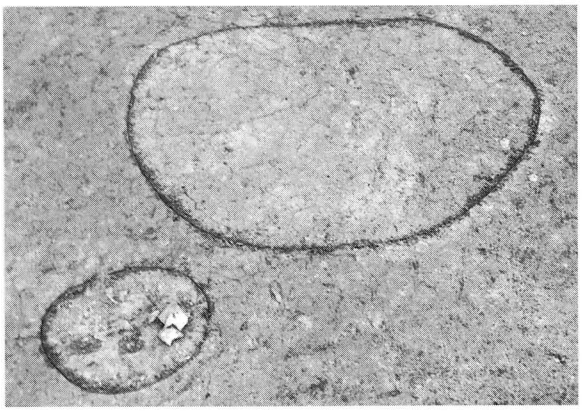
第３～５号土坑と第１号焼土（北から）



第３号土坑（西から）



第５号土坑（西から）

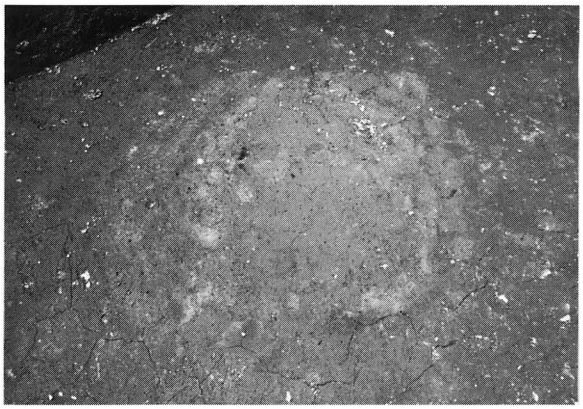


第４号土坑と第１号焼土（東から）

第８号土坑（北西から）

第６、７号土坑（南から）

写真図版７　第３～８号土坑、第１号焼土

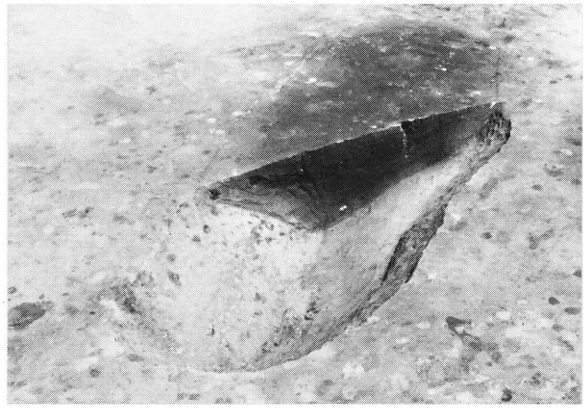


第２号焼土（東から）

第３号焼土（北西から）

第４号焼土（東から）

第５号焼土（東から）



調査区南東端疑似現象

北部ビニールハウス東側

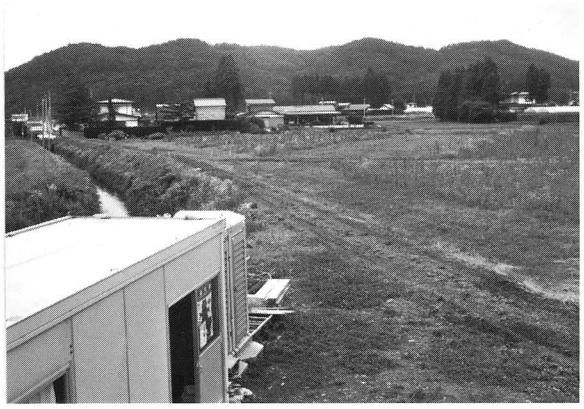
調査区南端旧河道（南西から）

同（西から）

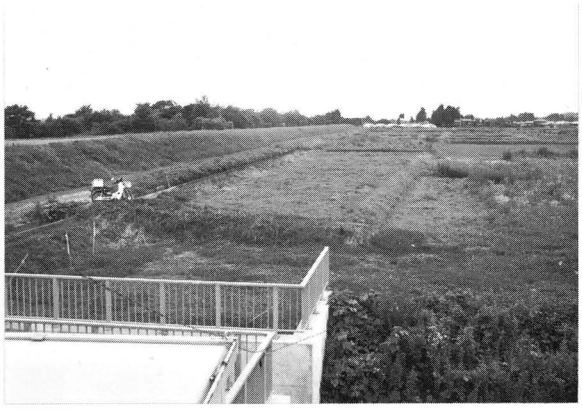
写真図版８　第２～５号焼土、地形ほか

調査区全景（東側上空から）

調査前風景（北東部）



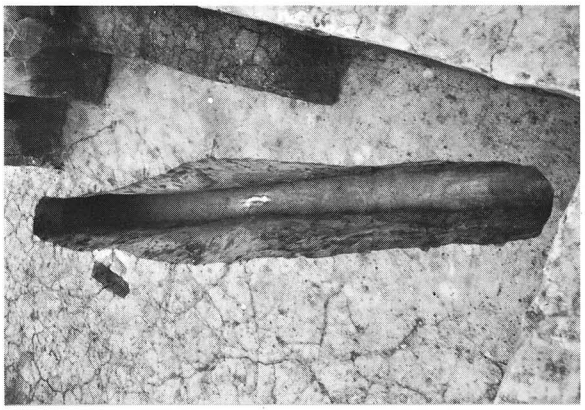
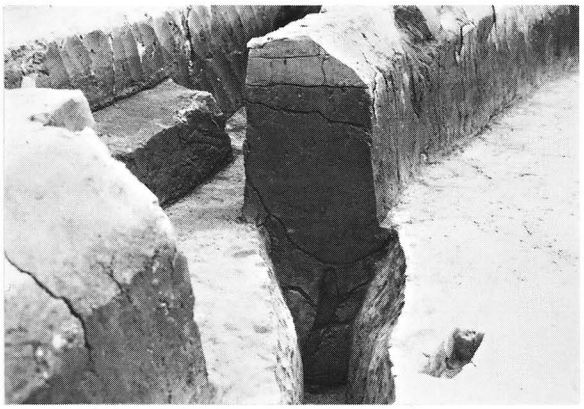
同（南西部）



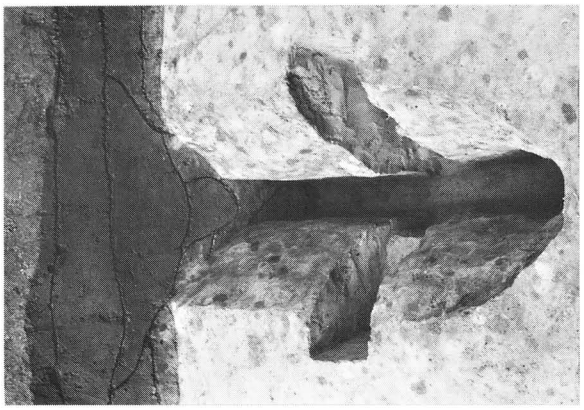
同（北西部）

同（南東部）

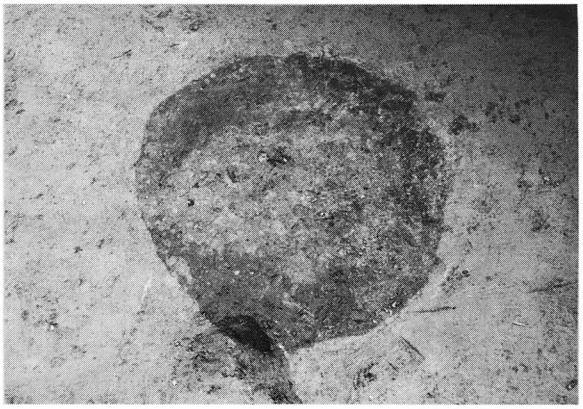
写真図版９　調査区全景・調査前風景

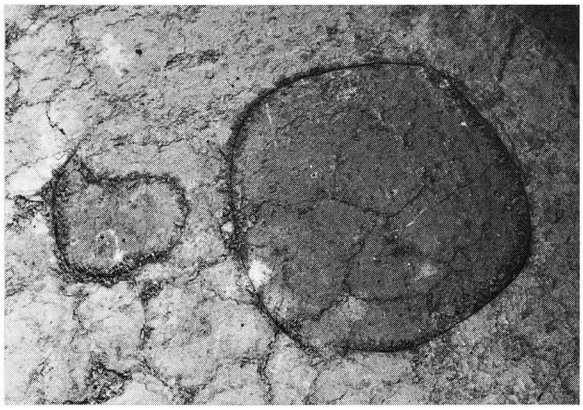
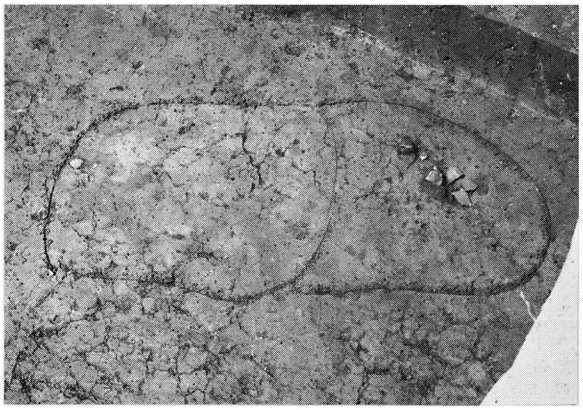
第１号陥し穴状遺構



第２号陥し穴状遺構



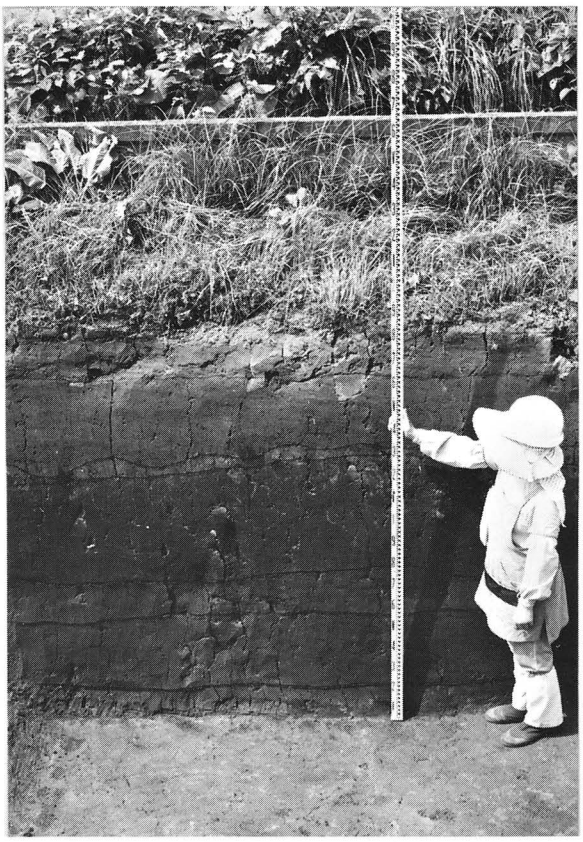
第１号土坑（東から）

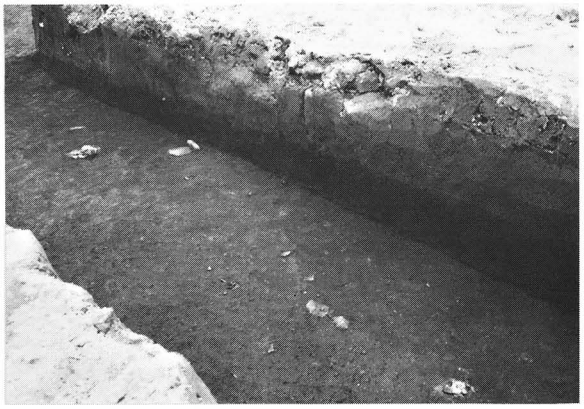
第２号土坑（北から）　　第１号焼土（南東から）

写真図版 10　陥し穴状遺構、土坑、焼土

堤防脇調査区



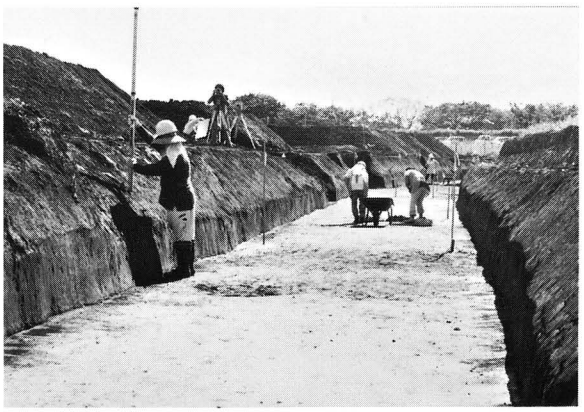
同　土層断面



同　遺物出土状況遠景（南から）

同　近景（西から）

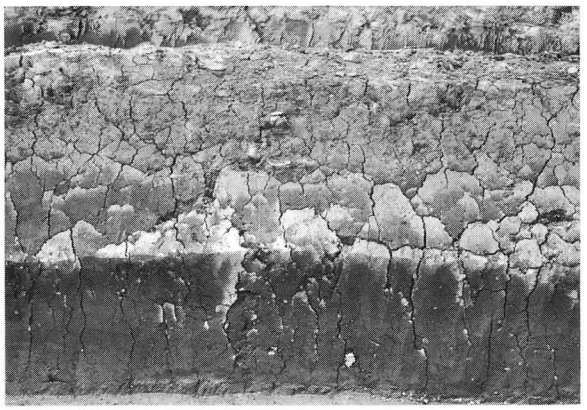
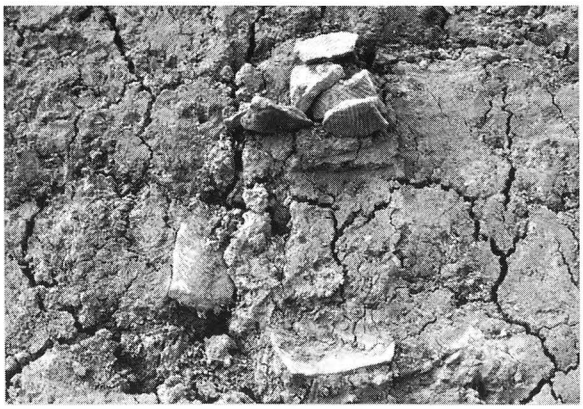
排水路北側（西から）



排水路南側（東から）

同　検出土坑？

写真図版 11　調査状況(1)

排水路南土器出土状況（南から）

調査区最北旧河道（北から）

排水路北の山側

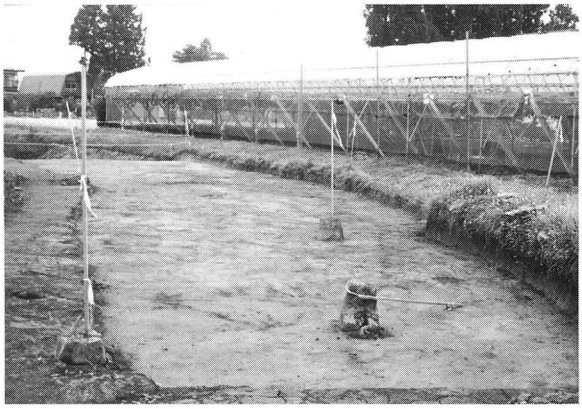
排水路南側（西から）

南半山側ビニールハウス脇（北から）

写真図版 12　調査状況(2)

南半堤防側（北から）

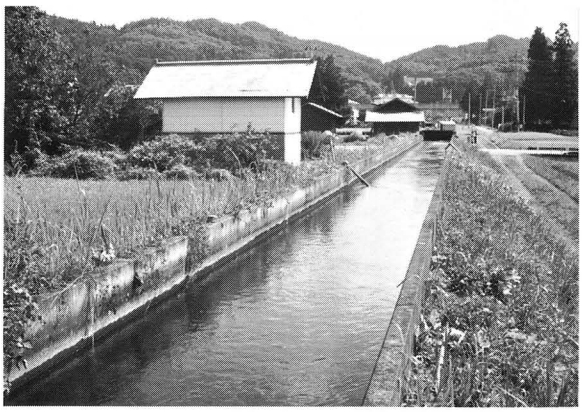
同（南から）



南半山側ビニールハウス脇（南から）

調査区最南端（西から）

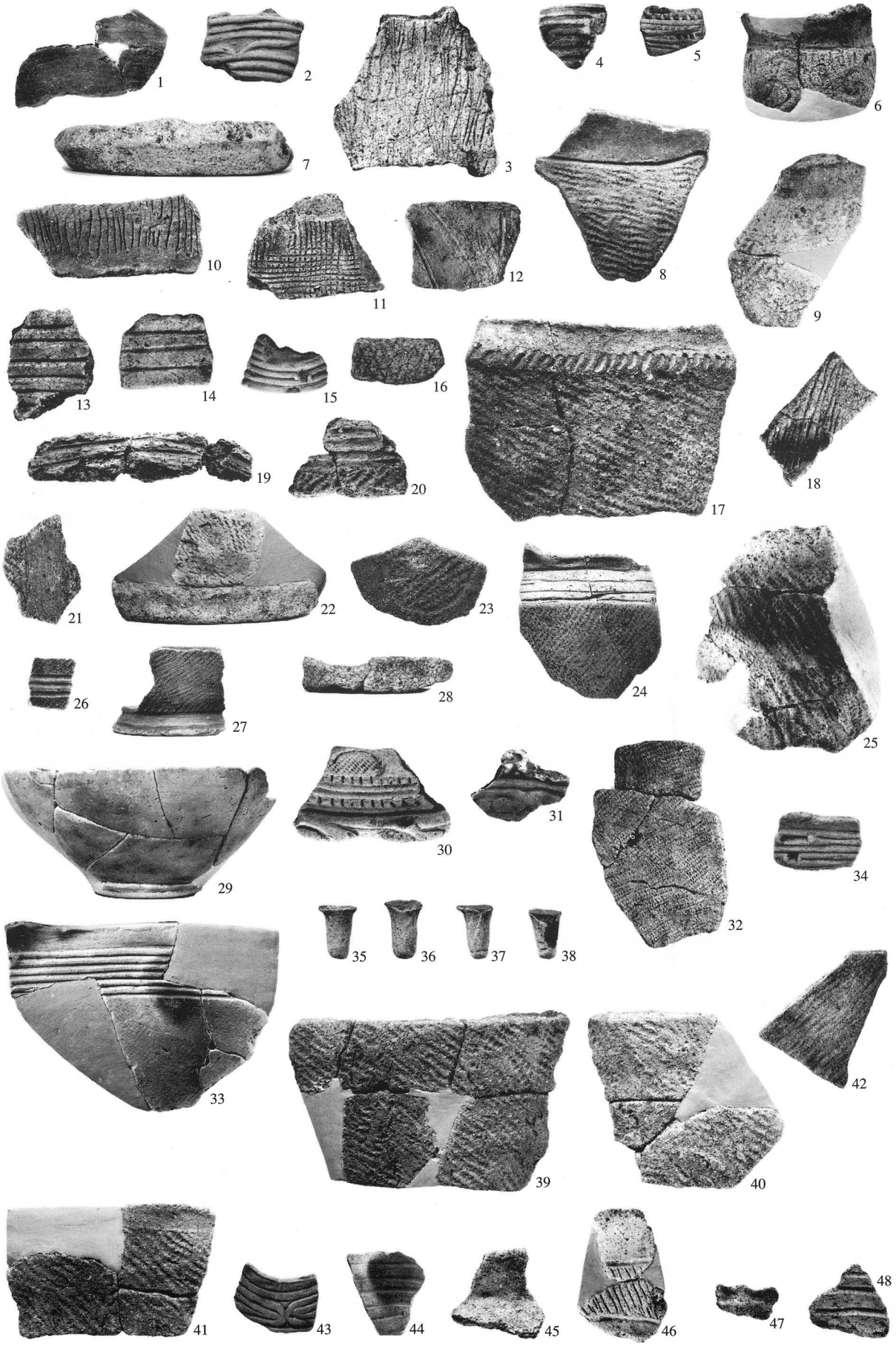
山口遺跡遠景（西から）



同　水路（西から）

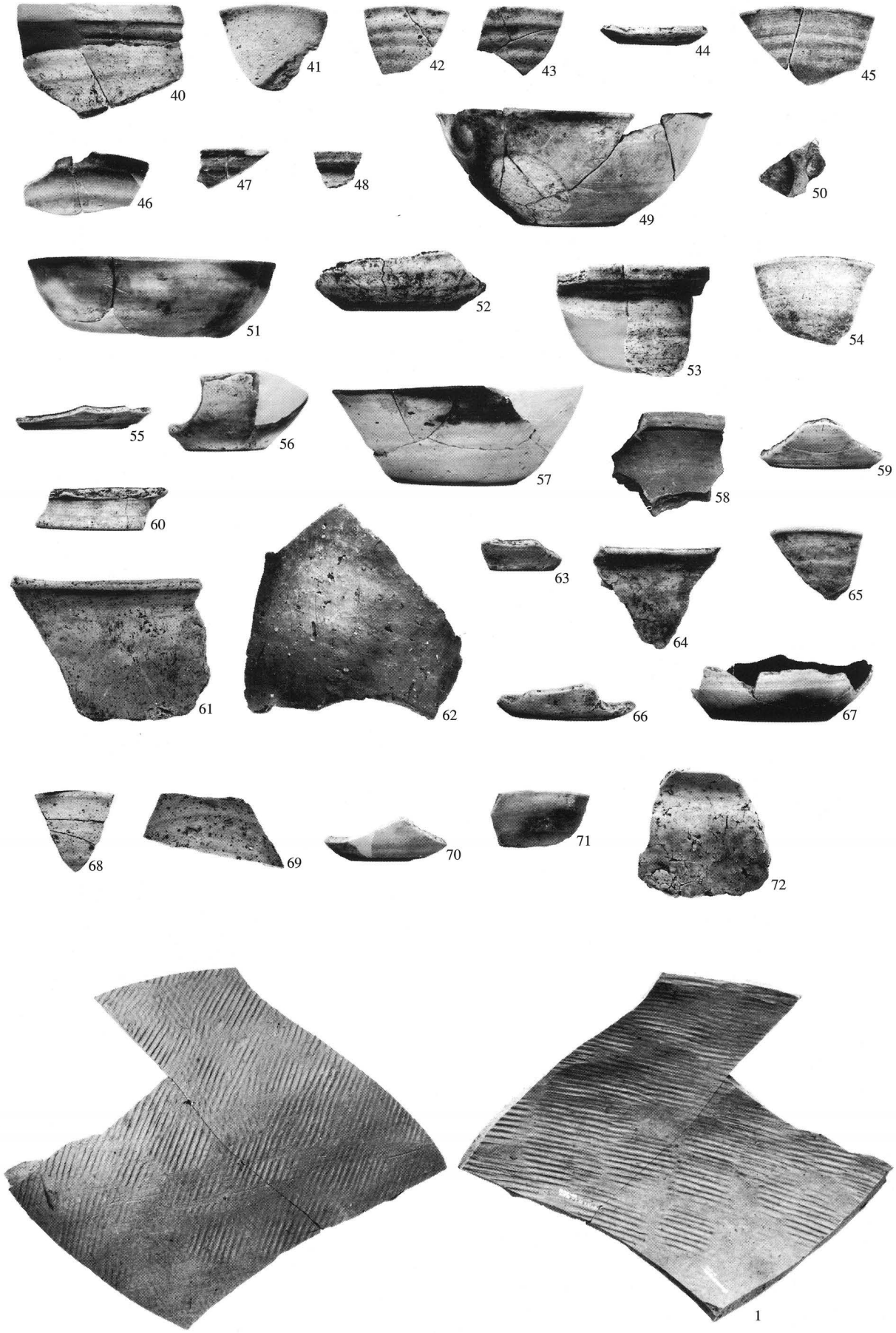
同　調査状況（西から）

写真図版 13　調査状況(3)・山口遺跡

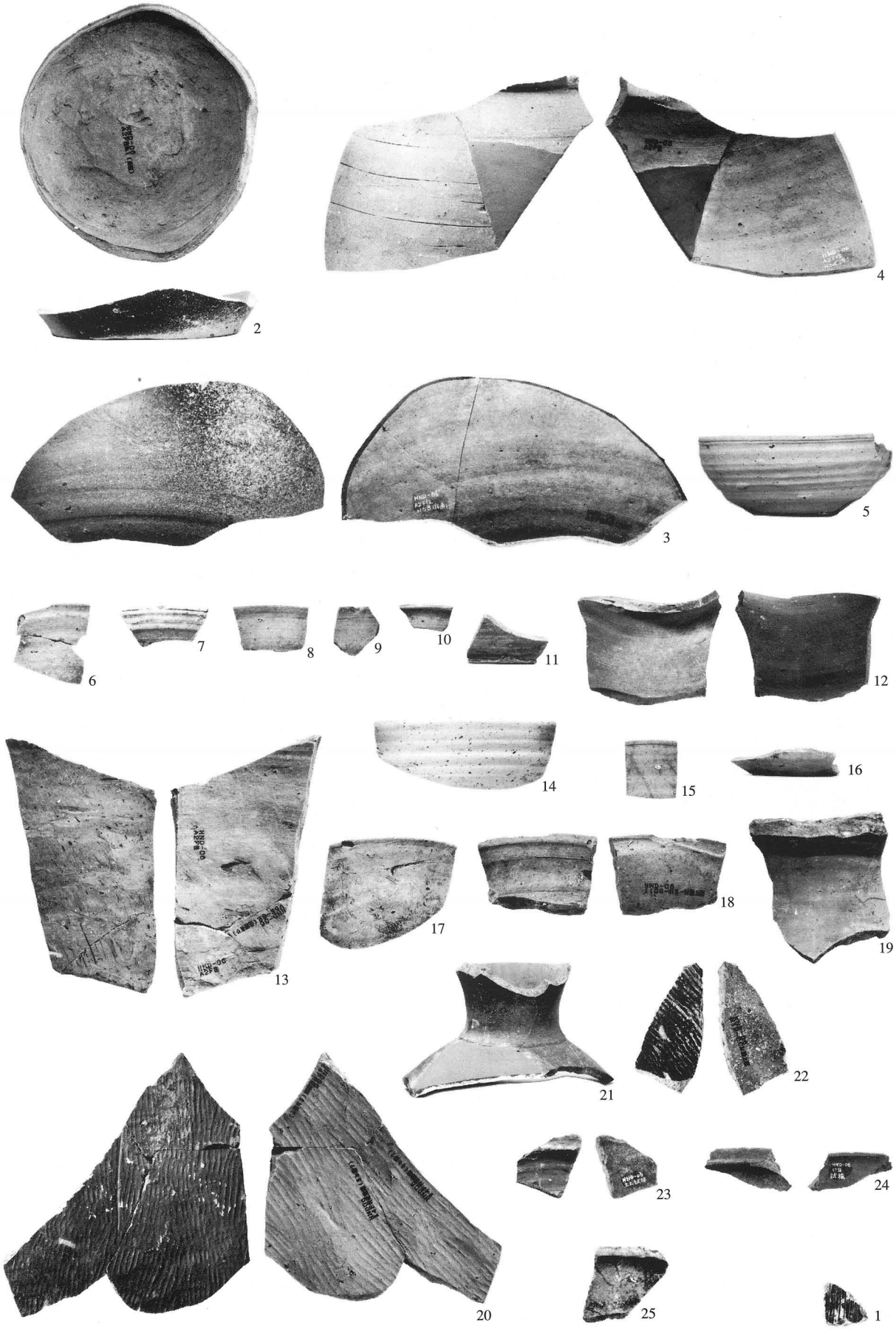


写真図版 14　縄文・弥生土器（s=1/3）

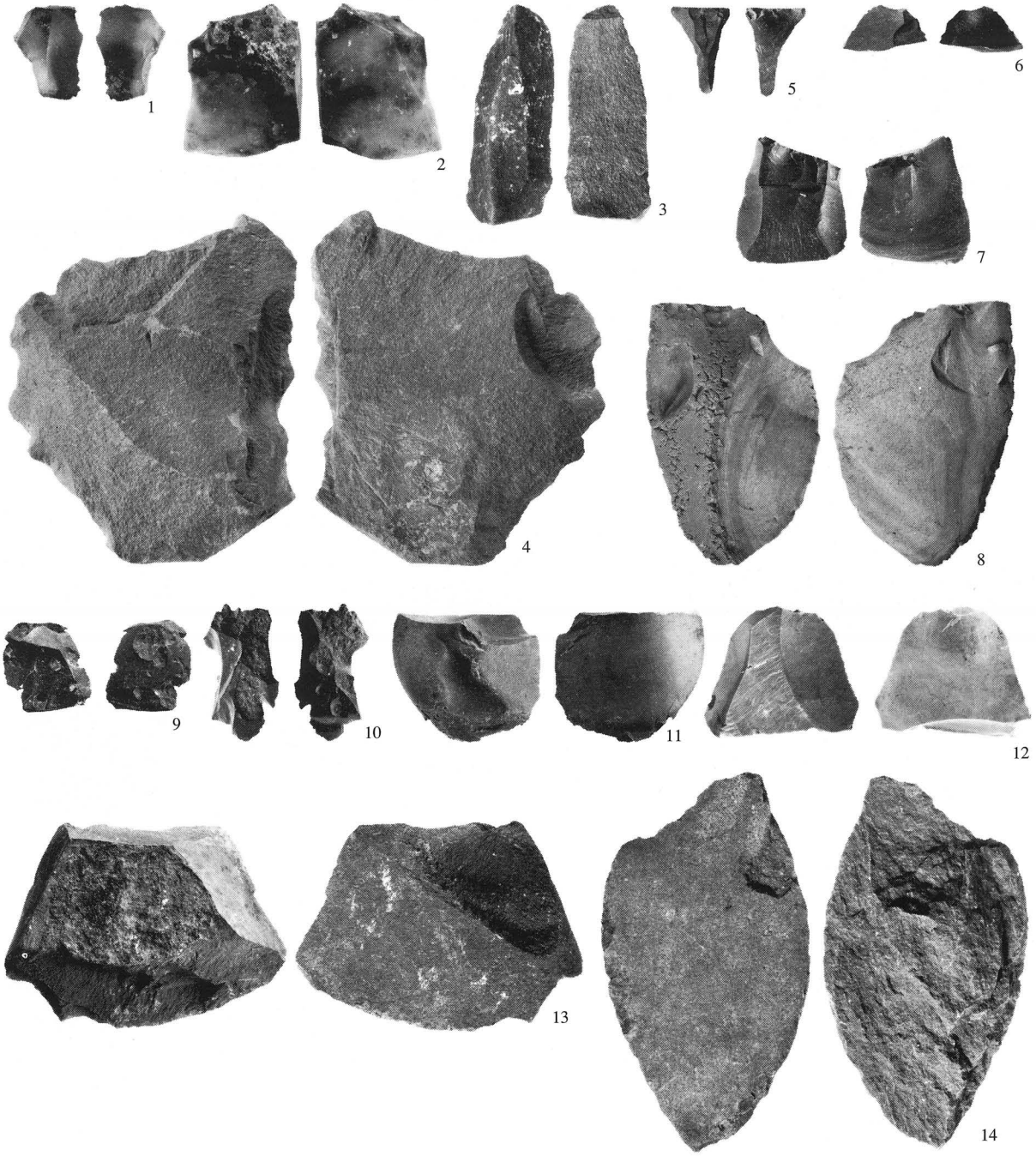
写真図版 15　土師器(1)（s=1/3）



写真図版 16　土師器(2)・須恵器(1)（s=1/3）



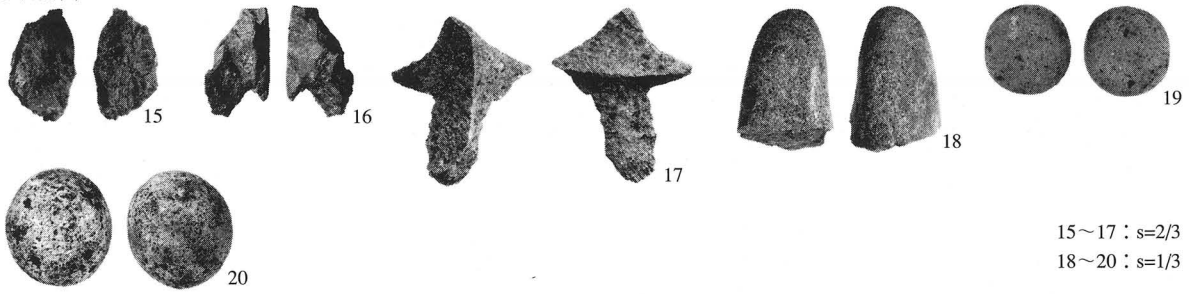
写真図版 17　須恵器(2)・陶器



No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ	（g）				
1	Ⅱ４Ｆ～Ⅱ６Ｅ・Ⅲ層中心	剥片	2.2	1.6	0.8	1.42	頁岩（新生代新第三紀・奥羽）			
2	Ⅳ２Ｈ、３Ｇ・カクラン中心	剥片	3.7	3.2	1.6	13.48	珪質頁岩（→）		新生代新第三紀・奥羽山脈	
3	Ⅶ６Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	5.1	2	1	9.76	頁岩（古生代・北上山地）			
4	Ⅸ３Ｇ・Ⅳ層上面	剥片	7.6	7.3	1.8	119.39	頁岩（古生代・北上山地）		打製石斧類製作時の剥片？	
5	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅱ層中心	剥片	2.05	1.2	0.3	0.48	頁岩（古生代・北上山地）			
6	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅱ層中心	剥片	2	1.1	0.3	0.51	頁岩（古生代・北上山地）			
7	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	3	2.6	0.4	4.26	頁岩（古生代・北上山地）			25図
8	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	6.1	4.1	1.6	34.19	頁岩（新生代新第三紀・奥羽）			
9	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	2.1	2	0.4	1.2	頁岩（古生代・北上山地）		表面クレーター状に剥落・10と同一？	
10	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	3.1	1.8	0.6	1.5	頁岩（古生代・北上山地）		〃・9と同一個体？	
11	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片	3.8	3.25	0.9	10.58	頁岩（新生代新第三紀・奥羽）			
12	き区試掘	剥片	2.9	3.5	0.9	7.81	頁岩（新生代新第三紀・奥羽）			25図
13	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片？	6.2	5.6	2	72.69	頁岩（古生代・北上山地）		自然に割れたもの？	
14	ⅩⅡ３～４Ｉ・Ⅲ層中心	剥片？	8.6	4.7	1.2	42.83	頁岩（古生代・北上山地）		自然に割れたもの？	

写真図版 18　石器(1)

●石器(2)



15～17：s=2/3
18～20：s=1/3

No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ	（g）				
15	ⅩⅡ３～４Ⅰ・Ⅱ層中心	剥片？	2.2	1.3	0.4	1.12	頁岩（古生代・北上山地）			
16	ⅩⅡ３～４Ⅰ・Ⅲ層中心	剥片？	2.2	1.3	0.4	1.08	頁岩（古生代・北上山地）			
17	ⅩⅡ３～４Ⅰ・Ⅲ層中心	剥片？	3.5	2.8	0.6	2.41	ホルンフェルス（→）		中生代白亜紀・北上山地？	
18	Ⅴ７～８Ｄ・Ⅲ層	敲磨器？	6	3.8	3.1	68.46	細粒閃緑色岩（→）	欠損	中生代白亜紀・北上山地？	
19	第１号住居　p.7（南カマド５層）	不明	3.5	3.4	1.5	28.25	安山岩（→）		新生代新第三紀・奥羽山脈・表裏摩滅	
20	Ⅱ２Ｇ付近重機で剥いだ面（Ⅱｂ層？）	不明	4.5	4	3.3	58.1	デイサイト（→）		新生代新第三紀・片面摩滅？	

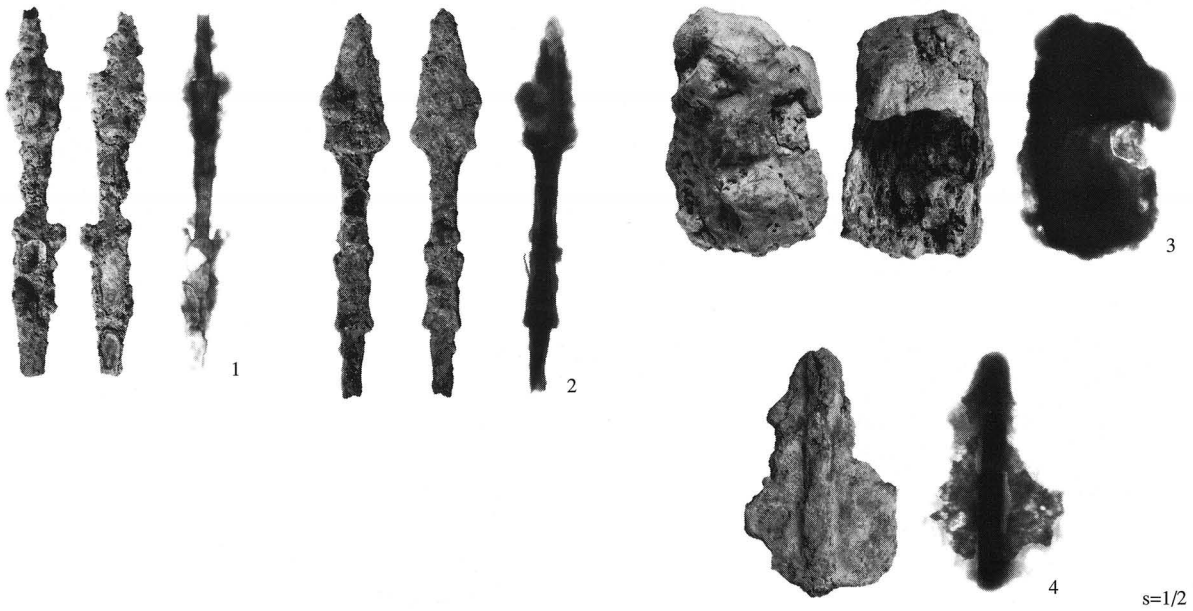
●アスファルト塊

s=2/3

NO.	出土地点・層位	形状	最大計測値（cm）			重量	産地	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ	（g）				
1	Ⅶ５Ⅰ～６Ⅰ・Ⅲ層	ひねり板状	4.35	3.3	1.8	15.44	未鑑定	欠損？	表面に何か付着？	

●土製品

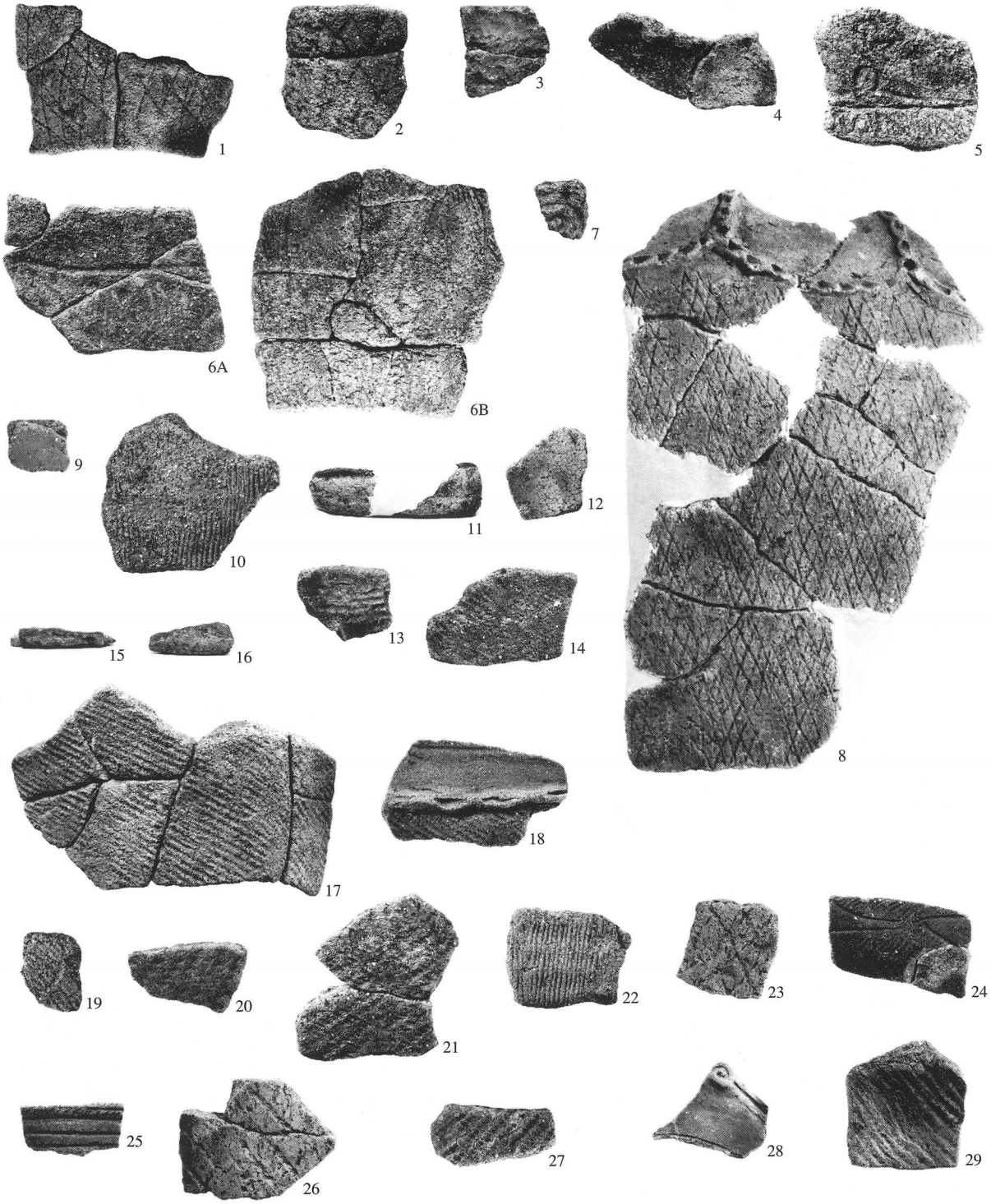
●鉄製品



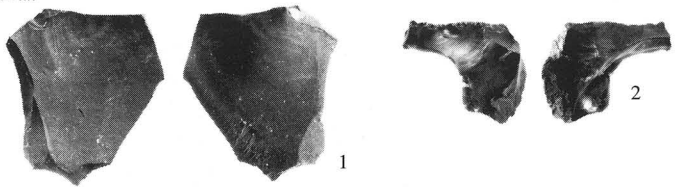
s=1/2

写真図版 19　石器(2)・アスファルト塊・土製品・鉄製品

●縄文土器



●石器



No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量	石　質（産地）	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ	（g）				
1	ＸＸＩ８Ａ　p. ３？Ⅲ層下部	剥片	2.5	3.2	0.6	5.04	頁岩（古生代・北上山地）			p.56
2	ＸＸＩ８Ａ　p. ３？Ⅲ層下部	剥片	2.1	2.6	1	3.34	頁岩（古生代・北上山地）			p.56

写真図版 20　縄文土器（s=1/3）・石器（s=2/3）

報告書抄録

ふりがな	ほぬきだ・こまいた・やまぐちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	穂貫田・駒板・山口遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第517集
編著者名	金子昭彦
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2008年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
穂貫田遺跡	岩手県花巻市東十二丁目22地割60－4ほか	03205	ME36－2313	39度21分34秒	141度08分36秒	2006.04.07～2006.07.14	6,200 m²	経営体育成基盤整備事業（ほ場整備）
駒板遺跡	岩手県花巻市東十二丁目23地割31－1ほか		ME36－2371	39度21分17秒	141度08分45秒	2006.07.18～2006.09.19	5,285 m²	
山口遺跡	岩手県花巻市東十二丁目23地割169－3ほか		ME46－0315	39度21分14秒	141度09分02秒	2006.09.01～2006.09.19	491 m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穂貫田遺跡	集落跡？	縄文時代	袋状土坑　1基 土坑　1基？ 焼土　1基	縄文土器大コンテナ（32×42×30cm）1箱弱 →後期前葉◎、晩期中～後葉◎中期末？△、晩期前葉△ 石器製作時の剥片17点 晩期後葉？土偶1点 アスファルト塊1点？	
	散布地	弥生時代		中期土器片1	
	集落跡	平安時代（9世紀中～10世紀初頭）	竪穴住居跡　7棟 土坑　6基？ 焼土　2～4基	土師器・須恵器大コンテナ（32×42×30cm）1箱弱 鉄製品4点（鉄鏃2、不明2）？ 土錘？1点？ 焼粘土塊1	
	集落跡	近世後半？		陶磁器片（擂鉢）？	
駒板遺跡	集落跡 散布地	縄文時代後期前葉、晩期中～後葉	土坑　2基 焼土　1基 陥し穴状遺構　2基	縄文土器小コンテナ（32×42×8cm）1箱弱 →後期前葉◎、晩期中～後葉△ 石器製作時の剥片2点	現在の水路を挟んで「集落」が営まれていたようである。
	集落跡	平安時代		須恵器小片	
山口遺跡	集落跡	古代			撹乱により、なし

要約

ほ場整備事業に伴う水路や道路予定地を対象としたため、調査範囲は狭くて長い。

一部精査もしているが、確認調査が中心（調査面積の内訳は、例言参照）。

穂貫田遺跡では、縄文時代後期前葉、晩期中～後葉の「集落跡」、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の集落跡、駒板遺跡では、縄文時代後期前葉の「集落跡」が発見された。

縄文時代の「集落跡」は、竪穴住居跡や石器のトゥールが発見されていないことから、長く住み続ける場所ではなく、野営地に近かったと思われる。

駒板遺跡の「野営地」は、現在の水路の両脇にあり、当時からここに水が流れていた可能性が高い。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第517集

穂貫田・駒板・山口遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

印　刷　　平成20年12月19日

発　行　　平成20年12月26日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話(019)638－9001

発　行　岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
〒024－8520　岩手県北上市芳町２－８
電話(0197)65－2733
(財)岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話(019)654－2235

印　刷　第一印刷有限会社
〒020－0122　岩手県盛岡市みたけ四丁目６－40
電話(019)646－6001

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008